―茨城県土浦市―

権現前遺跡

―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2000.3

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

権現前遺跡

ごんげんまえいせき

— 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2000．3

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳などの遺跡が数多く存在しています。このような遺跡は当時の人々の生活や環境などを知る手がかりとなります。また、現代に生きる我々が豊かな生活を送ることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためには重要なことです。

この度、株式会社スーパーマルモの店舗建設に伴い、権現前遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の成果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、株式会社スーパーマルモをはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成12年３月

土浦市教育委員会
教育長　尾見　彰一

例　言

1．本書は、株式会社スーパーマルモ店舗建設事業に伴う、土浦市摩利山新田79-1外に所在する権現前遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は株式会社スーパーマルモの委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
3．調査期間は1997年(平成９年)11月25日から同年12月20日である。
4．発掘調査は窪田恵一、本書の編集は福田礼子が担当した。
5．本書の執筆は第１章を黒澤春彦、その他を福田が行なった。
6．整理作業の分担は下記の通りである。
　遺物実測：福田・天谷瑛子・新井栄子・石山春美・川田光子・富田シズエ・長嶺道子
　　浜田久美子・福田卓志
　トレース：福田・小松崎廣子・松川さち子
　図　　版：福田
　写　　真：黒澤（遺構写真は窪田が撮影した。）
7．本調査及び報告書作成には下記の諸機関・方々により御協力・御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
　株式会社スーパーマルモ・服部建築設計事務所・羽成　茂・宮下邦雄・服部一男・中島義隆
　大関　武・木村時政・安達浩二・小柳道雄・本田信之
8．本遺跡の資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡　例

1．遺構番号のうち欠番となっているものは、調査の過程で遺構ではないと判断したものである（第５・８号土坑)。
2．遺構・遺物の縮尺は原則として下記の通りである。その他の場合も図に明記してある。
　遺構－住居跡……1/60　　土坑……1/40
　遺物－土器……1/4・1/3　　土製品……1/3
　　石器……1/3・1/2・1/1
3．遺構図の標高は海抜高を表し、m単位である。
4．「K」は撹乱である。
5．遺構図・遺物図中のスクリーントーンは焼土・繊維土器を表す。
6．遺構図中の破線は推定線を示している。
7．ピットの数値は住居跡床面、土坑底面からの深さである。
8．土層観察における色相の判断は『新版　標準土色帖』(日本色研事株式会社）を使用した。
9．遺物出土状況図中の記号は　●－土器、▲－石器を表す。
10．記載中の（　）は現存値、[　] は推定値を表す。
11．出土遺物図版の遺物№と観察表中の№、そして写真図版の№は符号する。

土浦市遺跡調査会組織（平成９年度・10年度）

会　長　須田直之（土浦市文化財保護審議会長）

副会長　尾見彰一（同市教育委員会教育長）

理　事　大塚 博（同市文化財保護審議会委員）　五頭英明（同市企画調整課長）　出地隆治　古渡善平（同市区画整理課長）　坂入 勇　萩野房男（同市建築指導課長）　石神進一（同市都市計画課長）　細田俊雄　岡田和則（同市耕地課長）　内海崎保生（同市土木課長）　岩沢 茂（同市教育委員会文化課長）

監　事　中川茂男（同市教育委員会教育次長）　小野政夫（同市監査事務局長）

幹事長　宮本 昭（同市教育委員会文化課長）　来栖 稔（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）

幹　事　矢口俊則（上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長）　萩島 優（同市教育委員会文化課課長補佐）　小貫俊男（同市教育委員会文化課主査／課長補佐）　塩谷 修（土浦市立博物館係長）　石川 功　榎 陽介　黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）　中澤達也（土浦市立博物館主幹）　関口 満　橋場君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事）　宮本礼子（同市教育委員会文化課主事）

調 査 者 名 簿

試掘担当　黒澤春彦　上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員
　　黒田友紀　上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員

調査担当　窪田恵一

調　査　員　鶴町明子

整理担当　福田礼子

事務担当　黒澤春彦
　　鈴木ひと美

発掘参加者

市村けい子　河合淳子　小角みや子　鶴町きよい　中島とみ子　中島 実　中島よし子　中島義隆　中島よしい　山中順子　山中美千子

整理参加者

天谷瑛子　新井栄子　石浜敏子　石山春美　大久保由紀子　大坪美知子　川田光子　小松崎廣子　富田シズエ　長嶺道子　浜田久美子　槙田整子　松川さち子

目　次

例言
凡例
土浦市遺跡調査会組織
調査者名簿

第１章　調査経過 …… 1
　第１節　調査に至る経過
　第２節　調査経過

第２章　遺跡概観 …… 4

第３章　縄文土器の分類基準 …… 10

第４章　発見された遺構と遺物
　第１節　遺構
　　１．住居跡 …… 11
　　２．土坑 …… 25
　第２節　遺構外出土遺物
　　１．土器 …… 39
　　２．石器 …… 43

第５章　まとめ …… 44

参考・引用文献
報告書抄録
写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　試掘坑配置図 …… 3
第３図　遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　基本層序 …… 7
第５図　周辺の遺跡 …… 8
第６図　遺構配置図 …… 12
第７図　第１号住居跡 …… 13
第８図　第１号住居跡遺物出土状況 … 14
第９図　第１号住居跡出土遺物－１ … 15
第10図　第１号住居跡出土遺物－２ … 16
第11図　第１号住居跡出土遺物－３ … 17
第12図　第２号住居跡 …… 18
第13図　第２号住居跡出土遺物 …… 20
第14図　第３号住居跡 …… 22
第15図　第３号住居跡遺物出土状況 … 23
第16図　第３号住居跡出土遺物 …… 24
第17図　第１号土坑・出土遺物 …… 26
第18図　第２・３・４号土坑・
　　第４号土坑出土遺物 …… 28
第19図　第６号土坑・出土遺物 …… 29
第20図　第７号土坑・出土遺物 …… 30
第21図　第９・10号土坑・出土遺物 … 31
第22図　第11号土坑・出土遺物 …… 32
第23図　第12・13号土坑・出土遺物 … 34
第24図　第14号土坑・出土遺物 …… 35
第25図　第15号土坑・出土遺物 …… 36
第26図　第16・17・18号土坑 …… 37
第27図　第19号土坑・出土遺物 …… 38
第28図　遺構外出土遺物－１ …… 40
第29図　遺構外出土遺物－２ …… 42

写　真　図　版

ＰＬ１　試掘確認状況　調査終了状況
ＰＬ２　第１号住居跡完掘　第１号住居跡遺物出土状況　第２号住居跡完掘
ＰＬ３　第３号住居跡完掘　第３号住居跡遺物出土状況　第３号住居跡ピット内遺物出土状況
ＰＬ４　第１～４号土坑　第６・７号土坑
ＰＬ５　第９～16号土坑
ＰＬ６　第17～19号土坑　テストピット土層断面　作業風景
ＰＬ７　第１号住居跡出土遺物
ＰＬ８　第１号住居跡出土遺物
ＰＬ９　第１号住居跡出土遺物　第２号住居跡出土遺物
ＰＬ10　第３号住居跡出土遺物
ＰＬ11　第１・４・６・７号土坑出土遺物
ＰＬ12　第９～15号土坑出土遺物　第19号土坑出土遺物
ＰＬ13　遺構外出土遺物
ＰＬ14　遺構外出土遺物

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過

1997年(平成９年)６月10日に株式会社スーパーマルモより、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が土浦市教育委員会に提出された。申請地は周知の遺跡である権現前遺跡や宮前遺跡が隣接しているため埋蔵文化財の存在する可能性が考えられる場所である。６月18日に現地踏査を行ったところ、縄文土器の散布が見られたため、縄文時代の集落跡等、遺跡の存在が予想された。

当教育委員会では９月24日から25日にかけて、遺跡の範囲と性格等内容把握のために試掘確認調査を実施した。調査は幅２ｍのトレンチを５ヶ所、全長179ｍ設定し、ハードローム上面まで掘り下げた。その結果、開発区北側から縄文時代前期、中期の土器片や遺構が発見された。遺構の確認面は、ソフトローム上面である。トレンチの状況から範囲は約500㎡で、縄文時代前期後半と中期の集落跡であることが判明した。

試掘確認調査の結果をもとに事業者と協議を行ったが、工事の内容上、現状保存は困難であるということであった。そのため、発掘調査による記録保存を行うことで合意した。今回発見された遺跡は、周知の遺跡である権現前遺跡と同一の遺跡として扱うことにした。

調査は土浦市遺跡調査会（会長 須田直之）に委託し、11月18日、教育委員会（教育長 尾見彰一）が立会い者となり事業者と当調査会で契約を締結した。

書類上の手続きは９月24日付けで株式会社スーパーマルモから発掘届（57条２）が提出され、９月25日に進達し、発掘調査の報告（98条２）については12月５日に提出した。

第２節　調査経過

発掘調査は1997年(平成９年)11月25日から12月20日まで19日間実施した。主な調査内容は下記のとおりである。

11月25日　本日より調査を開始する。器材搬入後、遺構確認のための精査を行う。並行して基準点の設置を行う。ラインは調査区に合わせた。

26日　雨のため作業中止。

27日　遺構確認を行う。結果、住居跡３軒と土坑12基が確認された。

28日　第１～３号住居跡検出開始。

12月２日　ＢＭ移動。第１～３号住居跡検出。第２～４号土坑検出開始。

３日　第１・２号住居跡土層断面実測。第１・５～13号土坑検出開始。

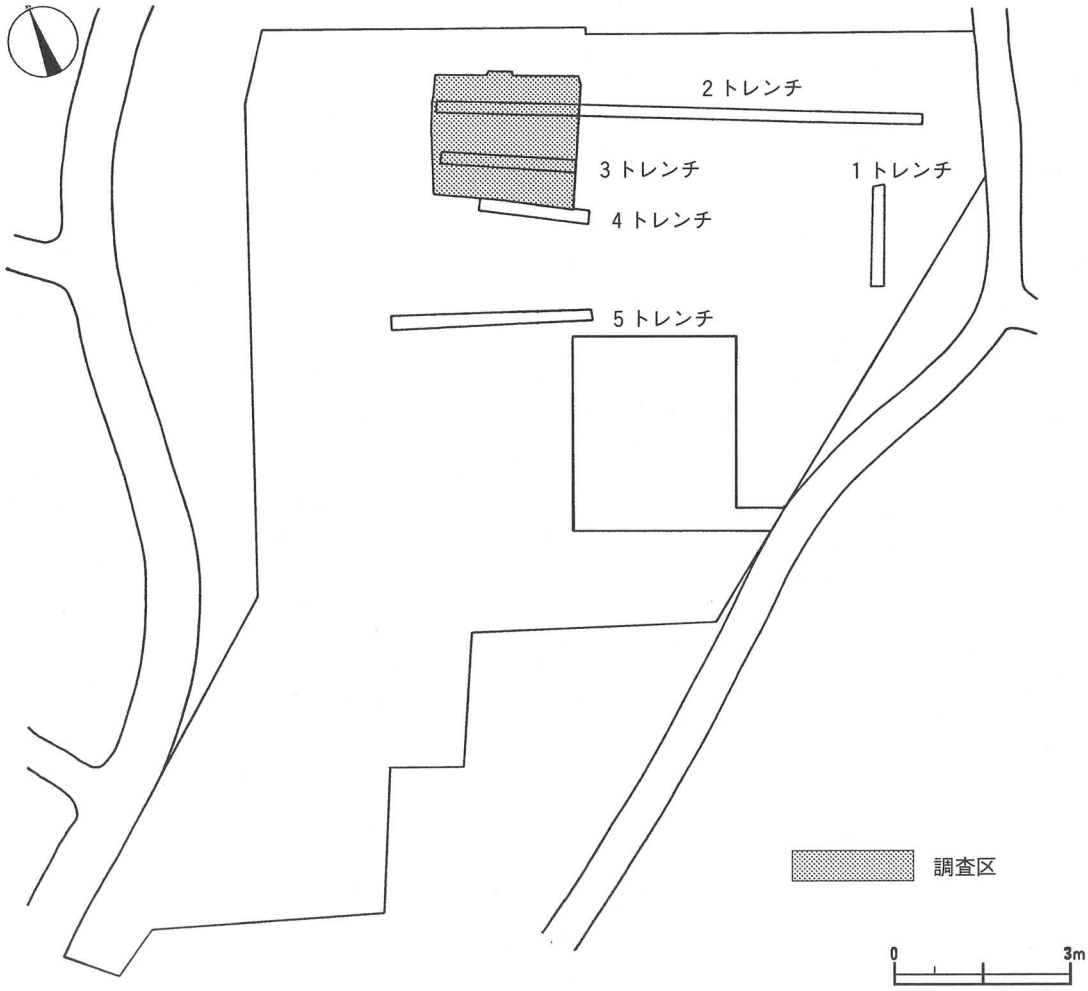
４日　第３号住居跡土層断面実測。住居跡・土坑検出。

５日　第１号住居跡遺物出土状況写真撮影。

６日　第３号住居跡遺物出土状況写真撮影。

９日　第３号住居跡遺物実測、取上げ。テストピット掘り下げ。

第１図　遺跡位置図　　（国土地理院　1:50,000地図に加筆）



第2図　試掘坑配置図

10日　第3号住居跡付属施設検出。包含層調査。

11日　第1号住居跡遺物実測、取上げ。

12日　第1号住居跡遺物実測、取上げ。第3号住居跡完掘写真撮影。

13日　第1号住居跡遺物実測、取上げ。テストピット掘り下げ。

16日　第1号住居跡遺物実測、取上げ。調査区全景写真撮影。
　　本日で遺構検出作業がほぼ終了し、主な器材を撤収する。

17日　第1～3号住居跡実測。

18日　土坑実測。

19日　土坑実測。調査区実測。

20日　遺構の実測が終了し、遺構の埋め戻しを行う。測量用の器材を撤収し調査終了となる。

調査終了後、12月24日付けで調査担当者から市教育長宛に発掘終了届が提出された。それを受けて、12月26日付けで、茨城県教育長宛てに発掘調査終了の確認（依頼）、土浦市警察署長宛てに埋蔵物発見届を提出した。

第２章　遺跡概観（第３～５図）

土浦市は茨城県南部に位置する。東側には霞ヶ浦を望み北側は関東平野を見渡す筑波山がそびえ、市内中央を桜川が北西側から霞ヶ浦に向かい流れている。市の地形はこの桜川により形成された沖積層の低地を中心に、北部の新治台地と南部の筑波稲敷台地とに大きく３区分されている。筑波稲敷台地の北側には北西側より霞ヶ浦に向かい花室川が流れており、河川沿岸の台地両側は複雑に開析が進み、多くの谷戸と小規模の台地が形成されている。

権現前遺跡はこの花室川右岸の狭い谷戸に挟まれた台地の上位面、標高約26mに位置している。低地面との比高差は７～10mである。

筑波稲敷台地の地層は６層よりなる下総層群を基盤とし、新期関東ローム層、沖積層と続く。下総層群最上部の常総層は下末吉ローム層に相当し、ついで武蔵野ローム層、立川ローム層と対応する。今回の調査ではローム層の堆積状況を確認するため、調査区の東壁・西壁各１ヶ所に深さ約1.2mのテストピットを設定した。テストピットの深度が浅いため立川ローム層内に留まったが、同じ台地上に隣接する宮前遺跡の層序にほぼ対応することが確認された。本遺跡のほうが標高が高いためか宮前遺跡では見られなかったソフトローム層の堆積が認められた（第４図）。テストピット（№２）ではローム面が西に向かい傾斜していることが明らかとなり、現在よりも台地の平担面が狭かったことを物語る。

往時は生活に欠かせない身近な花室川も、近年では周辺の住宅化が進み遺跡から河川流域をうかがうことは困難となっている。

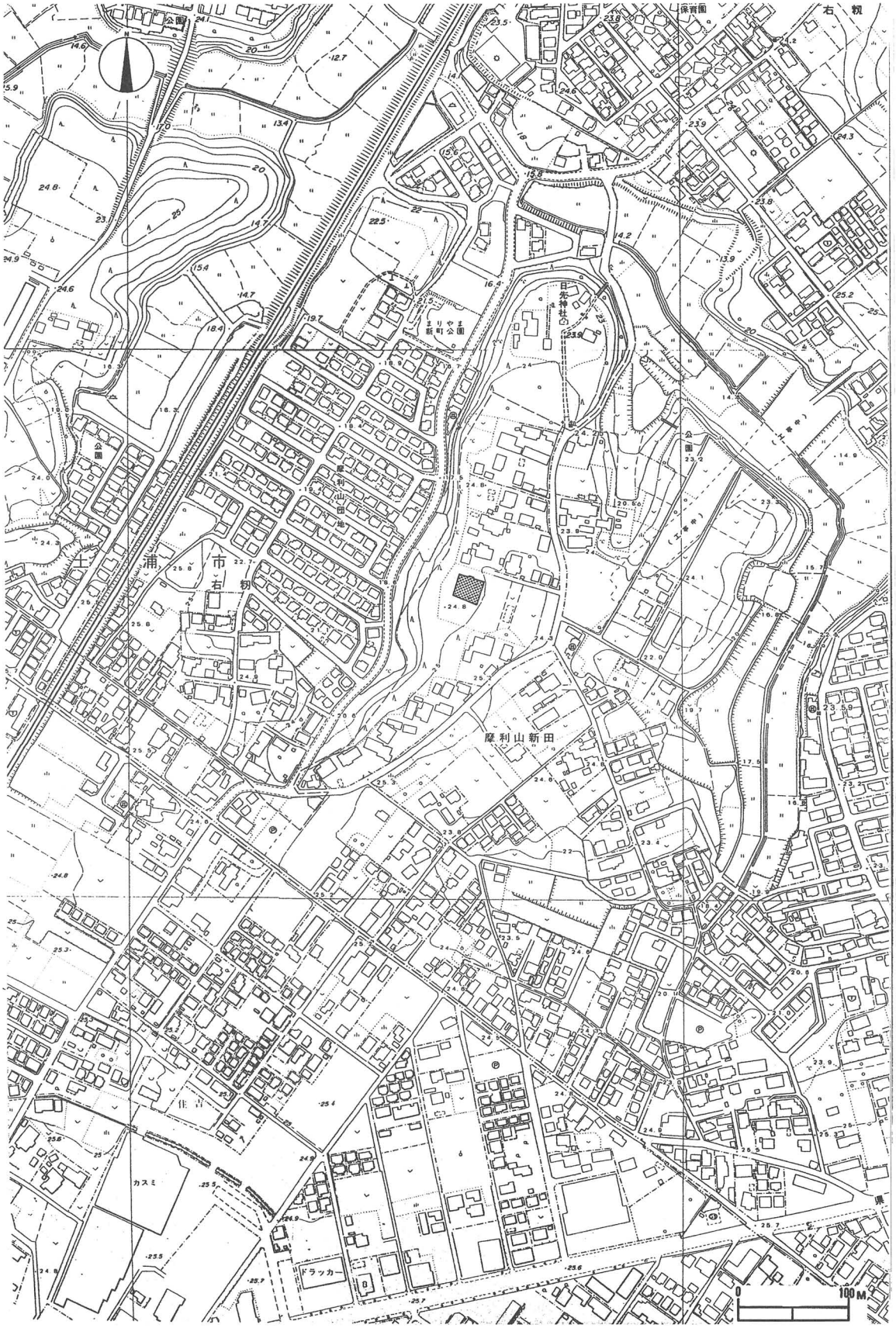
花室川と海へとつながっていた広大な霞ヶ浦、そして背後に控える筑波稲敷台地は豊かな自然の恵みを流域に暮らす人々に供していたことであろう。

それを裏付けるように河川の流域には多くの遺跡が存在している。

旧石器時代は花室川右岸の向原遺跡（16）からユニットが検出されている。遺物は安山岩製のナイフ形石器、メノウ製の石核、黒曜石の多数の剥片が出土している。他に遺物のみが出土した遺跡として同じく右岸の宮前遺跡（２）からは黒曜石製の削器と安山岩製の尖頭器、花室川左岸の寺家ノ後Ａ遺跡（22）からは頁岩製の彫器があげられる。流域は多くのナウマン象の化石が出土することで知られており、移動してきたハンター達が残した足跡かもしれない。同じく左岸の内出後遺跡（33）からも「プレ縄文の石器を１点採集する」(註１)とあるが詳細は不明である。

縄文時代早期の遺跡はわずかである。左岸の永国遺跡（24）から茅山式期の住居跡、宮前遺跡・向原遺跡から陥し穴が報告されている。左岸のビヤ首遺跡（25）からは土器片が採集された。

前期にはやや遺跡数が増加する。右岸の烏山遺跡（38）から関山式期の住居跡と地点貝塚、同じく右岸の右籾貝塚東遺跡（45）・向原遺跡から黒浜式期の住居跡が各１軒報告されている。本遺跡と同じ浮島式期の集落は発見されていないが、右岸の後稲遺跡（21）から浮島式の破片が採集されている。ほかには包蔵地として右岸の宮塚遺跡（44）、堂地塚遺跡（35）、小西遺跡（43）、木の宮南Ａ遺跡（６）、ビヤ首遺跡をあげることができる。



第３図　遺跡周辺地形図　　（土浦都市計画図　1:2,500に加筆）

中期に入ると大規模な集落がいくつか調査されている。宮前遺跡からは本遺跡の前段階にあたる中峠式期から加曽利ＥⅣ式期にかけての住居跡が38軒、また左岸の六十原Ａ遺跡（28）から阿玉台Ⅳ式期から加曽利ＥⅠ式期の住居跡が８軒、右岸の扇ノ台遺跡（14）からは住居跡17軒、摩利山遺跡（３）からは加曽利Ｅ式期の住居跡が７軒報告されている。包蔵地も右岸の峰崎Ａ・Ｃ遺跡（４・５）、木の宮北遺跡（８）、塚下遺跡（46）、竹ノ入遺跡（９）、谷原門Ａ遺跡（12）、阿見町一区北遺跡（63）、左岸の国分遺跡（26）、永国遺跡、宮久保遺跡（23）と前期と比べて遺跡数は増加し、縄文時代の花室川流域は中期をピークとして次第に減少傾向となる。

後期から晩期にかけては峰崎Ａ遺跡、宮久保遺跡、摩利山遺跡、一区北遺跡とわずかしか見られない。

弥生時代に入っても希薄な時期が続き、後期になって烏山遺跡、永国遺跡で集落が展開する。包蔵地も木ノ宮南Ａ遺跡、右岸の永峰遺跡（37）と少ない。永峰遺跡では「南関東系の弥生時代終末期の土器が出土した」(註１) とある。

古墳時代になると再び遺跡数は増加傾向に入る。烏山遺跡と永国遺跡は花室川を挟んだ対岸に位置し、平安時代まで続く大集落が営まれていた。特に烏山遺跡では、前期の玉作工房跡が数軒検出され注目される。ほかには左岸の神出遺跡（34）、寺家ノ後Ａ遺跡、永峰遺跡でも集落が展開している。古墳は多くが円墳で、桜ケ丘古墳は工事中に箱式石棺が露出したとのことである。

奈良・平安時代は古墳時代から続く永国遺跡で住居跡が多数検出され、神出遺跡、扇ノ台遺跡でも集落跡が確認されている。

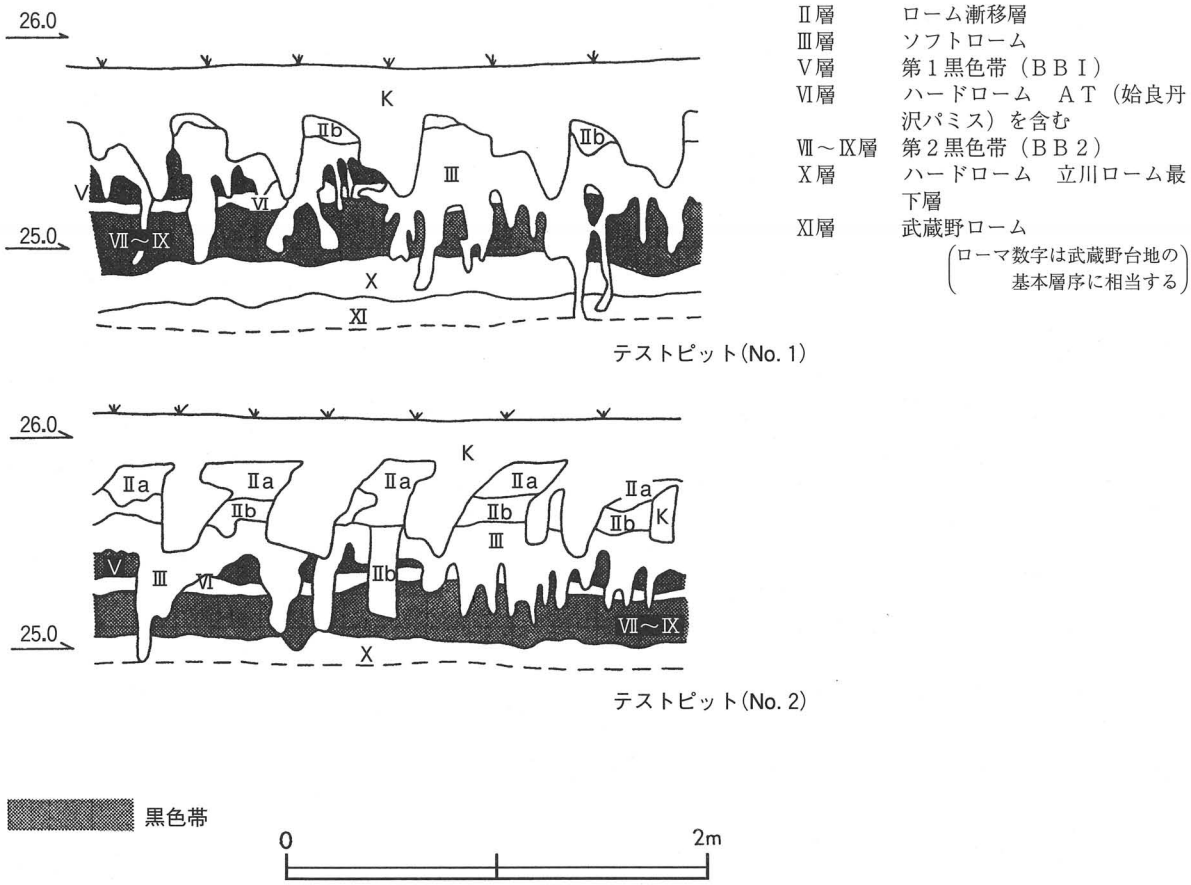
中・近世の遺跡としては図示していないが右籾館跡・嵩久保一里塚等があげられる。

花室川流域は先土器時代から近世にかけて、途切れる事なく人々の足跡が残されており、土浦市のなかでも遺跡の分布が濃密な地域のひとつである。しかしながら昭和40年代後半から50年代前半にかけていくつかの遺跡が詳細な報告書が出ないまま消失してしまったことは、非常に残念なことであった。今後二度とこのようなことが起こらないように、一層慎重に遺跡と対峙しなければならないことは改めてここで言うまでもないことである。

註１　茂木雅博　『土浦の遺跡』　1984

参考文献

1975　土浦市史刊行会　『土浦市史』
　　茨城県住宅供給公社　『土浦市烏山遺跡群』
1981　土浦市教育委員会・池の台遺跡発掘調査会　『池の台遺跡』
1983　阿見町史編さん委員会　『阿見町史』
　　日本ランドシステムＫ・Ｋ　『永国遺跡』
1984　土浦市教育委員会　『土浦の遺跡』－埋蔵文化財包蔵地－
1987　向原遺跡調査委員会・土浦市教育委員会　『向原遺跡』
1988　地質調査所　『筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図』
　　土浦市教育委員会　『烏山遺跡』



第４図　基本層序

1990　茨城県教育財団　『寺家ノ後Ａ遺跡　寺家ノ後Ｂ遺跡　十三塚Ａ遺跡　十三塚Ｂ遺跡　永国十三塚　旧鎌倉街道』　永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書　第60集

茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』

1991　茨城県教育財団　『西郷遺跡　南丘遺跡　長峰遺跡　数光遺跡　宮塚遺跡　右籾遺跡　内路地台遺跡』　茨城県教育財団文化財調査報告　第64集

1992　土浦市教育委員会　『土浦市埋蔵文化財地図』

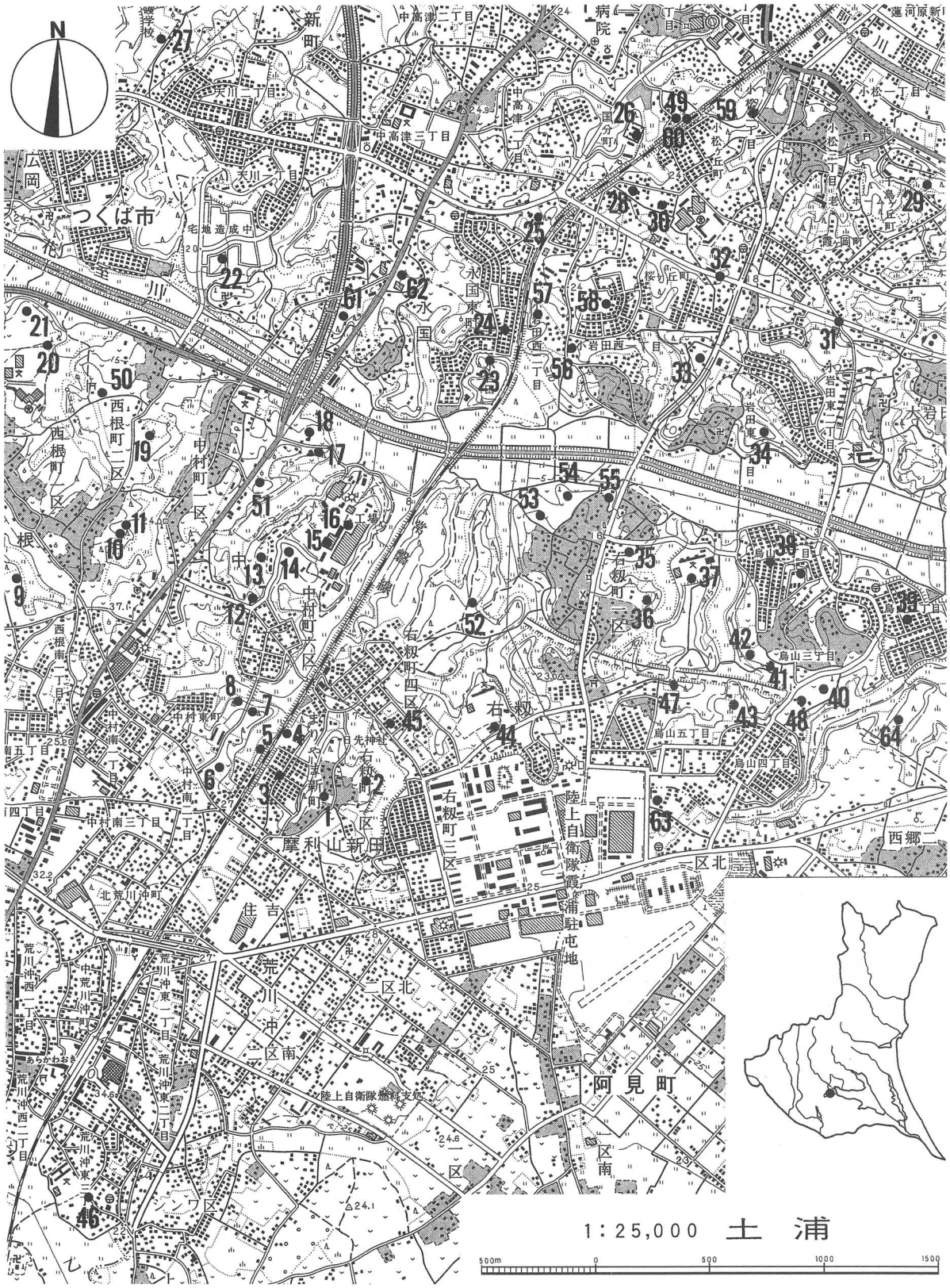
1996　土浦市教育委員会　『六十原Ａ遺跡』

茨城県教育財団　『右籾貝塚東遺跡　内路地台遺跡　念代遺跡　平坪遺跡』　茨城県教育財団文化財調査報告　第111集

1997　茨城県教育財団　「茨城県南部における立川ローム層の層序区分について」『研究ノート』６号

『宮前遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告　第118集

1998　上高津貝塚ふるさと歴史の広場　『土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第３号・第４号



（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

第５図　周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	県遺跡番号	時代						No.	遺跡名	県遺跡番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世
1	権現前遺跡	5207		○					33	内出後遺跡	5250	○	○		○	○	
2	宮前遺跡	5208	○	○		○		○	34	神出遺跡	5274				○	○	○
3	摩利山遺跡	1790		○					35	堂地塚遺跡	5218		○		○	○	
4	峰崎Ａ遺跡	5204		○					36	松原遺跡	5217		○		○		
5	峰崎Ｃ遺跡	5206		○		○	○		37	永峰遺跡	5216			○	○		
6	木の宮南Ａ遺跡	5201		○	○				38	烏山遺跡群	3451		○	○	○		
7	木の宮南Ｃ遺跡	5203		○					39	石倉山古墳群	1817				○		
8	木の宮北遺跡	5200		○					40	堂後遺跡	5225		○		○	○	
9	竹ノ入遺跡	5239		○					41	北平北遺跡	5224		○		○	○	
10	大日古墳	1821				○			42	北平南遺跡	5223		○			○	
11	浅門古墳	1822				○			43	小西遺跡	5222		○			○	
12	谷原門Ａ遺跡	5193		○		○	○		44	宮塚遺跡	5210		○				○
13	谷原門Ｃ遺跡	5195		○	○	○	○	○	45	右籾貝塚東遺跡	5209		○				
14	扇ノ台遺跡	—		○			○		46	塚下遺跡	5240		○		○		
15	ともえ塚古墳群	1820				○			47	長峰遺跡	—		○		○	○	
16	向原遺跡	—	○	○		○			48	南丘遺跡	—				○	○	
17	馬道古墳群	5199				○			49	小松貝塚	1789		○				
18	馬道遺跡	5198				○	○	○	50	西根宮脇遺跡			○		○	○	
19	平代地遺跡	5233		○		○	○		51	南達中遺跡	5196				○	○	
20	不動堂古墳群	1823				○			52	内路地台遺跡	5212		○			○	
21	後稲遺跡	5227		○			○		53	念代遺跡	5214				○	○	○
22	寺家ノ後Ａ遺跡	5279				○		○	54	平坪遺跡	5215				○	○	
23	宮久保遺跡	5261		○			○		55	沖ノ台遺跡	5219				○	○	
24	永国遺跡	5260		○	○	○	○		56	油麦田遺跡	5251				○	○	
25	ビヤ首遺跡	5259		○					57	阿ら地遺跡	5252				○	○	
26	国分遺跡	5258		○					58	桜ヶ丘遺跡	5254				○		
27	宮脇Ｂ遺跡	5281	○	○			○	○	59	小松遺跡	5256				○	○	
28	六十原Ａ遺跡	—		○					60	池の台遺跡	5257	○	○		○		
29	三芳古墳	1814				○			61	亀井遺跡	5262				○	○	
30	六十原遺跡			○					62	和台遺跡	—	○	○	○	○		
31	霞ヶ岡遺跡	5246		○		○	○	○	63	一区北遺跡・貝塚	5662		○				
32	桜ヶ丘古墳	5255				○			64	立の越館跡	5660					○	

第３章　縄文土器の分類基準

本遺跡より天箱約８箱の土器が出土している。時期は早期後半より晩期前半に及び、量は中期後半が最も多く次いで前期後半となる。

ここでは時期別に大きく「群」を設定し、器形・文様の特徴その他の属性により「類」と細分を行なった。第Ｖ群とした中期後半は多量のため他群と若干分類系を異にする。器形は記載の無いものは全て深鉢形を呈する。

第Ⅰ群　早期
第Ⅱ群　前期前半　広義の黒浜式
第Ⅲ群　前期後半
　１類　諸磯ｂ式
　２類　浮島式
　　Ａ　Ⅰ式
　　Ｂ　Ⅱ式
　　Ｃ　Ⅲ式
　３類　興津式
第Ⅳ群　前期末～中期初頭
第Ｖ群　中期後半
　１類　加曽利ＥⅡ式
　２類　加曽利ＥⅢ式
　３類　加曽利ＥⅣ式
第Ⅵ群　後期
　１類　堀之内式
　２類　加曽利Ｂ式
　３類　安行式
　４類　粗製
第Ⅶ群　晩期前半
第Ⅷ群　無文底部

調査前風景

第４章　発見された遺構と遺物

本遺跡からは住居跡３軒（１軒は竪穴状遺構)、土坑17基（第５・８号土坑は欠番）が検出された。時期は大半が縄文時代で土坑は時期不明のものも見られた。遺物は天箱約８箱の縄文時代早期後半期から晩期前半期の土器、小ビニール１袋程の近世から近代にかけての陶磁器が出土しているが、陶磁器は全て小片のため図示していない。

第１節　遺構

１．住居跡

第１号住居跡（第７～11図：ＰＬ２・７～９）

位置　調査区のほぼ中央、Ｂ・Ｃ－２・３グリッドに位置し南側で第２号住居跡、西側で第19号土坑と重複する。

規模・形状　長径（5.5）ｍ、短径（4.9）ｍの不整楕円形を呈し、壁高は44㎝を測る。

主軸方向　Ｎ－90°－Ｗ

壁　北東側が一部確認できなかった。床面よりほぼ直線的に立ち上がる。周溝は認められない。

床　ほぼ平坦、貼床はなく軟質。

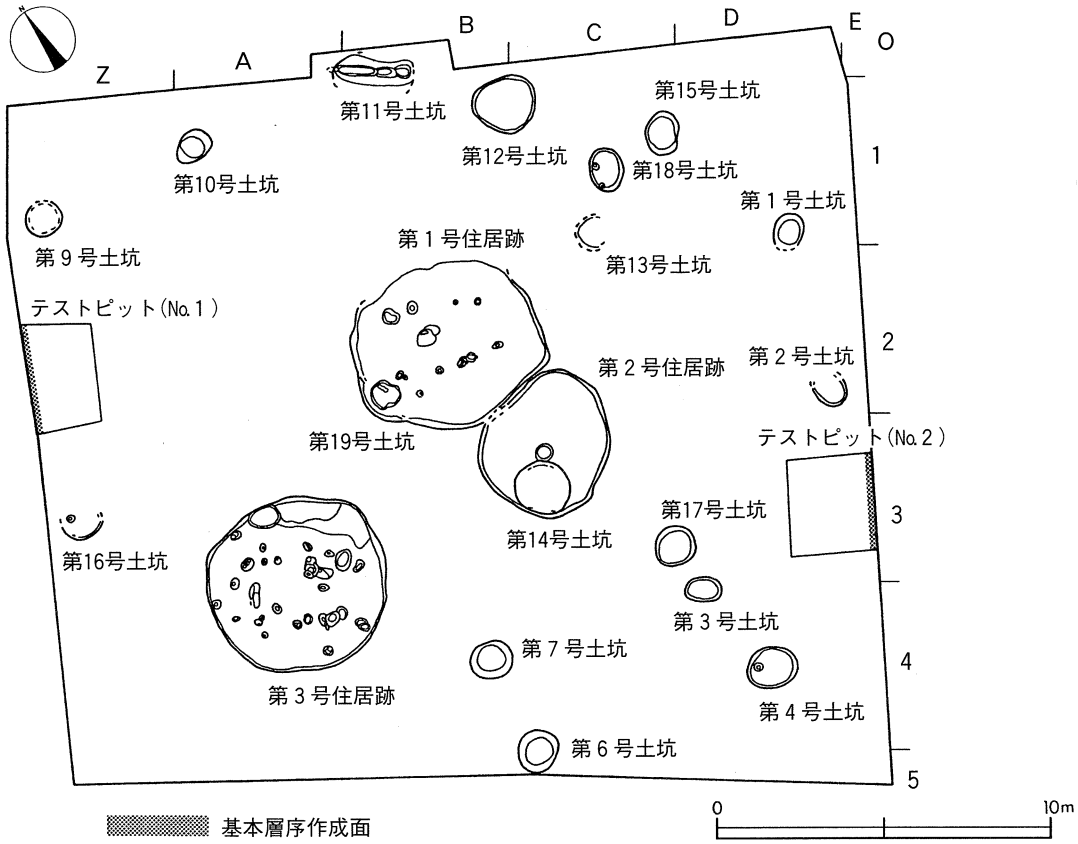
ピット　12ヶ所検出された。平面形は円形・楕円形を基調とし、径は15～55㎝とまとまりがない。深さは11～53㎝で20㎝前後のピットが多い。主柱穴に相当するのは東側の１ヶ所であろう。

炉跡　中央やや北寄りに床面を25㎝ほど掘り込んだ地床炉を１ヶ所検出した。径58㎝の不整円形で、床面のロームは被熱により焼土化していた。

覆土　５層に分層された。第２号住居跡との新旧関係は重複部分が近・現代の耕作による撹乱を受けており、覆土からの観察は困難であったが第19号土坑より新しい時期と確認された。

遺物　住居跡のほぼ中央、炉跡の南側から集中して出土している。層位的には４層直上部に位置し、第１次埋没後に廃棄されたと考えられる。１は口径［42.6］㎝、口縁部が内彎し胴部にかけて括れる器形を呈する。平縁で口縁に沿い隆帯文が１条巡る。下半は０段多条 LR が全面に施文される。２は口径［22.8］㎝、１と同様の器形を呈するが、括れは緩やかである。平縁で、口縁に沿い断面形先端が潰れ気味の三角形となる貼付文が１条巡る。下半は単節 RL。３は口径［18.2］㎝、口縁が内彎する器形を呈する。平縁で突起が１ヶ所残存する。突起の両側はなでられ凹んでおり、口縁に沿う無文の稜部となる。下半は０段多条 RL が全面に施文されている。４は口径［26.0］㎝で、口縁部が内彎する器形を呈する。平縁だが緩やかに波打ち、口縁に沿って幅の広い沈線文が１条巡る。下半は０段多条 LR。５は口径［21.4］㎝、口縁部は内彎し胴部にかけて直線的となる器形を呈する。平縁で口縁部はなでにより無文帯が作られ、胴上半部は単節 RL、下半は０段多条 LR と異なる縄文が施文されていた。６は口径［24.3］㎝、口縁部が内彎する器形を呈する。口縁部に無文帯はなく０段多条 RL が全面に施文されている。外面には炭化物が付着していた。１～６は第Ⅴ群３類に相当する。

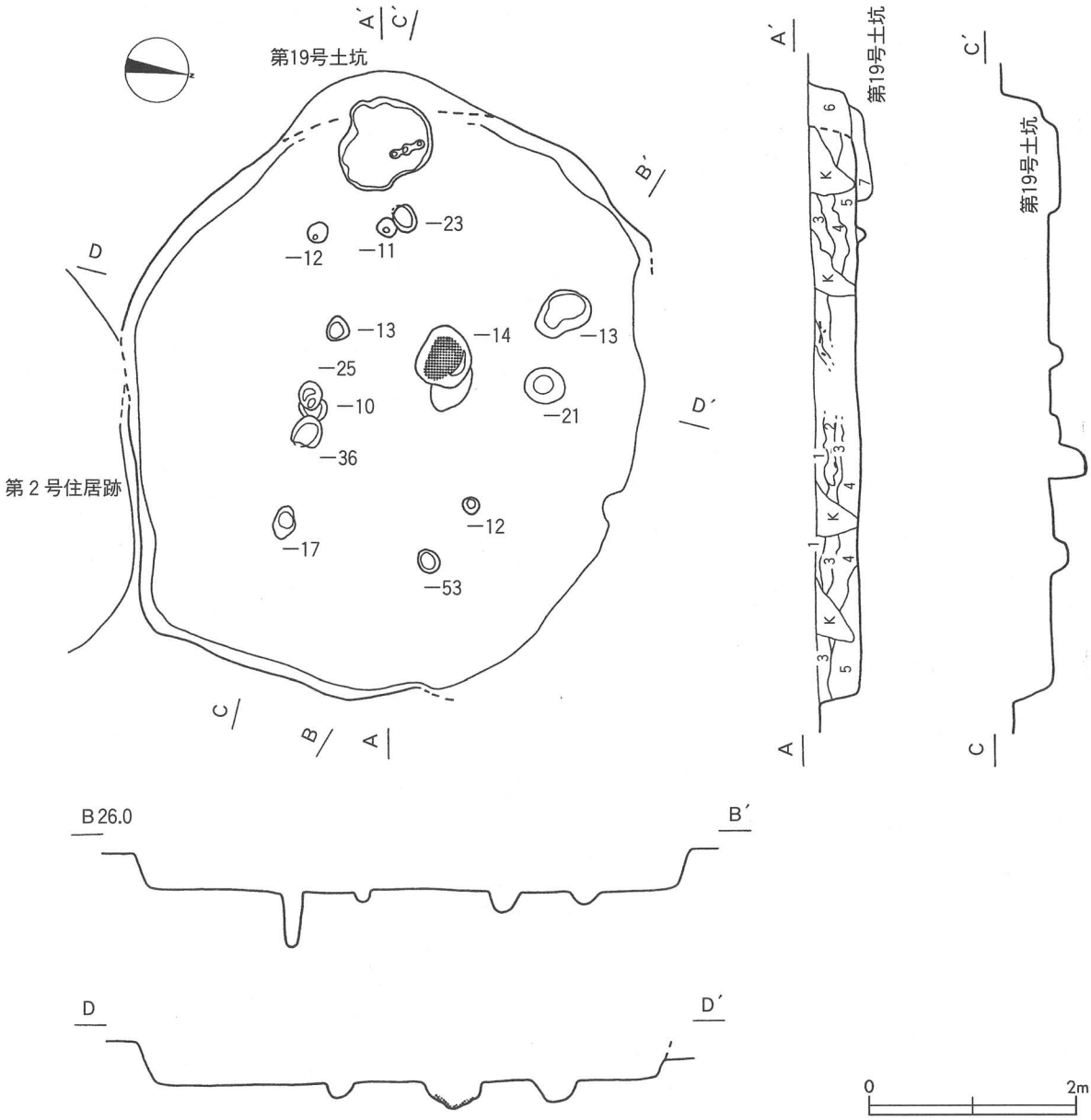
７は平縁で地文は撚糸文、半截竹管状工具による押し引き沈線が平行に２条巡る。８は平縁で口唇部に稜を有し外反する。ここに半截竹管状工具により下方から刺突を連続し、下半はアナダラ属系貝



第6図　遺構配置図

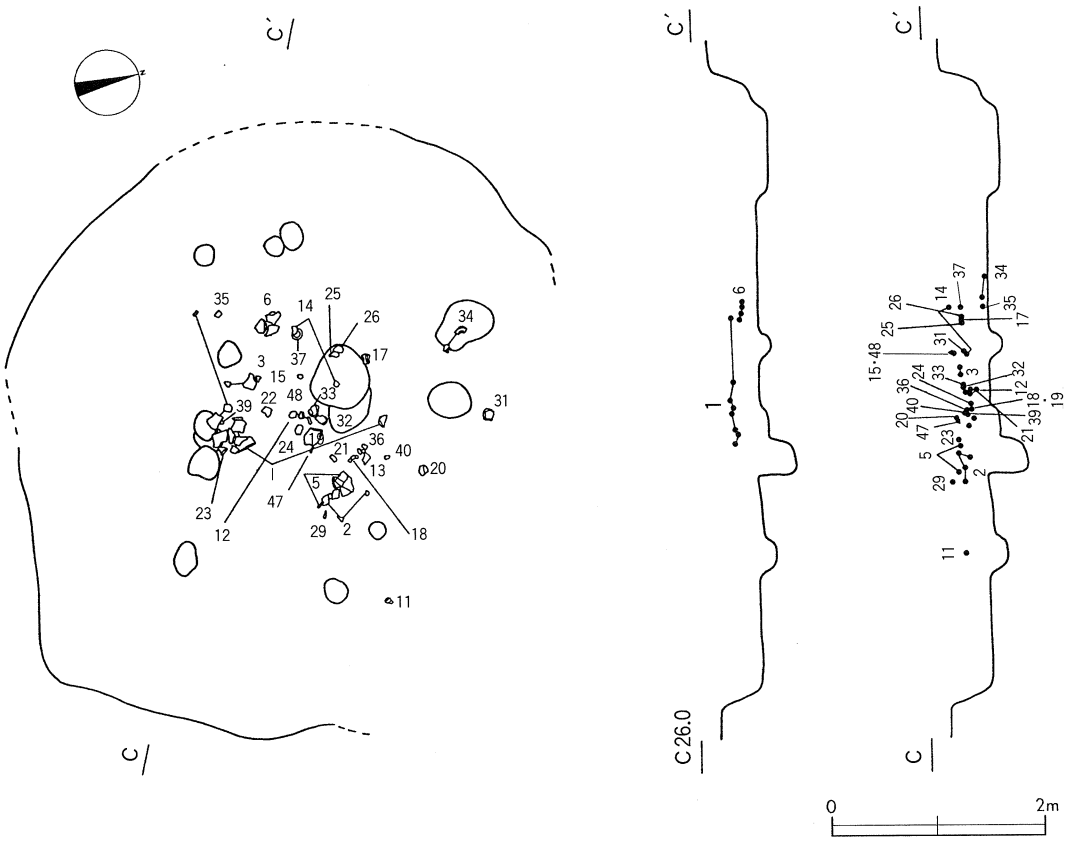
類の腹縁が引きずり気味に押圧される。9は平縁で口唇部は削いだように尖っている。ここに条線帯が施文され、下半は浅い変形爪形文が連続している。10は地文縄文で半截竹管状工具により多段の平行沈線文が巡る。地文の磨消は見られない。原体不明。8・9は第Ⅲ群2類C、7・10は第Ⅲ群1類に相当する。

11～16は口縁部である。11は平縁で口縁部に沿い幅の広い沈線文が1条巡り、沈線下端をなでて微隆起線文とする。下半はここを起点とし微隆起線文により曲線文が描かれる。12は平縁で口縁に沿い幅の広い沈線文が1条巡り、沈線文下は無節Lが全面に施文されている。13は波状縁で口縁部に無文帯はなく、全面に0段多条LRが施文されていた。また断面には接合帯強化の為と思われる凸痕が観察された。14は平縁で口縁部になでによる無文帯が見られ、下半は0段多条RLである。15は平縁で口縁部沿いに磨きによる稜部を作り出し、下半は0段多条RLが施文されている。16は平縁で口縁下に稜を有し下半は0段多条RL、稜直下は竹管状工具により円形刺突が連続する。17は把手部で橋状を呈し、把手上と波状縁に沿った稜の下半に単節RLが施文される。外面には炭化物が付着していた。18は口縁下の破片である。沈線と隆帯による窓状区画文の下方は沈線文が垂下している。区画内は0段多条RLか。19は両側がなでられる微隆起線文により直線的な区画文が描かれ、区画内には単節RLが充填される。20も同様の文様で縄文は撚りの甘い単節LRか。21は両側がなでられる微隆起線文による曲線文で単節LRを充填される。22は垂下沈線文で縄文は0段多条RL、無文帯の幅は広い。23は「∩」状沈線内に0段多条LRを充填し、他は磨消される。24は5～7条1単位の櫛書き波状文が



1　7.5YR2/3　黒褐色　焼土粒・ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR2/2　黒褐色　焼土粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
3　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
4　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物少量、ローム粒中量、粘性弱
5　7.5YR4/4　褐色　炭化粒・ローム粒少量、しまり弱
6　第19号土坑覆土
7　7.5YR4/6　褐色　ローム粒・焼土粒少量、第19号土坑覆土

第７図　第１号住居跡



第８図　第１号住居跡遺物出土状況

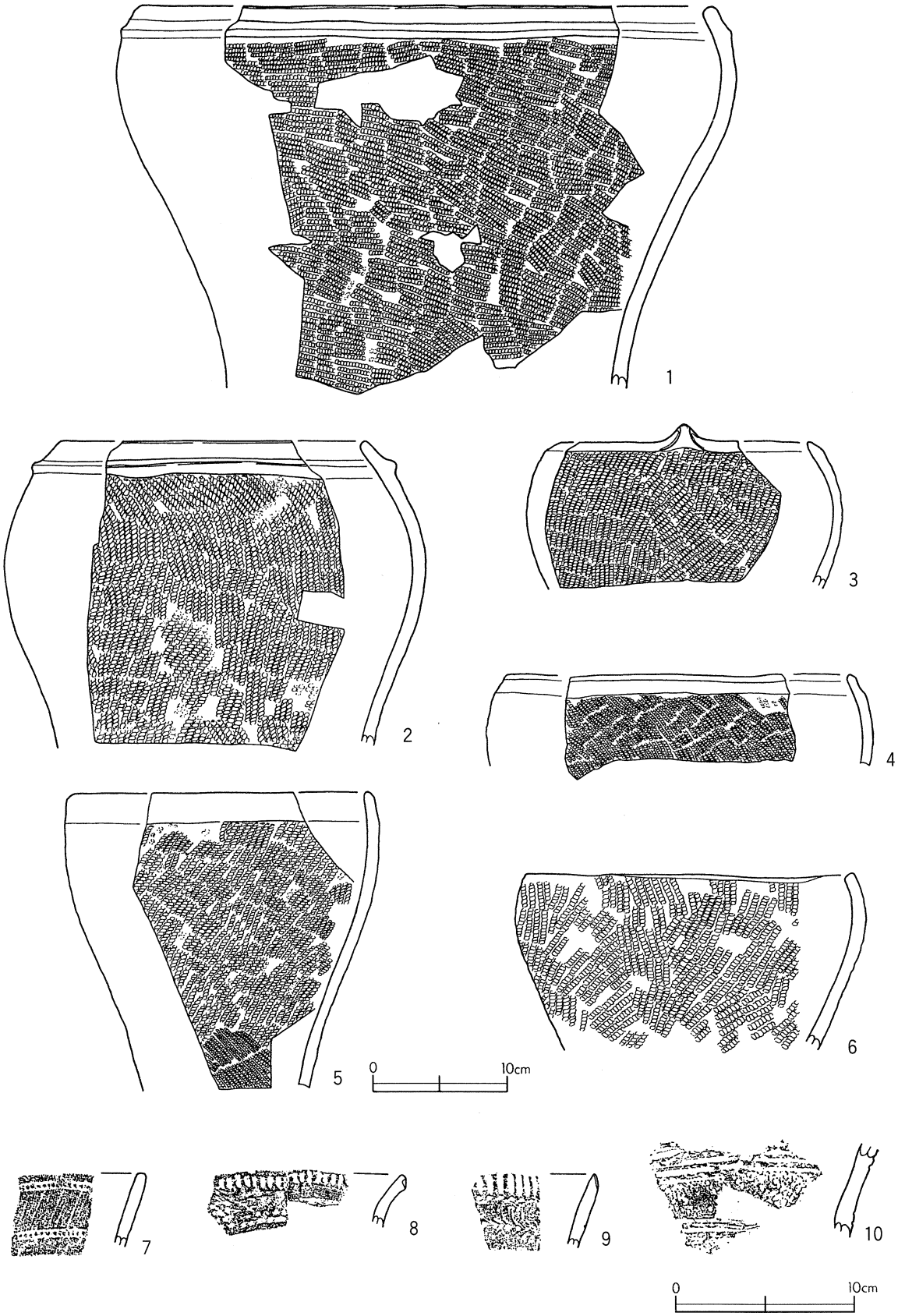
縦位に描かれる。25・26は０段多条 RL 施文後に条線文が垂下する。27・28は鉢もしくは壷形の器形を呈する。いずれも地文は無文で微隆起線文による曲線文が描かれる。11～17・19～28は第Ⅴ群３類、18は第Ⅴ群２類に相当する。

29は波状縁で口縁部沿いが半隆起状となり、ここに単節 RL が施文される。縄文直下には刺突が連続し、無文帯を介して同様の文様が繰り返される。30は刺突列下に曲線的な沈線文が描かれる。沈線内は単節 RL が充填され、他は無文であった。29・30は第Ⅵ群３類に相当する。

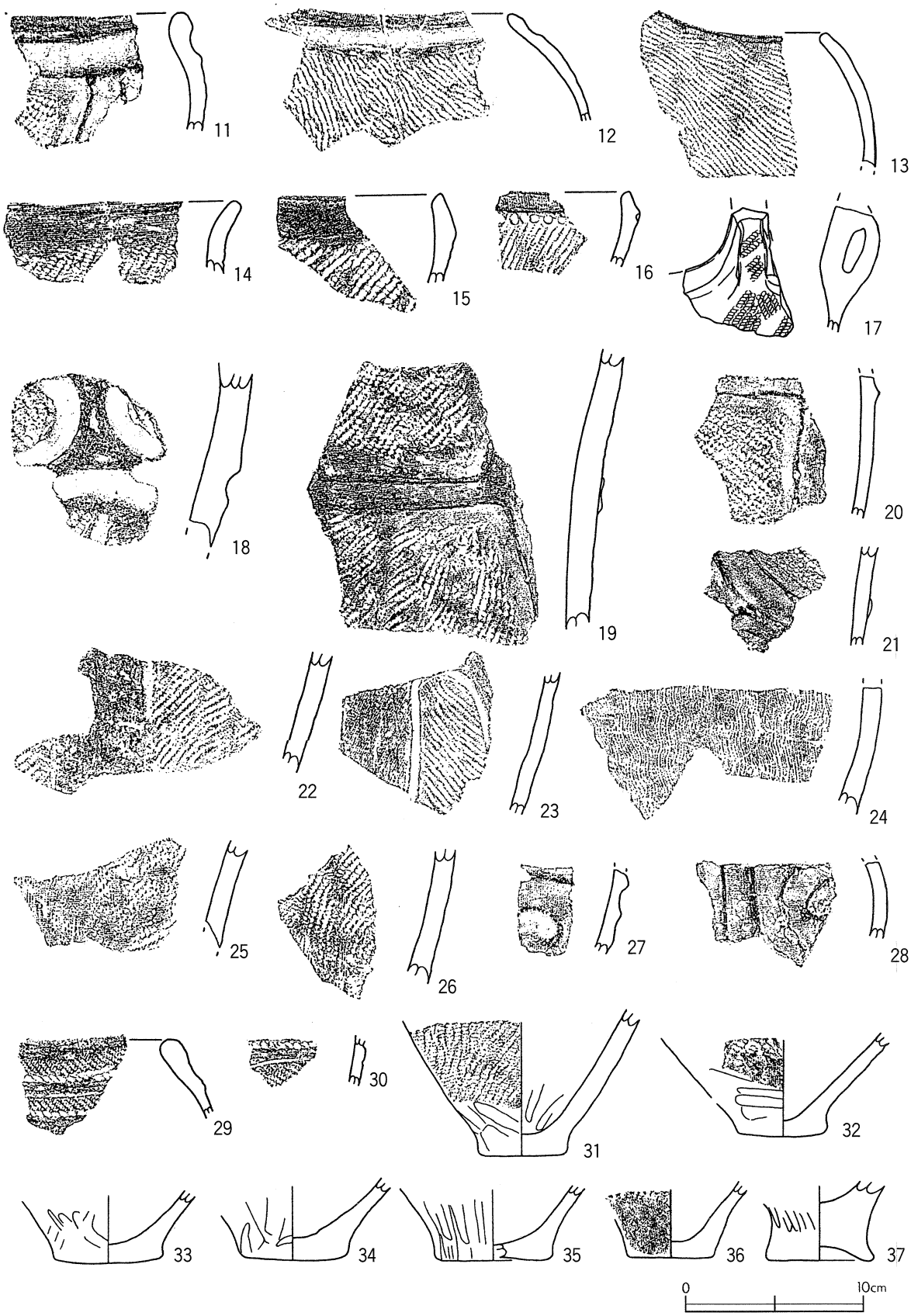
31～37は底部である。31は底径4.9cm、０段多条 RL で下半は斜位に削られている。32は底径4.9cm、単節 RL で下半は縦磨きされる。33は底径6.0cm、底面はやや凸レンズ状を呈する。無文で縦削りされる。34は底径［6.5］cm、無文で縦に磨かれている。36は底径4.8cm、単節 RL で、下半は無文である。37は底径6.0cm、底面は中心部が８mm程上げ底であった。無文で外面は縦磨きされる。31～33・36は第Ⅴ群、他は第Ⅷ群に相当する。

38～44は土製品である。38・39は土錘で38は縦長の楕円形、39はやや方形を呈しており、外面には炭化物が付着していた。40～43は土製円盤である。40・41は楕円形、42は不整形、43は方形を呈している。40は外面に41は断面にそれぞれ炭化物が付着していた。いずれも第Ⅴ群に相当しよう。44は焼成粘土塊と思われる。指紋の痕跡は見られないが全体が折り畳まれるようになっていた。時期は不明。

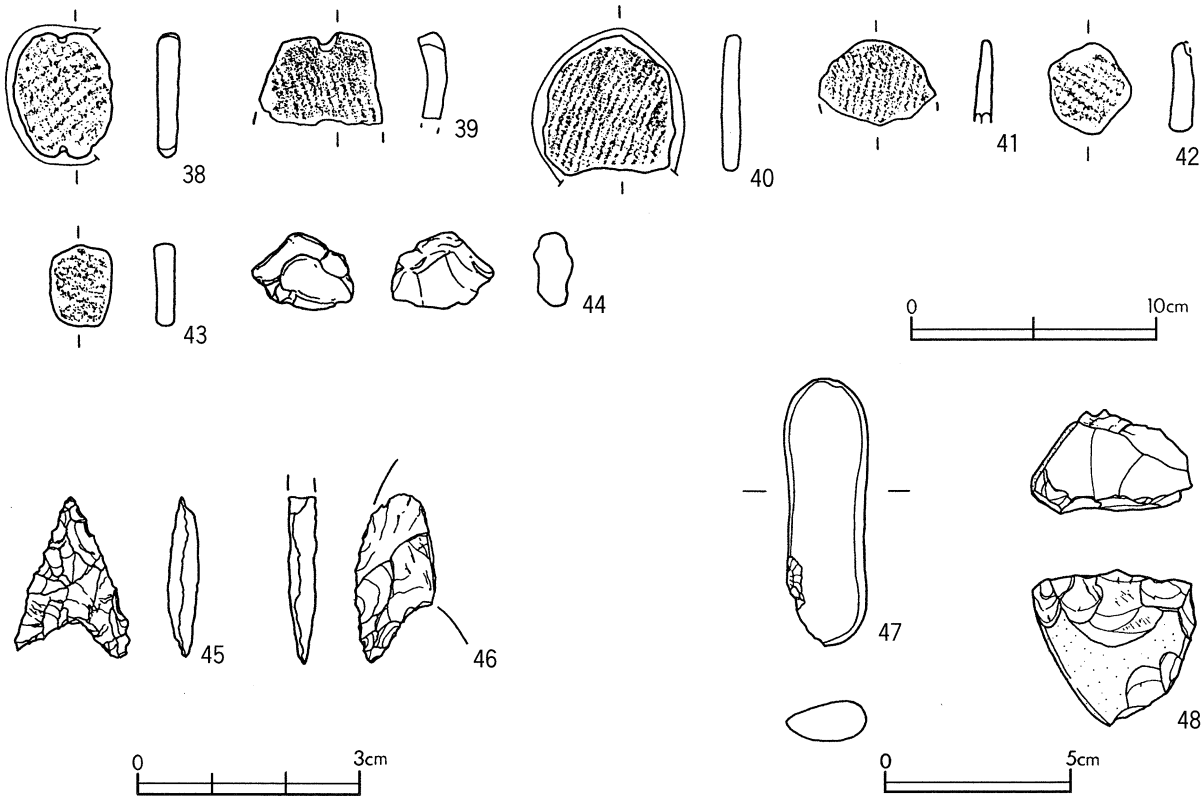
45・46は石鏃で、ともに基部に抉り込みを有するいわゆる凹基無茎鏃である。剥片を素材としており、周縁部の調整はあまり細かく施されていない。47は磨石類で礫そのままを素材とし、全体は平滑である。



第９図　第１号住居跡出土遺物－１



第10図　第１号住居跡出土遺物－２



第11図　第１号住居跡出土遺物－３

48は石核で表面には礫面を残している。また図示はしていないが流紋岩製の剥片が１点出土している。

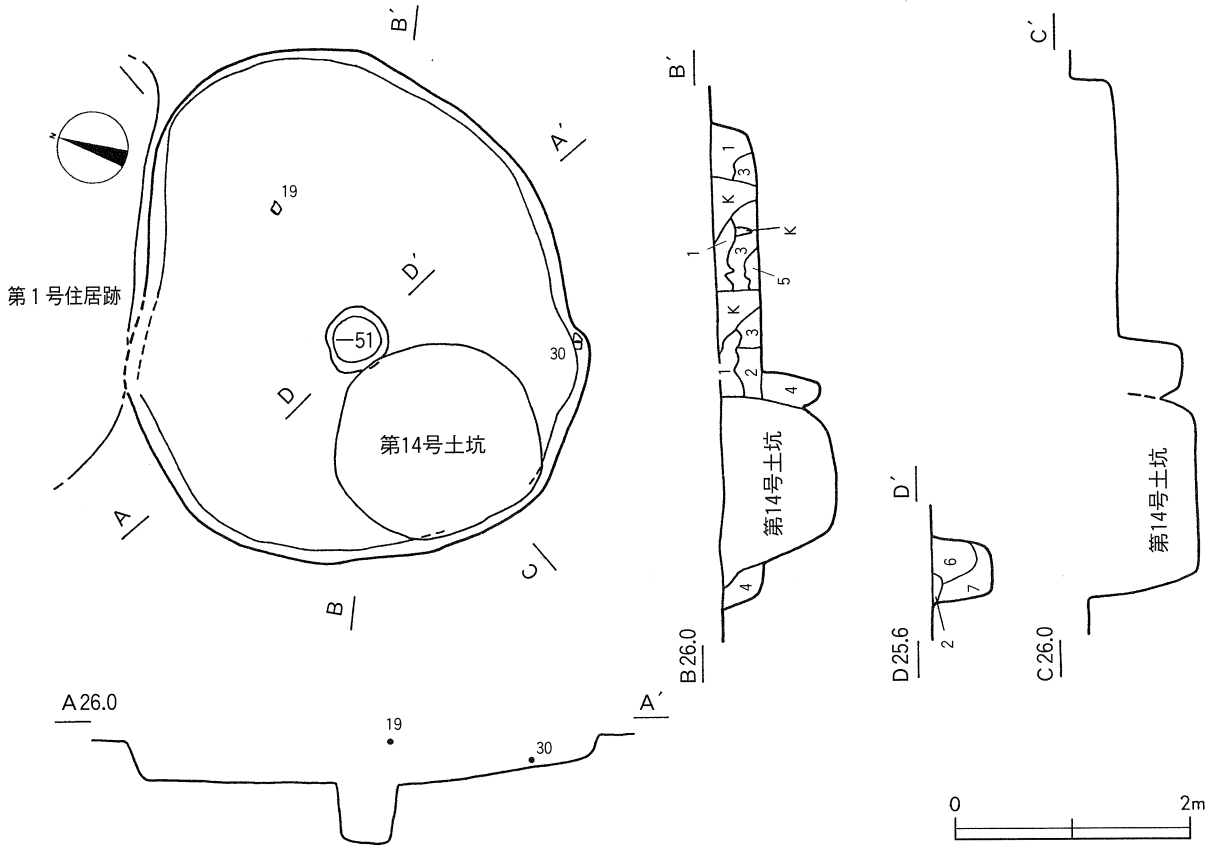
所見　住居跡の形状と炉跡の位置からおそらく東側が入り口部と考える。時期は出土土器より中期後半加曽利ＥⅣ式期に相当する。

（単位：cm、g）

No	名　称	残存	大きさ	重量	整形	文　様	時期	備　考
38	土錘	完形	5.0×3.9	22.9	一部磨り	0段多条 RL	第Ⅴ群	切り目１対
39	土錘	約1/2	(3.7)×(5.0)	(17.4)	全周磨り	単節 RL	第Ⅴ群	方形 切り目１ヶ 外面炭化物
40	土製円盤	完形	5.6×5.3	28.2	一部磨り	0段多条 LR	第Ⅴ群	外面炭化物
41	土製円盤	約1/2	(3.4)×(4.5)	(10.1)	全周磨り	0段多条 RL	第Ⅴ群	断面炭化物
42	土製円盤	完形	3.6×3.4	10.9	全周磨り	0段多条 RL　沈線文	第Ⅴ群	
43	土製円盤	完形	3.2×2.5	8.3	全周磨り	単節 RL	第Ⅴ群	方形
44	焼成粘土塊	―――	2.9×3.9	14.9	―――	無文 たたまれる	不明	

（単位：cm、g）

No	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　考
45	石鏃	完形	2.1	1.6	0.4	0.8	チャート	暗青灰色　凹基無茎鏃
46	石鏃	先端・片脚欠	(2.2)	(1.1)	(0.4)	(0.9)	チャート	凹基無茎鏃
47	磨石類	一部欠	(7.1)	2.2	1.1	(24.1)	緑色凝灰岩	
48	石核	―――	4.1	4.3	2.6	52.7	凝灰岩	



1　7.5YR4/4　褐色　ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR4/4　褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性弱
3　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム粒中量、粘性弱
4　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量、しまり弱
5　7.5YR5/6　明褐色　炭化粒少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
6　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
7　7.5YR4/6　褐色　炭化粒中量、ローム粒微量、しまり弱

第12図　第２号住居跡

第２号住居跡（第12・13図：ＰＬ２・９）

位置　調査区中央よりやや南側、Ｂ・Ｃ－２・３グリッドに位置する。北側で第１号住居跡、南側で第14号土坑と重複する。

規模・形状　長径4.36ｍ、短径（3.7）ｍの楕円形を呈し、壁高は40㎝を測る。

主軸方向　Ｎ－52°－Ｅ

壁　第１号住居跡との重複部を除き良好に検出された。床面よりほぼ直線的に立ち上がり、周溝は認められない。

床　ほぼ平坦、貼床はなく軟質。

ピット　中央やや南寄りに１ヶ所検出された。径50㎝の円形を呈し、深さは51㎝を測る。

炉跡　検出されなかった。

覆土　７層に分層された。近似した層が水平に堆積しており、埋め戻し土と考えられる。本遺構は第14号土坑より古い時期と確認された。

遺物　全て床面より浮いた状態で散在していた。1・2は胎土に繊維を混入し、同一片である。半截竹管状工具による押し引き文が平行に引かれ、この間は無文となる。地文は0段多条 RL か。第Ⅱ群に相当する。

3は平縁で先細り状の口唇部は楕円形の連続刺突により小波状を呈する。口唇部下は条線帯が施文され、下半は半截竹管状工具により矢羽状文が描かれる。4は平縁で口縁部に輪積み痕をそのまま残し、この上方は無文帯、輪積み部から下半にかけてハマグリ系貝類による波状文が描かれる。5はゆるやかな波状縁を呈し、幅の広い口唇部に斜刻文が連続する。下半はアナダラ属系貝類腹縁による波状文に重複して押し引き文が描かれる。6は平縁で口唇部に板状工具による刻文が連続し、下半は斜位の条線文が描かれる。7はハマグリ系貝類による波状文である。3～7は第Ⅲ群2類で、7以外は同Cに相当する。

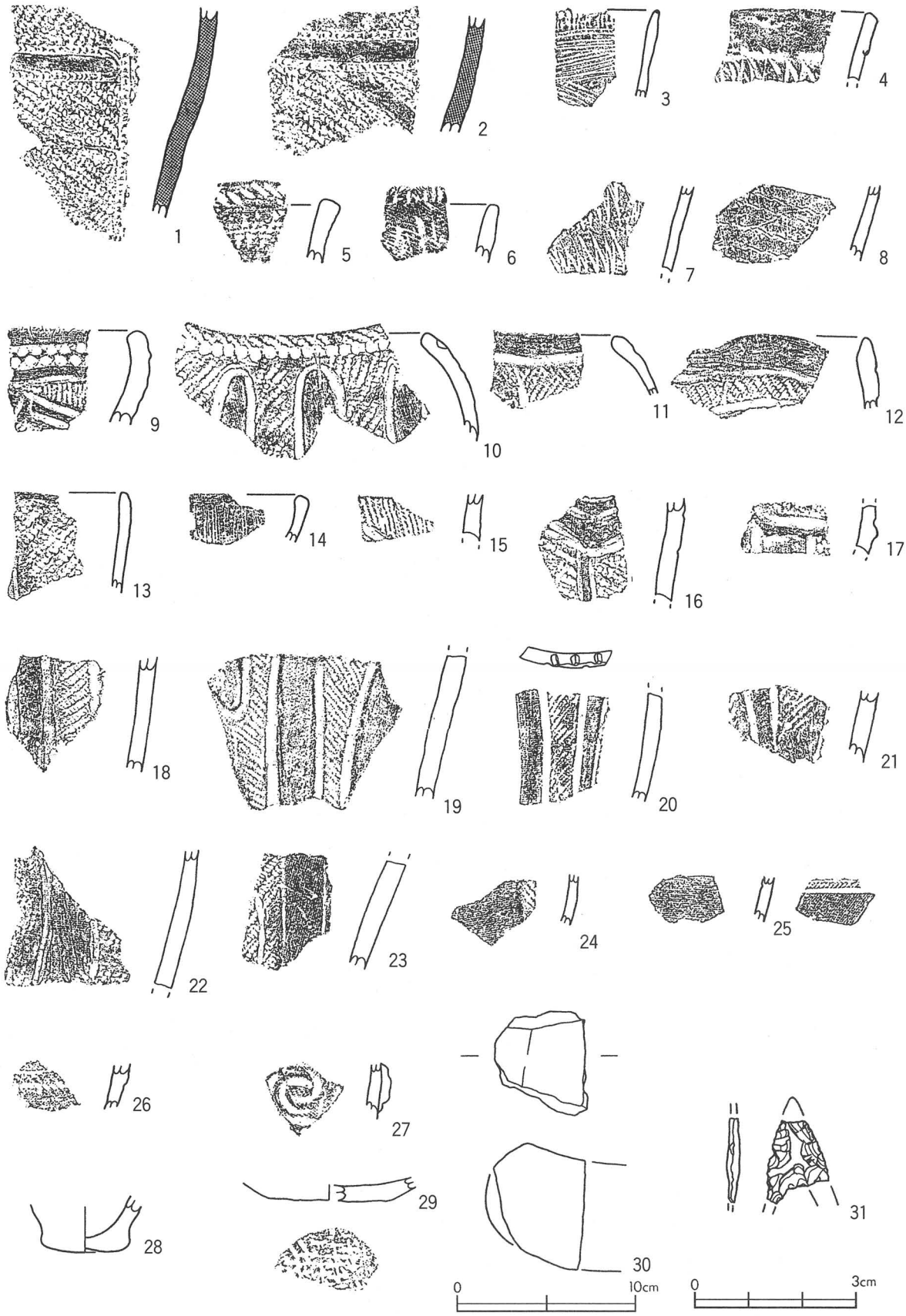
8は無節Lの結節縄文か。第Ⅳ群に相当する。

9は平縁で内彎し、口縁部に沿い沈線が2条巡り、この沈線上に円形刺突が連続する。下半は地文L撚糸文で連弧文が描かれる。外面には炭化物が付着していた。10は平縁で内彎し、地文は単節 RL で口縁部に沿い円形刺突が連続する。下半は「∩」状沈線文で沈線内は磨消され無文となる。口縁部に無文帯は見られない。内外面には炭化物が付着していた。11は平縁で内彎し、口縁部に沿い平行沈線文が1条巡り、下半は曲線的な沈線文が描かれ単節 RL が施文されている。外面には炭化物が付着していた。12は波状縁で口縁下に沈線文が水平に巡る。下半は地文0段多条 RL で曲線的な沈線文が描かれる。13は波状縁で直線的に立ち上がる器形を呈する。口縁下に無文帯はなく、0段多条 RL が施文され沈線文が垂下する。外面には炭化物が付着していた。14は平縁で5～6条1単位の条線文が垂下する。外面には炭化物が付着していた。15は地文がR撚糸文でおそらく連弧文となろう。16は地文0段多条 LR で沈線文が垂下し、沈線間は無文となる。連弧文となろうか。17は口縁下の破片である。隆帯とこれに沿う沈線により窓状区画文が描かれる。区画下は沈線文が垂下し、単節 RL 部が交互に磨消される。18も同様である。19は沈線文が沿う微隆起線文により曲線文が描かれる。単節 LR か。20・21は沈線文が垂下し、単節 RL が交互に磨消される。20の上方の輪積み面におそらく接合帯強化の為と思われる刻みが観察された。外面には炭化物が付着していた。22は単節 RL で垂下沈線文間は磨消され、外面には炭化物が付着していた。23は沈線文が垂下し、0段多条 RL 上に波状文が描かれる。24は微隆起線文沿いに単節 RL が施文されている。9・15・16は第Ⅴ群1類、10・17～21は第Ⅴ群2類、11～14・22～24は第Ⅴ群3類に相当する。

25は浅鉢で、外面は良好に研磨され、内面は上半平行沈線文間に斜刻文を充填し、下半は無文となる。26は半隆起状に高まる横位沈線間に単節 RL が充填され、下端の沈線上は刺突が連続する。27は円形貼付文を付し、貼付上に入り組み文風の沈線文が描かれる。単節 LR が充填され、下半沈線間には細かな斜刻文が連続していた。25は第Ⅵ群2類、26・27は第Ⅵ群3類に相当する。

28・29は底部である。28は底径4.9cmで底面は凸レンズ状を呈し、外面は無文である。29は底径6.5cm、外面は無文で磨かれている。底面には1本越え1本潜り1本送りのザル編み痕がみられた。28は第Ⅴ群、29は第Ⅵ群に相当する。

30は石皿である。使用面はおそらく1面で大きく凹んでいる。残存部は一部で、使用時にこのような破損状況はとらない為故意に壊されたものであろう。31は凹基無茎鏃で体面中央部は1次剥離面が残る。



第13図　第２号住居跡出土遺物

所見　住居跡としてここで扱ったが、炉跡が無い点やピットが中央に１ヶ所の点から住居跡とするには難しいと考える。竪穴状遺構として理解しておきたい。第１号住居跡との時間的位置付けは覆土が撹乱されており確認できなかった。また重複する第14号土坑の時期も明確ではないため、出土遺物から時期は中期後半期の範疇とするに留めたい。

（単位：cm、g）

No	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　　考
30	石皿	一部残	(5.7)	(5.2)	(7.9)	(225.2)	安山岩	使用面１面
31	石鏃	先端・両脚欠	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.4)	チャート	暗青灰色　凹基無茎鏃

第３号住居跡（第14～16図：ＰＬ３・10）

位置　調査区西側Ａ・Ｂ－３・４グリッドに位置する。重複のない単独の住居跡である。

規模・形状　長径5.4m、短径5.2mの円形を呈し、壁高は60cmを測る。

主軸方向　Ｎ－118°－Ｅ

壁　良好に検出された。床面よりほぼ直線的に立ち上がり、周溝は認められない。

床　若干の凸凹を有する。貼床はなく軟質。北側壁沿いに床面より18cm程高まるテラス状の面が検出された。

ピット　30ヶ所検出された。平面形は円形・楕円形・不整形を呈し、径15～100cmを測る。深さは15～127cmで、深さ50cm以上の主柱穴と想定されるピットは10ヶ所確認された。これらは炉跡の内側を環状に巡っていた。また北側の大きなピット内からは土器がまとまって出土しており、貯蔵穴としての性格が考えられる。

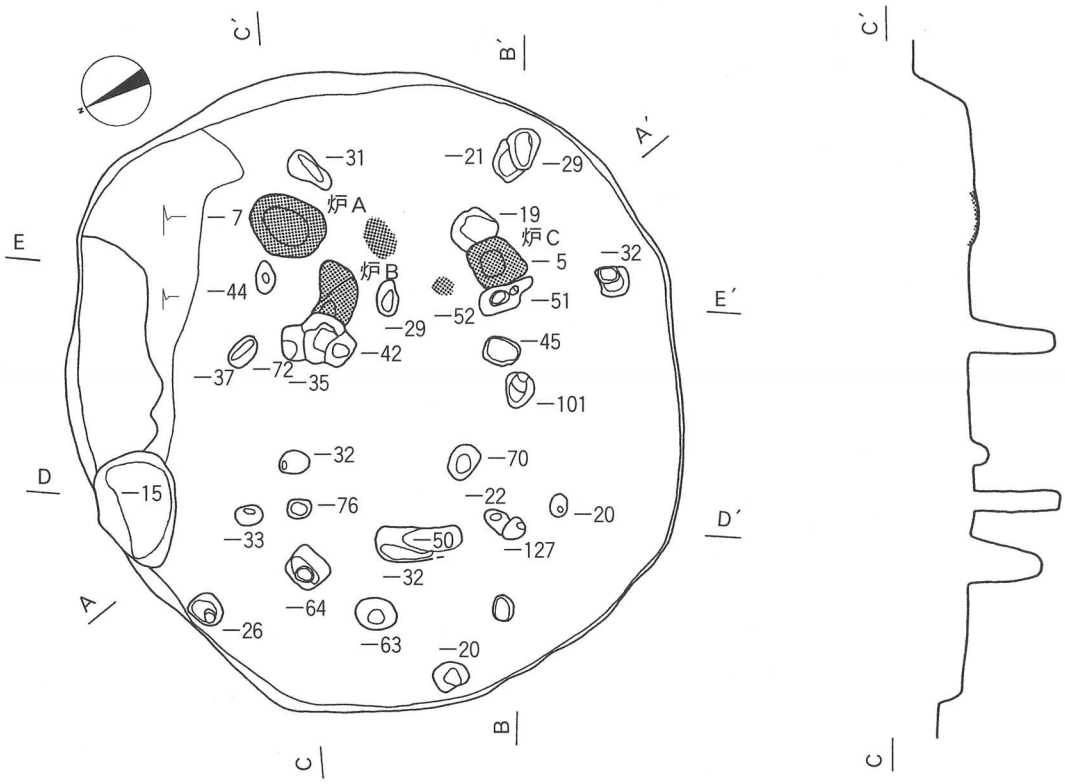
炉跡　東側奥壁側に地床炉が３ヶ所検出された。東よりＡ・Ｂ・Ｃと呼称する。規模・形状はＡ－平面楕円形、長径65cm、深さ７cm、Ｂ－平面不整形、長径（45）cm、深さ11cm、Ｃ－平面ほぼ円形、長径50cm、深さ５cmを測る。炉Ｂ覆土中より50点程の主としてチャート製のチップが出土した。この他炉Ａ・Ｃ間に焼土溜まりが２ヶ所見られた。

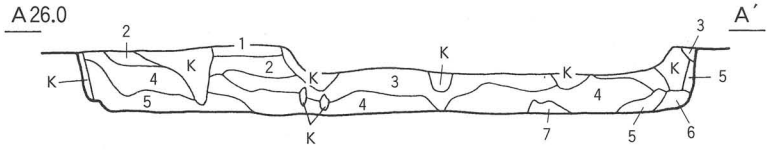
覆土　８層に分層された。壁際にローム粒子の混入が見られ壁崩れ土と思われる。

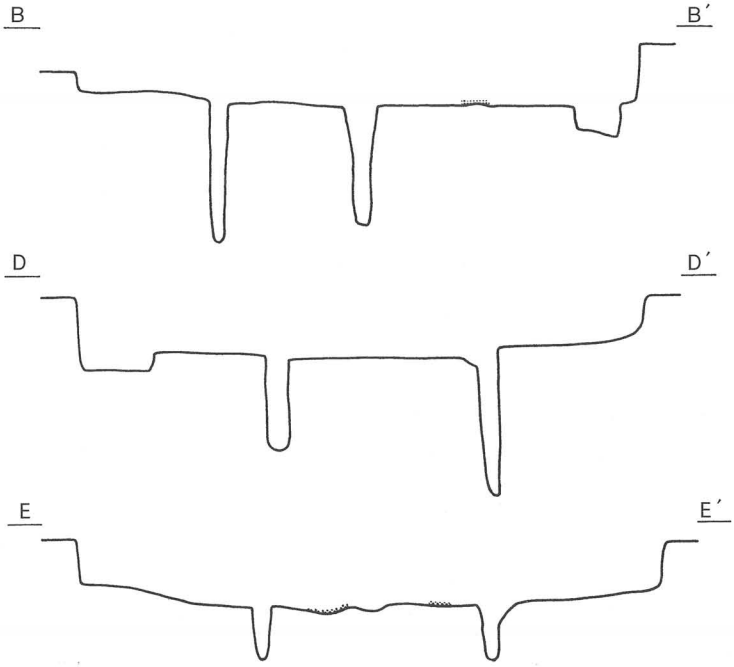
遺物　広い範囲に散在し、床面より浮いているものが多い。北側の大きなピット内よりまとまって出土している。１は尖底部で外面には縦削りが施される。第Ｉ群沈線文系に相当する。

２～４は胎土に繊維の混入が見られた。２は半截竹管状工具による弧の浅いコンパス文で、下半に縄文がわずかに観察されたが原体は不明である。３はＲ撚糸文か。４は底部で底径5.1cm、半截竹管状工具で押し引きされ底面は無文であった。第Ⅱ群に相当する。

５は波状縁で、口縁に沿い２条の浮線文が巡り、この上に半截竹管状工具による爪形文が連続する。波頂部下には円形貼付文が付される。６は平縁で口唇部が外削ぎ状を呈し、ここに条線帯が施文され稜を形成する。下半はアナダラ属系貝類腹縁による波状文が、多段にわたり施文されている。７・８は平縁で口唇部が外削ぎ状を呈し、７は斜刻文、８は条線帯が施文される。下半は浅い変形爪形文で、７は文様間に刺突が連続する。外面には炭化物が付着していた。９は平縁で２段残る輪積み上に指頭痕が連続するいわゆる凸凹文である。下半はアナダラ属系貝類腹縁による波状文で、外面には炭化物が付着していた。10は平縁で口唇部は外削ぎ状を呈し、ここに条線帯が施文される。下半はアナダラ



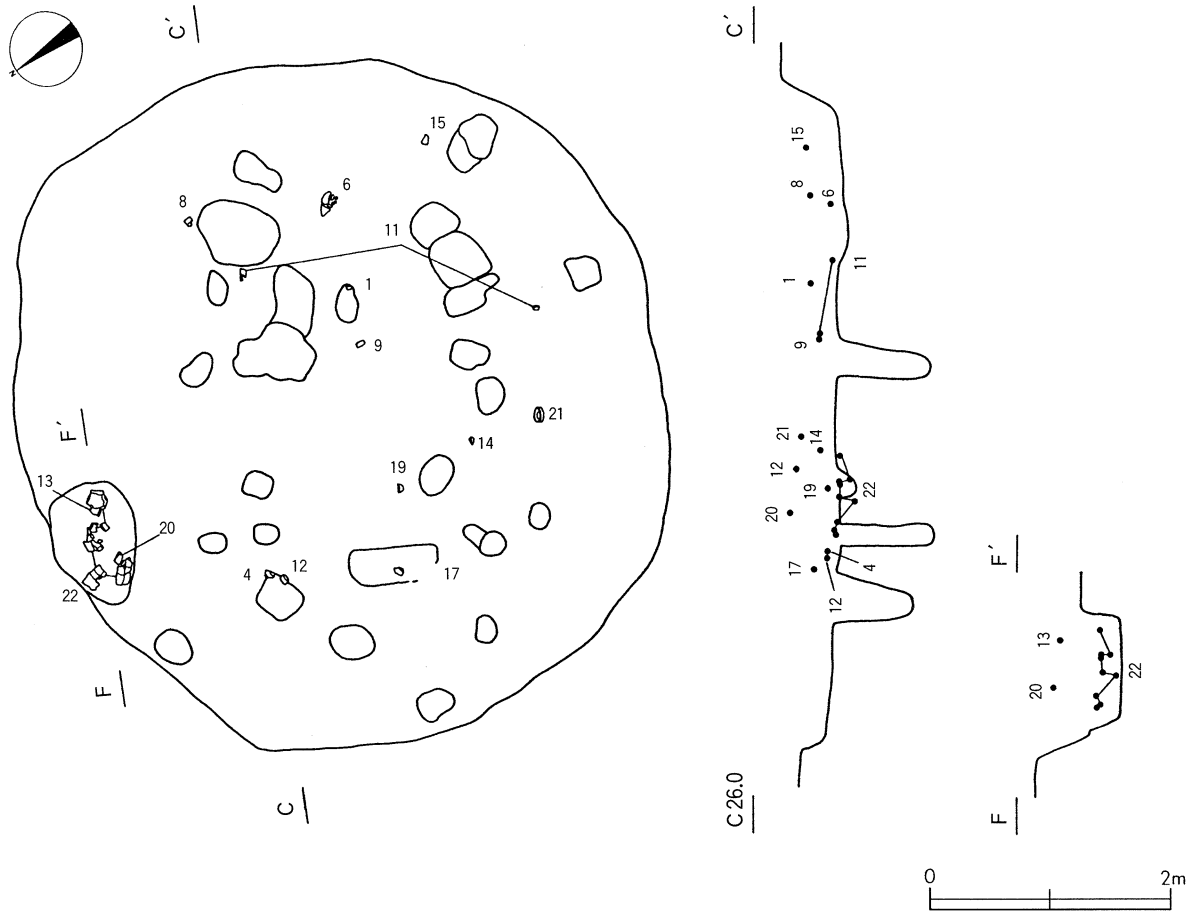




1　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒・炭化粒少量、ローム粒中量、白色粒少量、粘性弱
3　7.5YR2/3　極暗褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量、粘性弱
4　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
5　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム粒中量、しまり弱
6　7.5YR4/4　褐色　焼土粒少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
7　5YR3/4　極赤褐色　焼土中～粒多量、炭化粒中量、ローム粒少量、粘性弱

0　2m

第14図　第３号住居跡

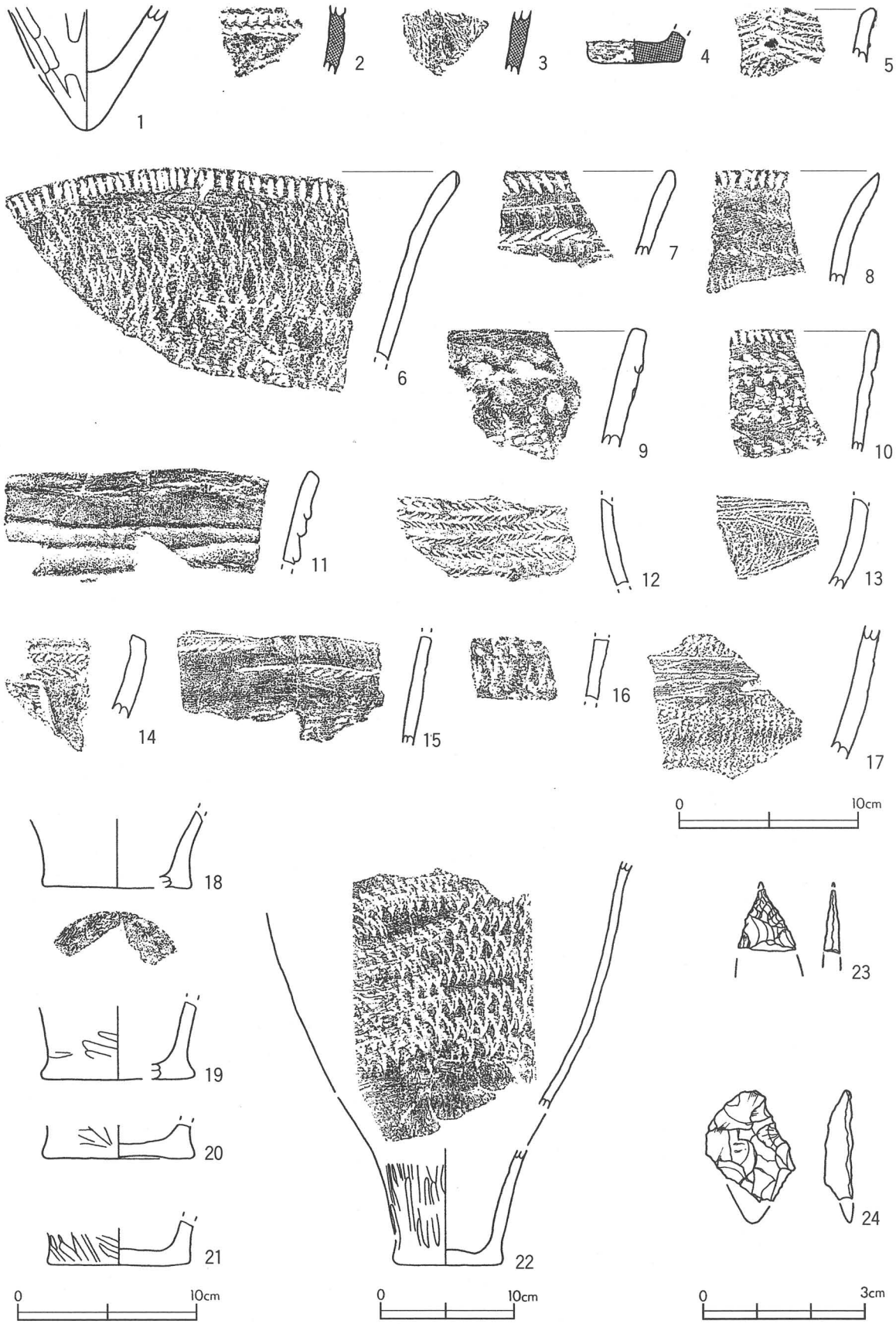


第15図　第３号住居跡遺物出土状況

属系貝類による波状文で、波状文の下端が三角文となる。外面には炭化物が付着していた。11は平縁で、口唇部は平坦で多段にわたり輪積み痕を残している。下半は不明。12は多段にわたる浮線文でこの上に半截竹管状工具による爪形文が連続する。13は地文に原体不明の縄文があり、半截竹管状工具による平行線間に弧線文・斜行文が描かれる。14は浅鉢形と思われる。稜を有しここに細かな斜刻文が施文され、直下は同様の文様で刻文の向きを変えている。曲線的な区画文間にも刻文が見られた。遺構外出土土器（第28図15）と同一個体と思われる。15は横位沈線文間に浅い変形爪形文、下半はアナダラ属系貝類による波状文が描かれる。７と同一個体であろう。外面には炭化物が付着していた。16はアナダラ属系貝類腹縁による波状文である。17は板状工具による平行線文が描かれ、この間は斜行文、上下方はアナダラ属系貝類腹縁による波状文が連続する。５～16は第Ⅲ群で５・12～14は１類、６は２類Ｂ、７～11・15は２類Ｃ、17は３類に相当する。

18～21は底部で全て無文であった。18は底径［8.2］cm、外面は削りを有し、底面には編み物の痕跡が観察された。19は底径［8.6］cm、外面は横磨きされ内面には炭化物が付着していた。20は底径［8.4］cm、底面・内外面ともに磨かれていた。21は底径7.9cmで内外面共に磨きがなされ、内面には炭化物が付着していた。第Ⅷ群に相当する。

22は底径8.0cm、底部は直線的に立ち上がり口縁に向かい胴中位よりゆるやかに外反する。上半はハ



第16図　第３号住居跡出土遺物

マグリ系貝類腹縁による波状文が多段にわたり、これに重複してアナダラ属系貝類による押し引き文が施文されている。場所を変えて同じ部位には三角文も連続して見られた。下半は無文で縦磨きされる。内面は二次焼成を受け器面が非常に荒れており、オコゲ状の炭化物が付着していた。第Ⅲ群２類Ｃに相当する。

23は石鏃の先端部で、側縁には細かな調整剥離が施される。24は石鏃の未製品である。１次剥離から形状を整える過程で折損したのであろう。

所見　炉跡の位置から入り口部は西側と想定される。炉跡は３ヶ所確認されたが炉Ｂを壊してピットを構築しており本炉跡は古い。他炉跡の新旧関係は不明である。時期は北側ピット内の出土遺物から前期後半浮島Ⅲ式期に相当する。

（単位：cm、g）

No	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　　考
23	石鏃	約1/2	(1.1)	(1.0)	(0.3)	(0.3)	チャート	先端部
24	石鏃未製品	一部欠	(2.0)	(1.6)	(0.5)	(1.7)	黒色安山岩	

２．土坑

第１号土坑（第17図：ＰＬ４・11）

位置　調査区東側Ｄ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径（109）cm、短径89cmの楕円形を呈し、深さは87cmを測る。坑底は平坦で壁は外傾して立ち上がる。南側は耕作による撹乱を受けていた。

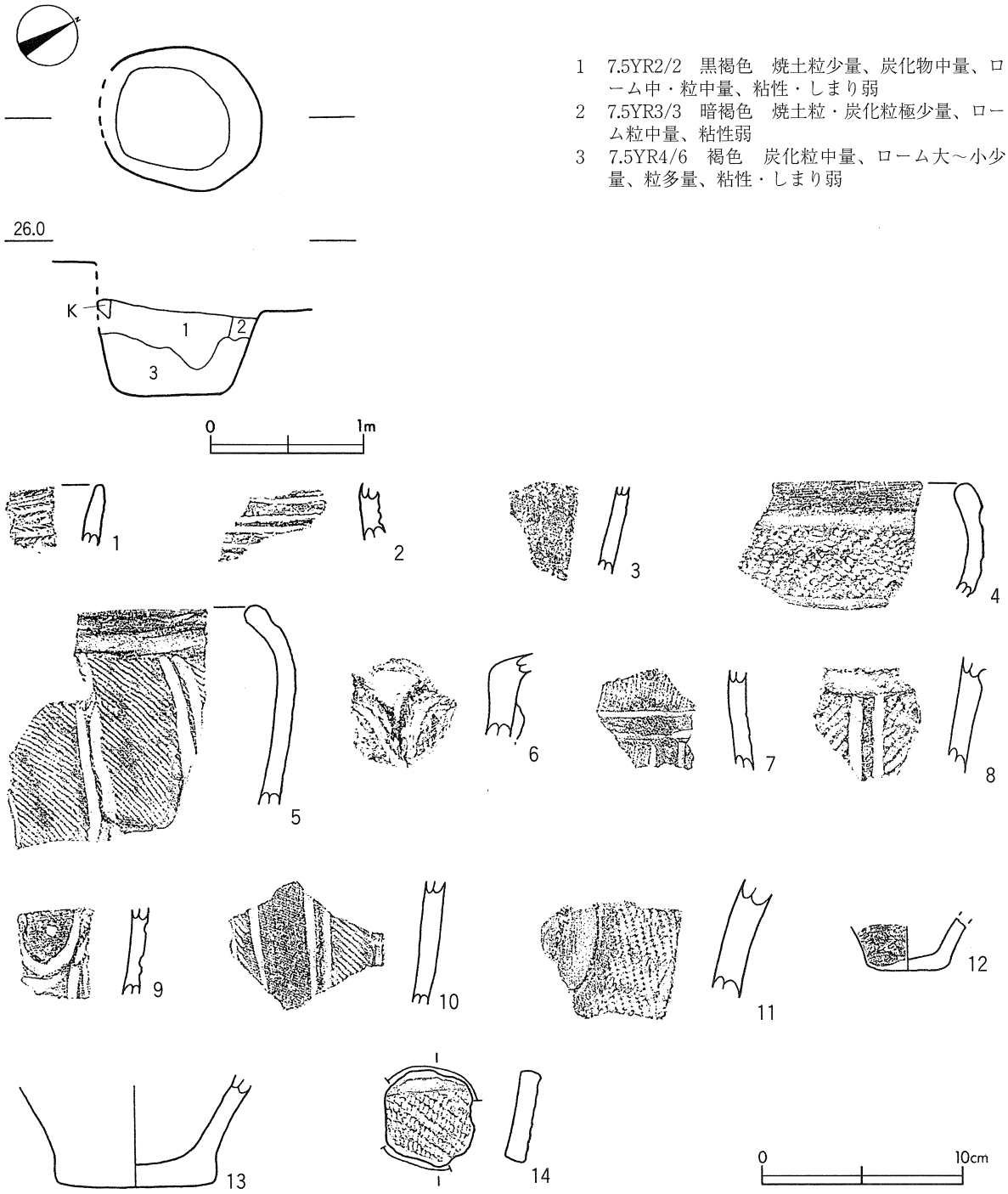
長軸方向　Ｎ－40°－Ｅ

覆土　３層に分層された。１・３層にローム質土の混入が見られ、埋め戻し土と考えられる。

遺物　覆土中より出土している。１は波状縁で口縁に沿い扁平な浮線文が巡る。浮線文上は半截竹管状工具による爪形文が連続していた。２は地文縄文だが原体は不明、半截竹管状工具による平行沈線文が描かれる。第Ⅲ群１類に相当する。３はアナダラ属系貝類腹縁による波状文である。第Ⅲ群２類に相当する。

４は平縁で内彎する器形を呈する。口縁に沿い浅くなでた様な沈線文が１条巡り、口縁下には楕円形区画文が描かれる。区画内は単節 RL が見られた。５は平縁で内彎する器形を呈し、口縁に沿って幅の広い沈線文が１条巡る。下半は地文無節Ｌで「Ｕ」字状区画文が描かれ、無文帯は見られない。６は屈曲部で片側に沈線が沿う隆帯文により楕円形区画文が描かれる。区画内は縄文が施文されているが残存部が少なく原体は不明である。７は横位に巡る平行線間を無文とし、この上下方は４～６条を１単位とする条線文が縦方向に施文され、下半の垂下沈線文間も無文とする。８は横位沈線文に接続する垂下沈線文である。地文は０段多条 RL で沈線間は磨消されていた。９は沈線による曲線文、無節Ｌが充填されている。内面には炭化物が付着していた。10は垂下沈線文で無節Ｌが施文される。縄文帯と無文帯の幅は不規則であった。11は両側がなでられる微隆起線文による曲線文で、単節 RL が施文されていた。４・５・９は第Ｖ群２類、６～８は第Ｖ群１類、10・11は第Ｖ群３類に相当する。

12・13は底部である。12は底径4.0cm、外面は器面が荒れており縄文の有無は不明である。底面は磨かれていた。13は底径8.0cm、底部より直線的に立ち上がり外反する器形を呈する。無文で外面・底面



第17図　第１号土坑・出土遺物

共に磨かれていた。外面には炭化物が付着していた。第Ⅷ群に相当する。

14は土製円盤である。完形で周縁は一部磨られていた。

時期　中期後半期に相当すると思われる。

（単位：cm、g）

No	名　称	残存	大きさ	重量	整 形	文　　様	時期	備　　考
14	土製円盤	完形	4.7×4.4	22.8	一部磨り	0段多条RL　沈線文	第Ⅴ群	

第2号土坑（第18図：ＰＬ４）

位置　調査区東側Ｄ・Ｅ－２グリッドに位置する。

規模・形状　長径（100）cm、短径（84）cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。坑底は起伏を有し、壁は直線的に外傾して立ち上がる。東側は耕作による撹乱を受けている。

長軸方向　Ｎ－15°－Ｗ

覆土　２層に分層される。壁際は撹乱を受けていた。

遺物　覆土中より中期後半片２点、無文片３点出土したが小片のため図化していない。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第3号土坑（第18図：ＰＬ４）

位置　調査区南側Ｄ－３・４グリッドに位置する。

規模・形状　長径108cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。坑底は平坦で壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。

長軸方向　Ｎ－57°－Ｅ

覆土　２層に分層される。覆土中央に大きく撹乱を受けている。

遺物　覆土中より縄文片２点、無文片１点出土したが小片のため図化していない。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第4号土坑（第18図：ＰＬ４・11）

位置　調査区南側Ｄ－４グリッドに位置する。

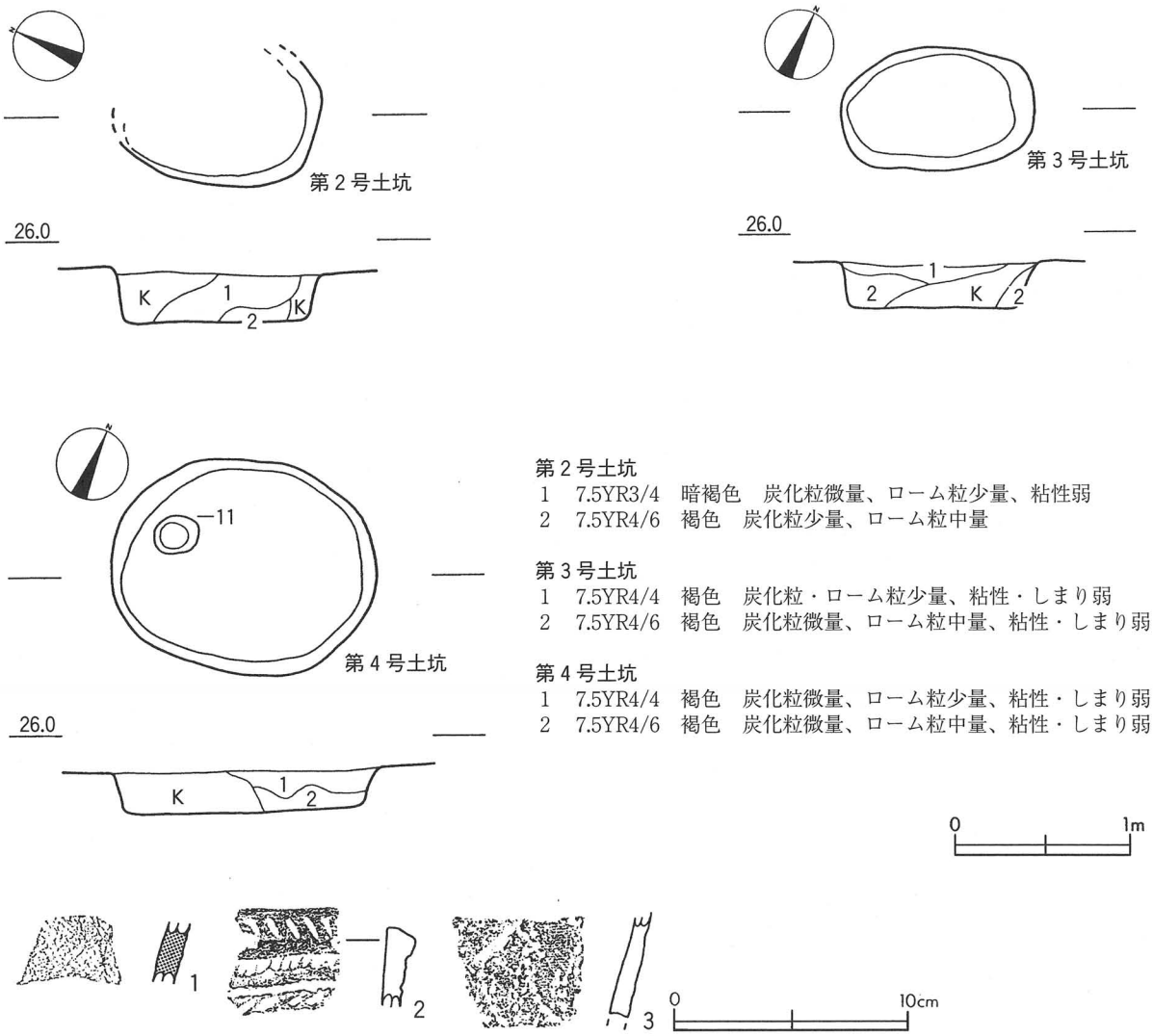
規模・形状　長径150cm、短径122cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。坑底は平坦で壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。坑底西側には径26cm、深さ11cmの円形ピットが見られた。

長軸方向　Ｎ－77°－Ｅ

覆土　２層に分層される。西側に大きく撹乱を受けている。

遺物　覆土中より３点出土した。１は胎土に繊維を混入し、単節縄文が羽状に施文されている。第Ⅱ群に相当する。２は平縁で口唇部は幅が広く外傾している。ここに半截竹管状工具による斜刻文が連続し、下半は有節平行線文・斜位刺突文が描かれる。３はアナダラ属系貝類腹縁による波状文が描かれる。２・３は第Ⅲ群２類、２は同Ｂに相当する。

時期　前期後半期の可能性が考えられる。



第２号土坑
1　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒微量、ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム粒中量

第３号土坑
1　7.5YR4/4　褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
2　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微量、ローム粒中量、粘性・しまり弱

第４号土坑
1　7.5YR4/4　褐色　炭化粒微量、ローム粒少量、粘性・しまり弱
2　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微量、ローム粒中量、粘性・しまり弱

第18図　第２・３・４号土坑・第４号土坑出土遺物

第６号土坑（第19図：ＰＬ４・11）

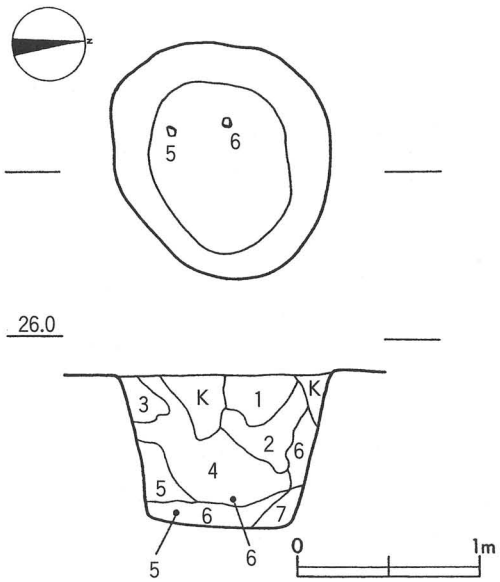
位置　調査区南側Ｃ－４・５グリッドに位置する。

規模・形状　長径125cm、短径118cmの円形を呈し、深さ84cmを測る。坑底は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる。

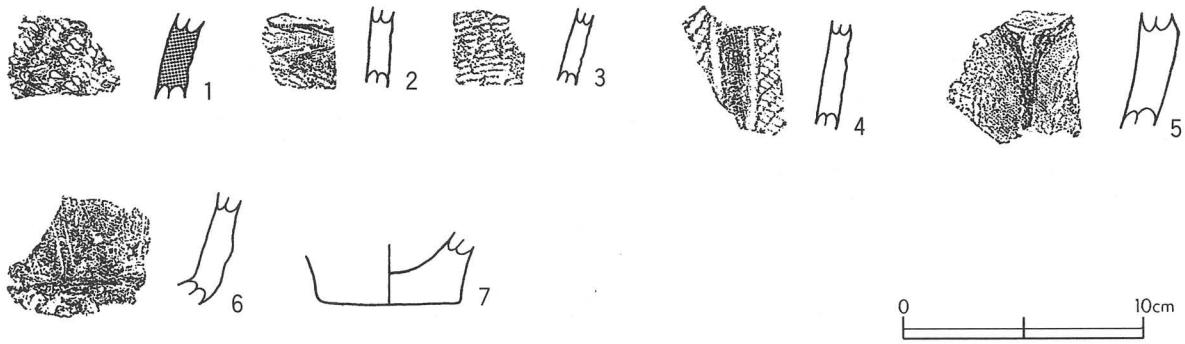
覆土　７層に分層された。全体にローム質土の混入が見られ、埋め戻し土と考えられる。

遺物　覆土下位より出土している。１は胎土に繊維を混入し、単節 LR が施文されている。第Ⅱ群に相当する。２は平行に巡る浮線文で斜刻文が連続し、下半は単節 LR である。３はアナダラ属系貝類腹縁が押圧される。２は第Ⅲ群１類、３は第Ⅲ群３類に相当する。４は垂下沈線文で単節 RL と無文帯が交互に施文されている。５は両側がなでられる微隆起線文による曲線文が垂下し、縄文は単節 LR である。６は底部直上の破片で、３条１単位の条線文が垂下する。４は第Ⅴ群２類、５・６は第Ⅴ群３類に相当する。７は無文底部である。底径5.8cm、外面・底面は磨かれていた。第Ⅷ群に相当する。

時期　土坑下位より出土した土器により中期後半期に相当すると思われる。



1　7.5YR4/4　褐色　炭化粒微量、ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR3/4　暗褐色　炭化物・ローム大微量、ローム粒少量、粘性・しまり弱
3　7.5YR4/4　褐色　炭化粒・ローム粒中量、ローム中・小少量、粘性弱
4　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒中量、粘性・しまり弱
5　7.5YR4/6　褐色　ローム小少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
6　7.5YR4/6　褐色　炭化粒・ローム粒中量、ローム中微量、しまり弱
7　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム大～粒中量、粘性・しまり弱



第19図　第６号土坑・出土遺物

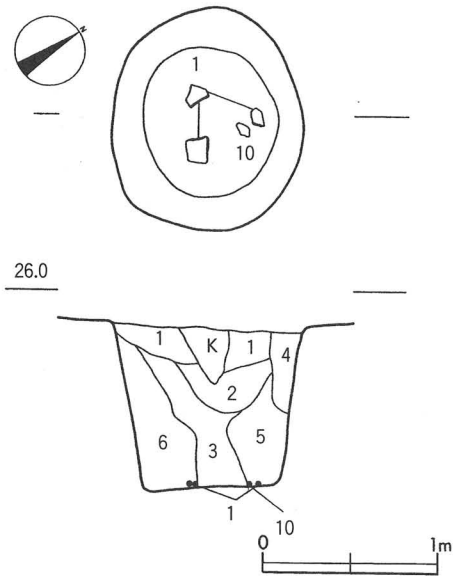
第７号土坑（第20図：ＰＬ４・11）

位置　調査区南側Ｂ・Ｃ－４グリッドに位置する。

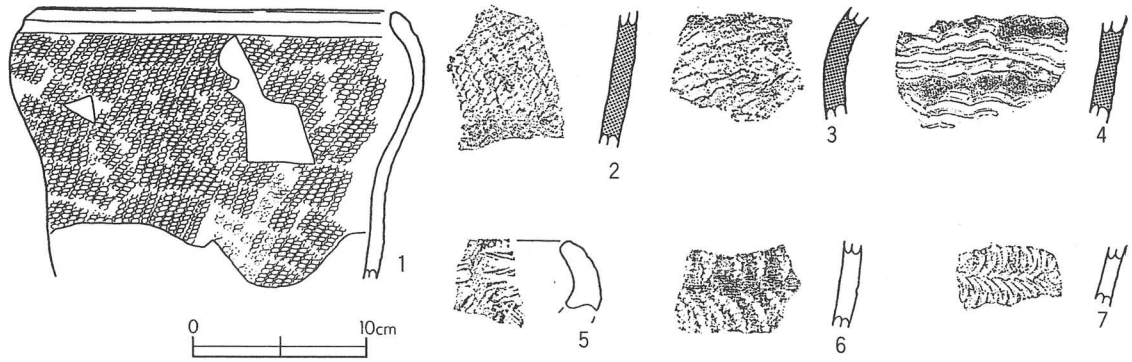
規模・形状　長径126cm、短径110cmの円形を呈し、深さ95cmを測る。坑底は平坦で壁は直線的に立ち上がる。

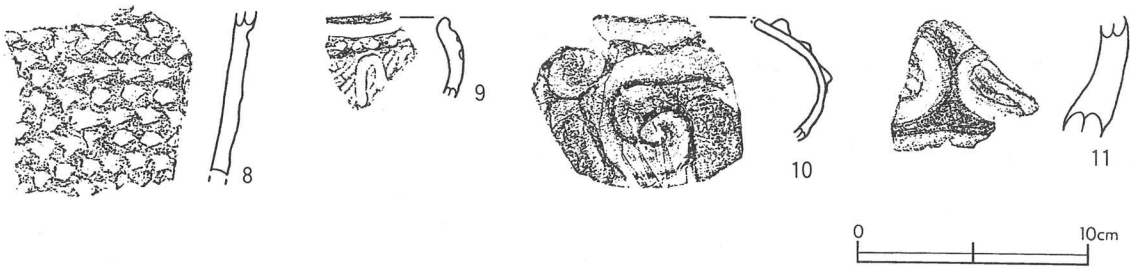
覆土　６層に分層された。３・５層にローム質土の混入が見られ、埋め戻し土と考えられる。

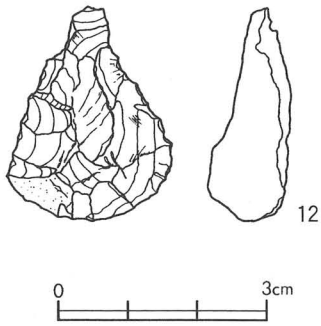
遺物　坑底部より出土している。１は平縁で口径［20.8］cm、口縁部が内彎し、ゆるやかに括れる器形を呈する。口縁に沿い口縁下無文帯と同じ幅の沈線文が１条巡る。下半は単節 RL である。第Ⅴ群３類に相当する。２～４は胎土に繊維を混入していた。２は単節縄文が羽状に施文されている。３は屈曲部で無節 L、４は半截竹管状工具によるコンパス文が描かれる。第Ⅱ群に相当する。５はゆるやかな波状縁で内彎する器形を呈する。口唇部は平坦で直線的な浮線文上に細かい斜刻文が連続する。６はアナダラ属系貝類腹縁による波状文、７は変形爪形文で、貝による施文かもしれない。８は三角文が多段にわたっている。５は第Ⅲ群１類、６～８は第Ⅲ群２類で８は同Ｃに相当する。９は波状縁で口縁に沿う沈線文が１条巡る。沈線下は円形竹管文が連続し、下半は地文単節 RL で曲線的な沈線文が描かれる。磨消は見られない。内外面には炭化物が付着していた。10は壷もしくは鉢形を呈する



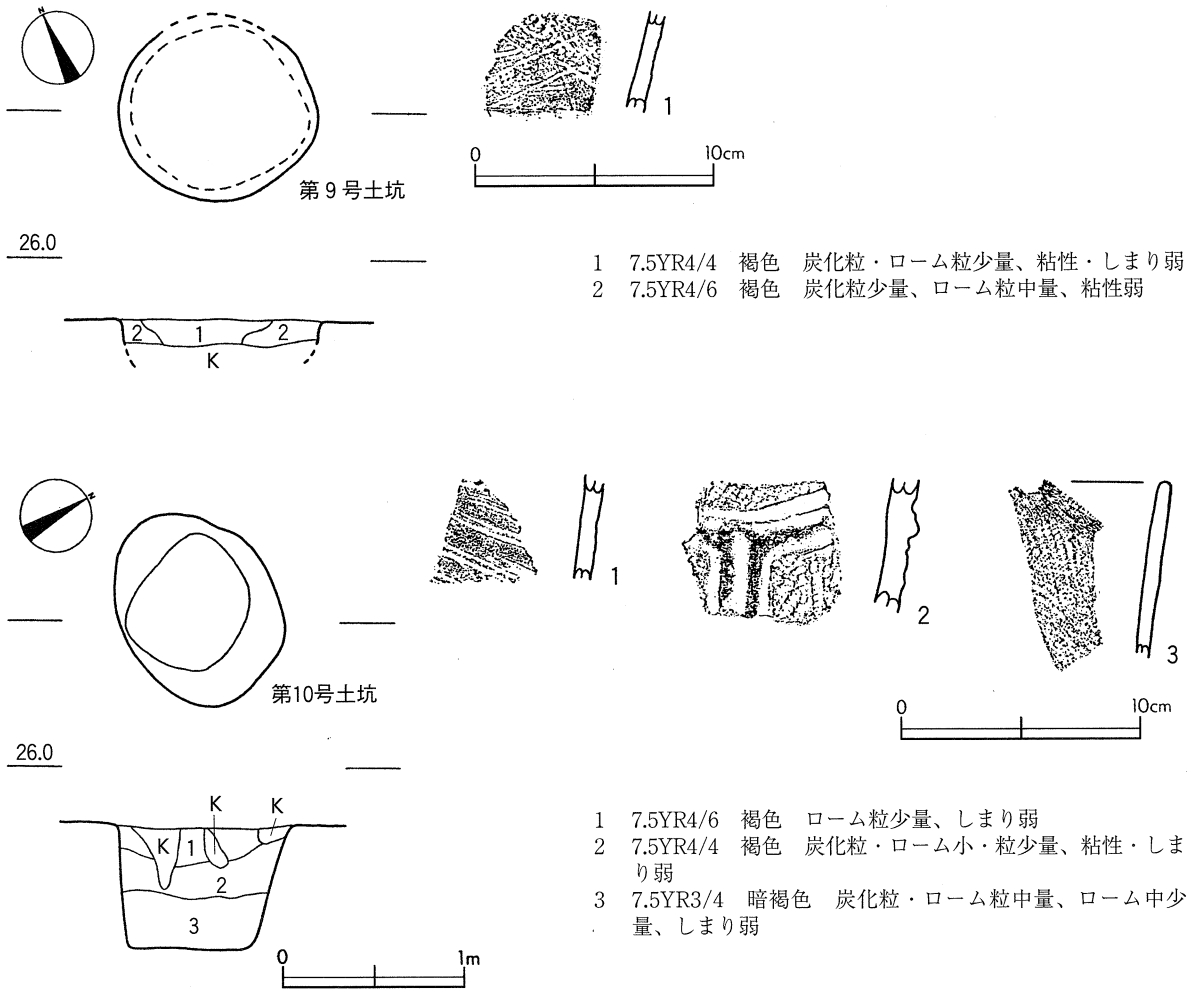
1　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒少量、炭化粒・ローム粒中量、粘性・しまり弱
2　7.5YR2/3　極暗褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒中量、粘性弱
3　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒・ローム中・小少量、炭化粒・ローム粒中量、粘性弱
4　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒微量、ローム粒少量、粘性・しまり弱
5　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒微量、炭化粒・ローム大～小少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
6　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒中量、ローム粒少量、しまり弱







第20図　第７号土坑・出土遺物



第21図　第９・10号土坑・出土遺物

器形である。平縁で微隆起線文による曲線文が描かれる。薄手で外面には赤彩が施されていた。11は口縁部下の破片である。片側に沈線が沿う隆帯文による区画文で、区画内には０段多条 RL が施文されていた。９・10は第Ⅴ群３類、11は第Ⅴ群２類に相当する。

12は石鏃の未製品で一部に礫面が残る。

時期　土坑下位より出土した土器により中期後半加曽利ＥⅣ式期に相当する。

（単位：cm、g）

No	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　　考
12	石鏃未製品	――――	3.1	2.4	1.2	6.8	チャート	

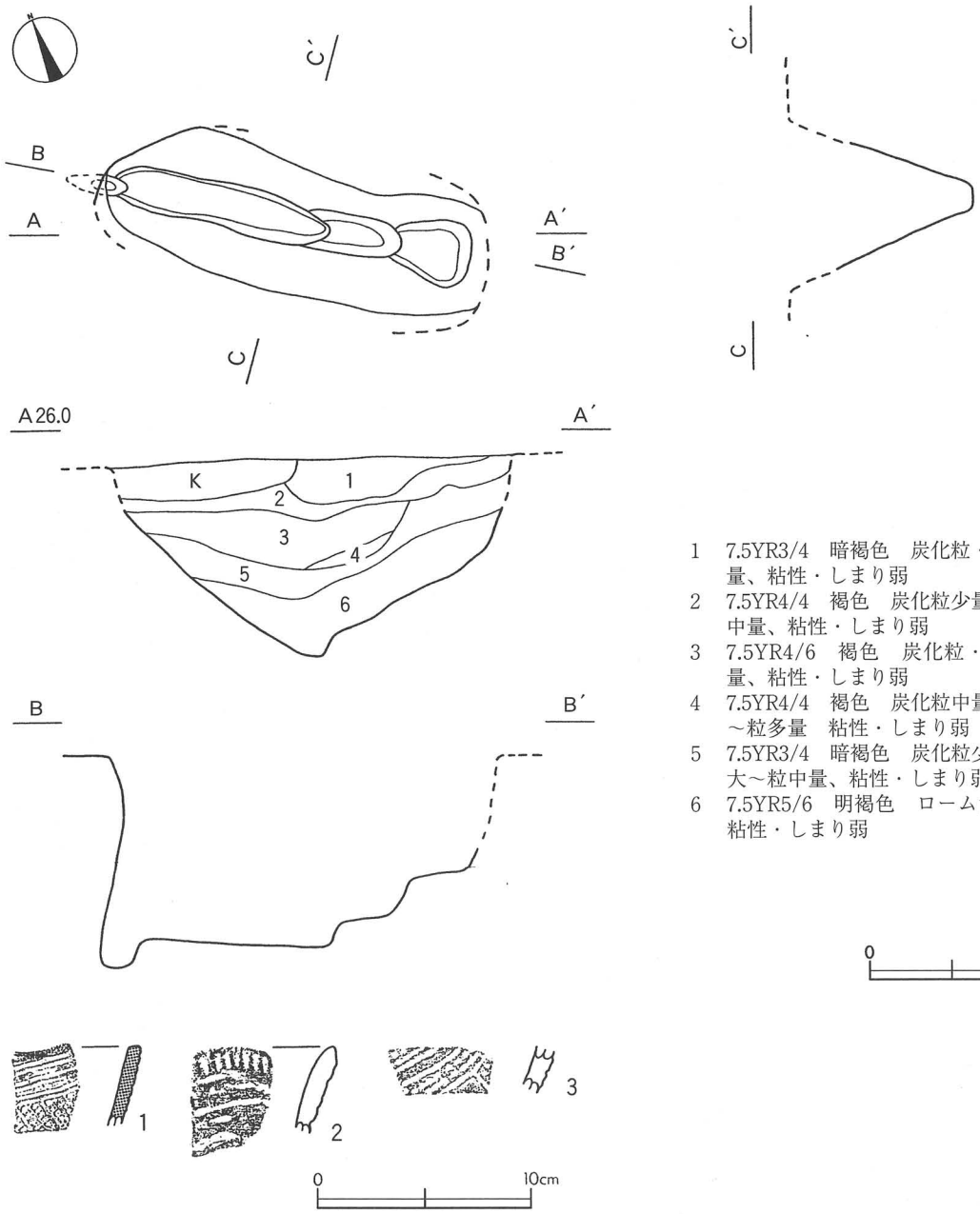
第９号土坑（第21図：ＰＬ５・12）

位置　調査区北側Ｚ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径109cm、短径（102）cmの円形を呈する。深さ・坑底の形状は耕作による撹乱のため不明である。

覆土　撹乱上は２層に分層された。

遺物　覆土中より１点出土している。平行沈線による菱形区画文が描かれ、区画内はアナダラ属系貝



第22図　第11号土坑・出土遺物

類による押圧が充填している。第Ⅲ群３類に相当する。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第10号土坑（第21図：ＰＬ５・12）

位置　調査区北側Ａ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径106㎝、短径87㎝の楕円形を呈し、深さは70㎝を測る。坑底は平坦で形状は開口部と相似形をなさない。壁は直線的に外傾して立ち上がる。

長軸方向　Ｎ－78°－Ｅ

覆土　３層に分層される。埋め戻し土か。

遺物　覆土中より出土している。１は地文無文、半截竹管状工具による斜位沈線文で、第Ⅲ群２類Ａに相当する。２は沈線が沿う隆帯文による曲線文で、０段多条 RL が施文される。第Ⅴ群１類に相当する。３は波状縁で波頂部に凹みを有している。口唇部下はなでにより幅の狭い無文帯とし、下半は単節 RL が施文されている。第Ⅵ群４類に相当する。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第11号土坑（第22図：ＰＬ５・12）

位置　調査区北側Ａ・Ｂ－０・１グリッドに位置する。

規模・形状　長径（240）cm、短径115cmの長楕円形を呈し、深さ123cmを測る。開口部は耕作による撹乱を受けている。坑底は階段状を呈し、壁は急角度で直線的に立ち上がる。

長軸方向　Ｎ－56°－Ｗ

覆土　６層に分層される。下位にローム質土の混入が見られた。

遺物　覆土中より出土している。１は胎土に繊維を混入している。波状縁で口縁に沿い半截竹管状工具による数条の平行沈線文が巡り、地文は単節 RL で第Ⅱ群に相当する。２は平縁で口唇部が外削ぎ状を呈し、ここに条線帯が施文される。下半は地文無文で有節平行線文が描かれる。第Ⅲ群２類Ｂ～Ｃに相当しよう。３は沈線による直線的な区画文が描かれ、区画内には貝殻文が充填される。第Ⅲ群３類に相当する。

所見　形状から縄文時代の陥し穴と想定される。遺物は埋没過程の流れ込みによるものである。

第12号土坑（第23図：ＰＬ５・12）

位置　調査区北東側Ｂ・Ｃ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径188cm、短径167cmの不整形を呈し、深さ38cmを測る。坑底は平坦で壁は直線的に外傾して立ち上がる。

覆土　４層に分層された。

遺物　覆土中より出土した。１・２は平縁で共に口唇部外削ぎ状を呈し、ここに条線帯が施文される。２は板状工具によると思われる。１は下半が刺突、２は半截竹管状工具による凸凹文が描かれていた。第Ⅲ群２類Ｃに相当する。３は平縁で口唇部は平坦、外反する器形を呈する。下半は半截竹管状工具による横線文である。第Ⅵ群４類に相当する。

４は石核で加撃面と側縁部に礫面を残している。

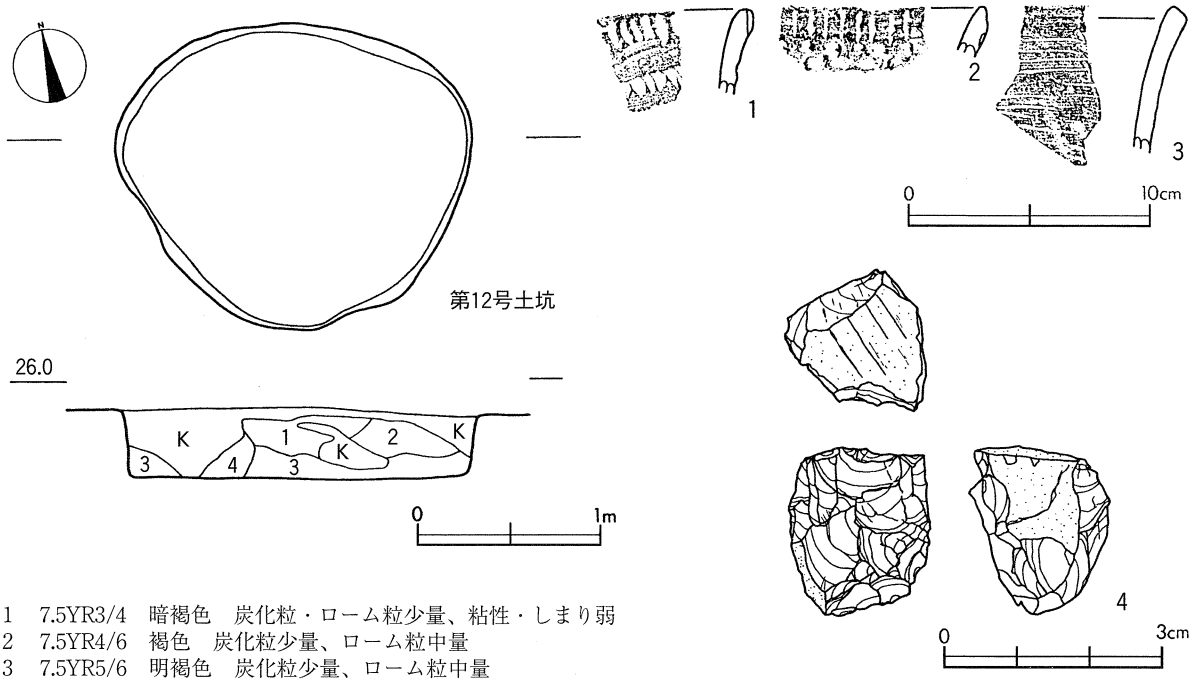
時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

（単位：cm、g）

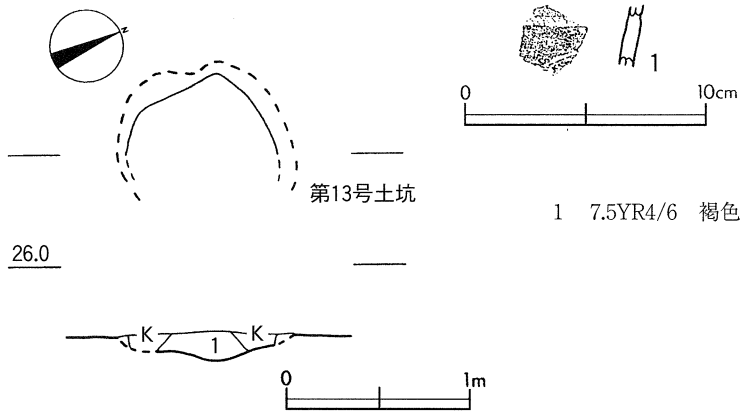
No.	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　　考
4	石核	――――	2.3	2.0	1.9	9.3	チャート	暗青灰色

第13号土坑（第23図：ＰＬ５・12）

位置　調査区東側Ｃ－１・２グリッドに位置する。



1　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
2　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム粒中量
3　7.5YR5/6　明褐色　炭化粒少量、ローム粒中量
4　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少量、ローム粒中量



1　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微量、ローム粒中量、粘性・しまり弱

第23図　第12・13号土坑・出土遺物

規模・形状　長径（98）cm、短径（85）cmの不整形を呈すると思われるが、耕作による撹乱を受けており不明である。深さは17cmを測る。坑底は起伏を有し、壁はゆるやかに外傾する。

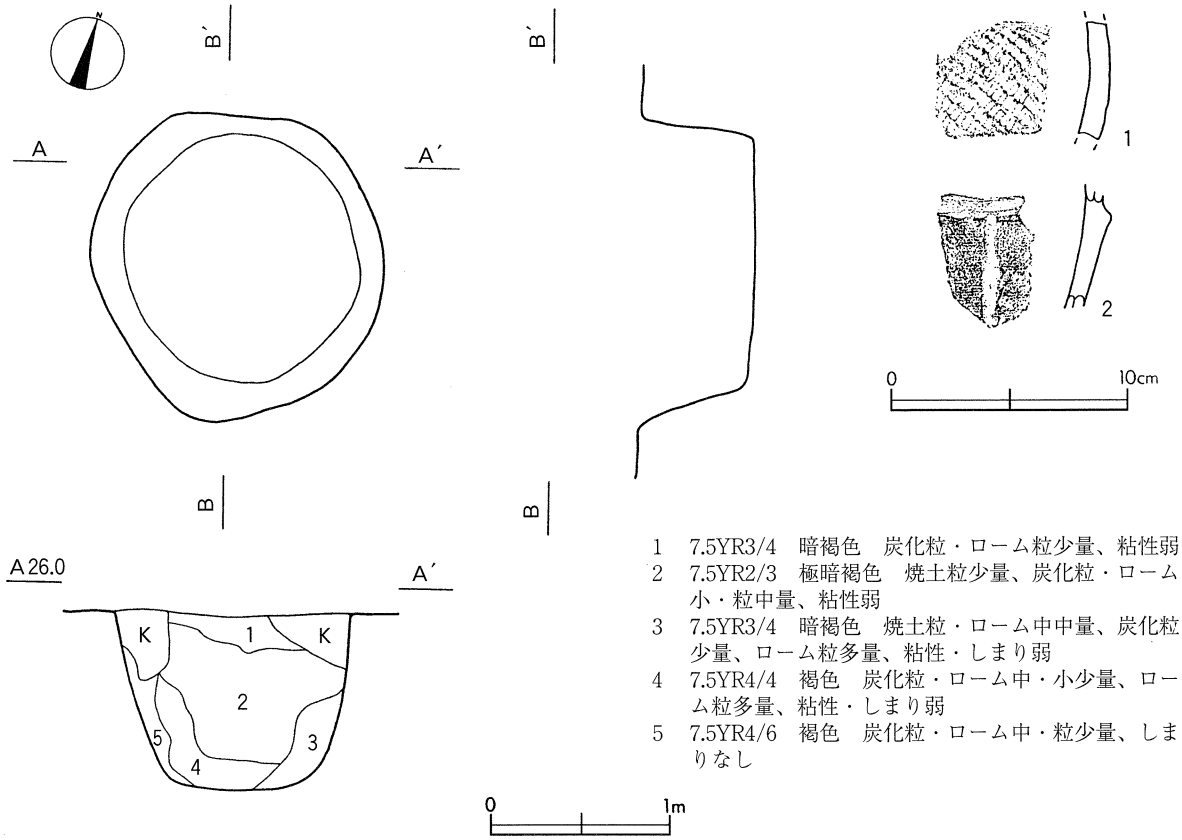
覆土　１層である。

遺物　覆土中より１点出土している。平行沈線間に刺突が連続し、下半は曲線的沈線文内に刻文が施文される。第Ⅵ群３類に相当する。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第14号土坑（第24図：ＰＬ５・12）

位置　調査区中央Ｃ－３グリッドに位置する。第２号住居跡と重複しており、本土坑が新しい。



1　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性弱
2　7.5YR2/3　極暗褐色　焼土粒少量、炭化粒・ローム小・粒中量、粘性弱
3　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒・ローム中中量、炭化粒少量、ローム粒多量、粘性・しまり弱
4　7.5YR4/4　褐色　炭化粒・ローム中・小少量、ローム粒多量、粘性・しまり弱
5　7.5YR4/6　褐色　炭化粒・ローム中・粒少量、しまりなし

第24図　第14号土坑・出土遺物

規模・形状　長径172cm、短径157cmの円形を呈し、深さ96cmを測る。坑底は平坦で壁は直線的に外傾して立ち上がる。

覆土　５層に分層された。ローム質土の混入が見られ、埋め戻し土と考えられる。

遺物　覆土中より２点出土している。１は上端に沈線文が描かれ下半は０段多条 RL、第Ⅴ群１類に相当する。２は口縁部屈曲下で沈線文が垂下する。縄文の有無は不明、第Ⅵ群１類に相当する。共に外面に炭化物が付着していた。また図示はしていないが黒色安山岩製の剥片が出土している。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

第15号土坑（第25図：ＰＬ５・12）

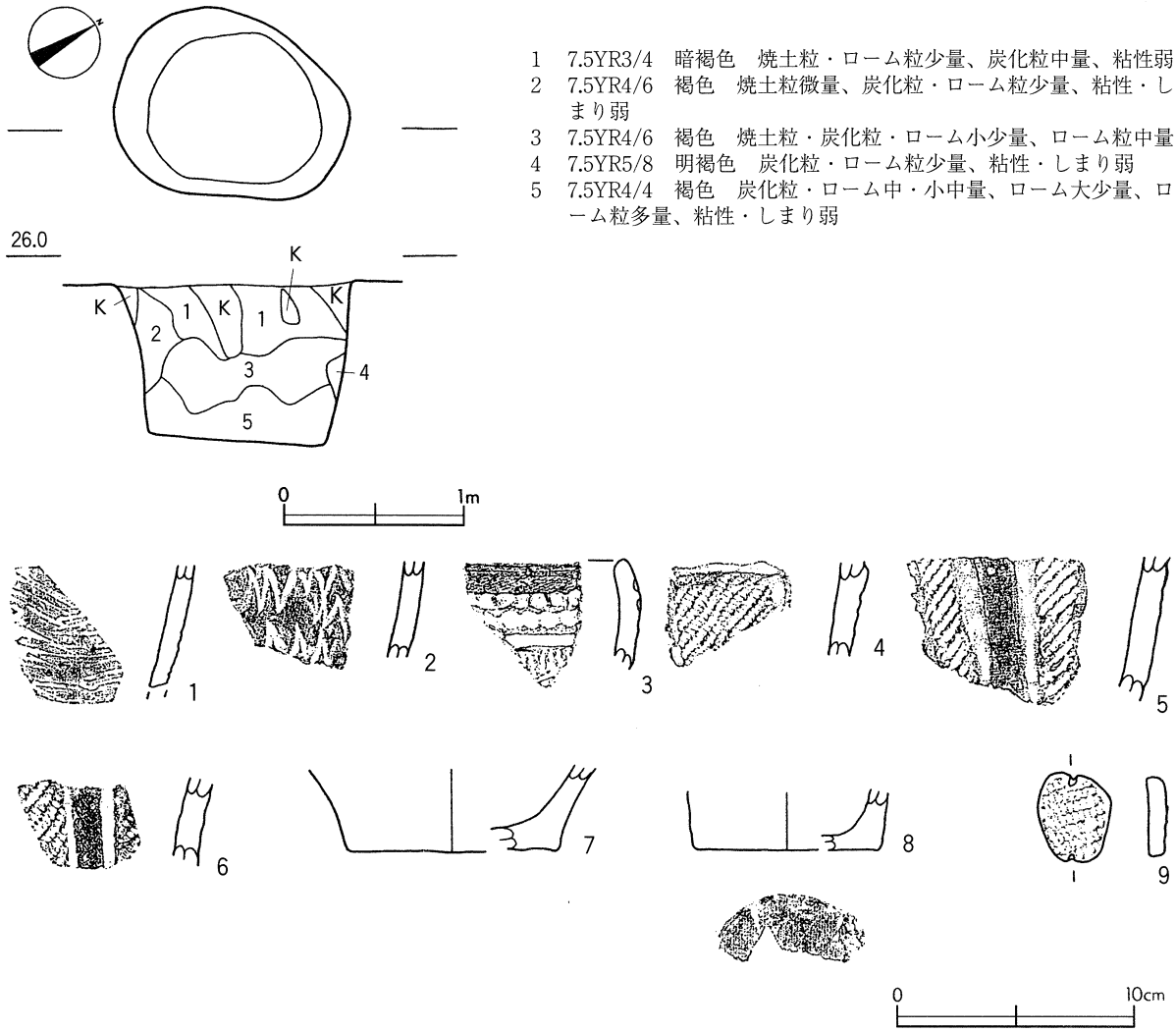
位置　調査区東側Ｃ・Ｄ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径128cm、短径102cmの楕円形を呈し、深さ88cmを測る。坑底は平坦で壁は直線的に外傾して立ち上がる。

長軸方向　Ｎ－48°－Ｅ

覆土　５層に分層された。覆土中～下位にかけてローム質土が混入していた。

遺物　覆土中より出土している。１は半截竹管状工具による斜位沈線文が左→右方向へ施文される。２はハマグリ系貝類腹縁による波状文が描かれる。共に第Ⅲ群で１は１類、２は２類に相当する。３は平縁で内彎する器形を呈する。口縁に沿い円形竹管文が２列並び、下半はＬ撚糸文である。おそら



第25図　第15号土坑・出土遺物

く連弧文であろう。4は横位沈線に接し沈線文が垂下している。5・6は垂下沈線文で5は0段多条RL、6は単節RLを交互に磨消している。3～6は第Ⅴ群2類に相当する。7・8は無文底部である。7は底径［9.0］cm、全体は磨かれていた。8は底径［7.6］cmで、底面は磨かれていたが編み物痕が一部観察できた。第Ⅷ群に相当する。

9は土錘である。完形で縦長の楕円形を呈する。

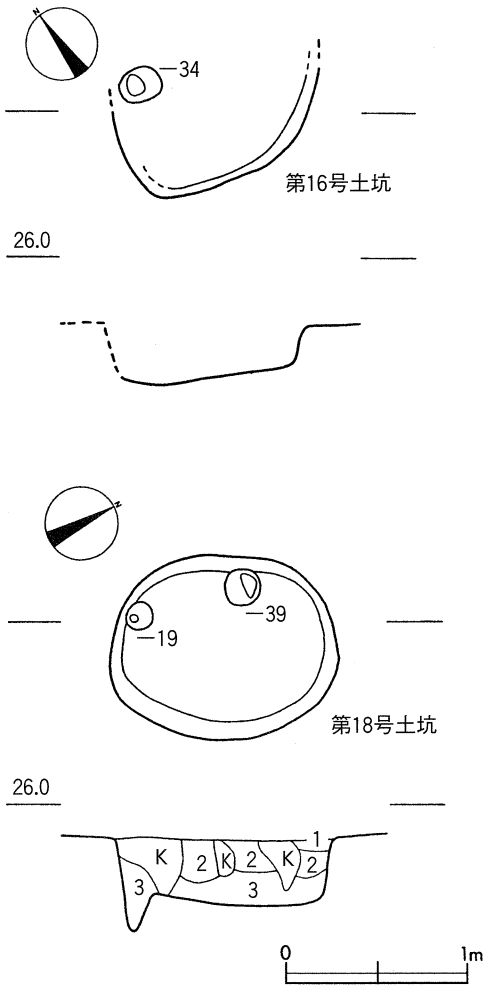
時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。

（単位：cm、g）

No.	名　称	残存	大きさ	重量	整　形	文　様	時期	備　考
9	土錘	完形	3.8×3.1	19.5	全周磨り	0段多条RL	第Ⅴ群	切り目1対

第16号土坑（第26図：ＰＬ５）

位置　調査区西側Ｚ－３グリッドに位置する。



第17号土坑
1　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微量、ローム粒少量、粘性・しまり弱
2　7.5YR4/6　褐色　炭化粒・ローム粒少量、しまり弱
3　7.5YR5/6　明褐色　炭化粒少量、ローム粒中量、粘性弱

第18号土坑
1　7.5YR4/6　褐色　炭化粒・ローム粒少量、粘性・しまり弱
2　7.5YR4/4　褐色　炭化粒中量、ローム粒少量、粘性弱
3　7.5YR5/8　明褐色　炭化粒少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱

第26図　第16・17・18号土坑

規模・形状　長径（135）cm、短径（115）cmで耕作による撹乱を受けるが、おそらく楕円形を呈すると思われる。深さは35cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。坑底は起伏が見られ、西側には径23cm、深さ34cmの楕円形ピットを有する。

長軸方向　（N－75°－E）

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第17号土坑（第26図：ＰＬ６）

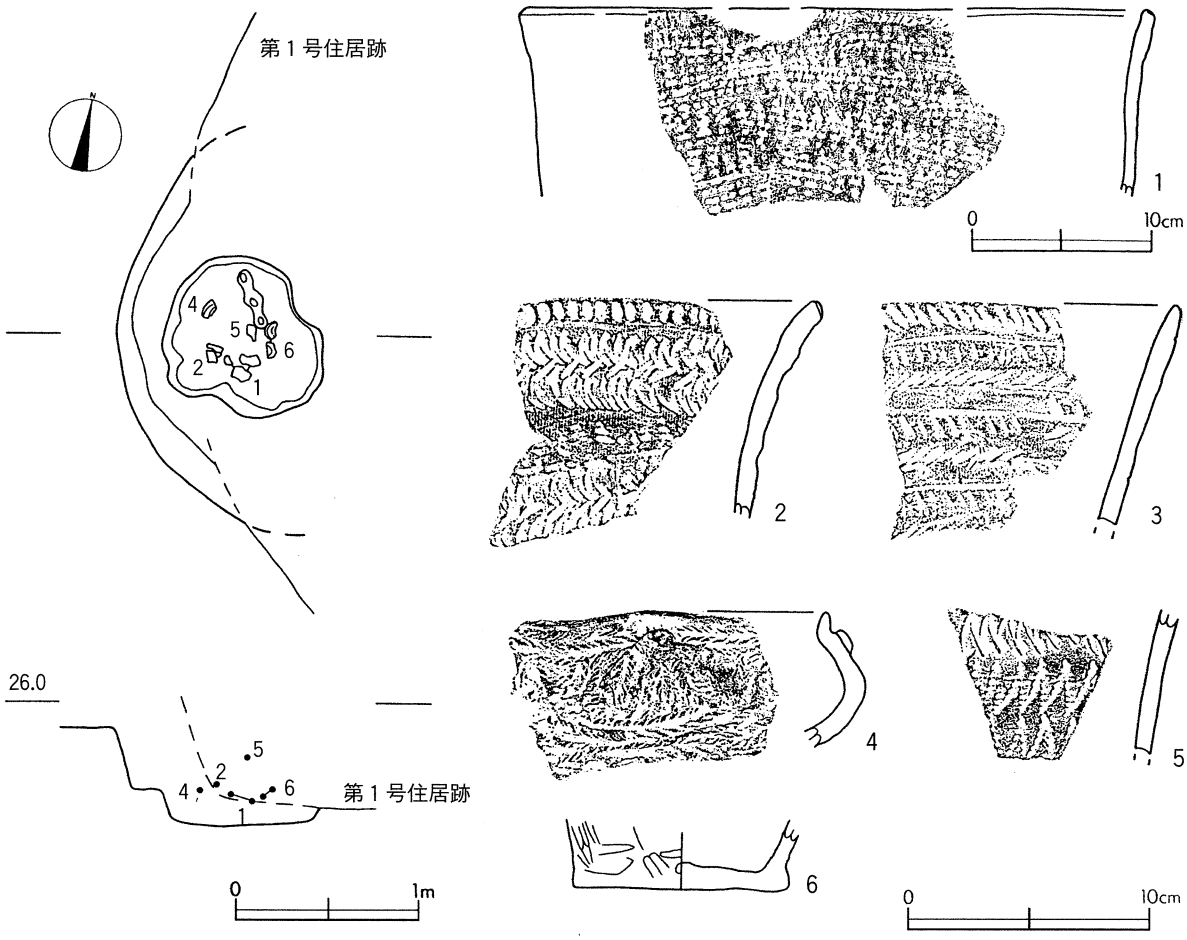
位置　調査区南側Ｄ・Ｃ－３グリッドに位置する。

規模・形状　長径117cm、短径113cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。坑底はほぼ平坦で壁は直線的に外傾して立ち上がる。

覆土　３層に分層される。

遺物　覆土中より前期後半片１点、条線文片１点が出土しているが小片のため図化していない。

時期　遺物は埋没過程の流れ込みによるものだが、覆土観察等から時期は縄文時代と思われる。



第27図　第19号土坑・出土遺物

第18号土坑（第26図：ＰＬ６）

位置　調査区Ｃ－１グリッドに位置する。

規模・形状　長径128cm、短径102cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。坑底は起伏を有し、西側に２ヶ所径15～20cm、深さ19～39cmのピットが見られた。

長軸方向　Ｎ－28°－Ｅ

覆土　３層に分層された。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第19号土坑（第27図：ＰＬ６・12）

位置　調査区中央Ｂ－２・３グリッドに位置する。第１号住居跡と重複し本土坑が古い。調査時は第１号住居跡の一部と位置付けられたが、住居跡のプランが乱れること、住居跡の時期と異なる遺物が集中して出土している状況などから土坑として分離し扱うこととした。

規模・形状　規模は不明だが形状はおそらく円形であろう。坑底部に径90cm、深さ20cmの不整形ピットを有し、この底面には起伏が見られた。壁は直線的に外傾して立ち上がり、深さ35cmを測る。

覆土　第１号住居跡により大きく壊されている。

遺物　下位ピット範囲内の覆土中位より出土している。１は平縁で口径［35.0］cm、口唇部が外削ぎ状を呈し、ここに斜刻文が連続する。貝殻による施文かもしれない。下半はアナダラ属系貝類波状文で、施文方向は水平ではなく向きがさまざまに変化している。２は平縁で外反する器形を呈する。口唇部は外削ぎ状でここを稜とし、棒状工具による縦方向の刺突が連続する。条線帯といえるかもしれない。下半は変形爪形文で、この間を斜位刺突文が逆方向に描かれる。変形爪形文の下はアナダラ属系貝類による押し引き文が見られ、再度変形爪形文へと続く。３は平縁で直線的に立ち上がる器形を呈する。口唇部外削ぎ状でここに斜刻文が連続する。下半は幅の広い平行線文間に多段にわたり変形爪形文が施文される。４は緩やかな波状縁で、大きく内彎する器形を呈する。口縁部と屈曲部上に斜刻文を有する浮線文が巡り、この間を同様の浮線文により斜行文が描かれる。波頂部には円形貼付文が付されていた。５は上方は変形爪形文、下方はアナダラ属系貝類による波状文である。１～５は第Ⅲ群で１～３は２類Ｃ、４は１類に相当する。６は底部で底径8.8cm、無文で全体が磨かれており、内面には炭化物が付着している。第Ⅷ群に相当する。

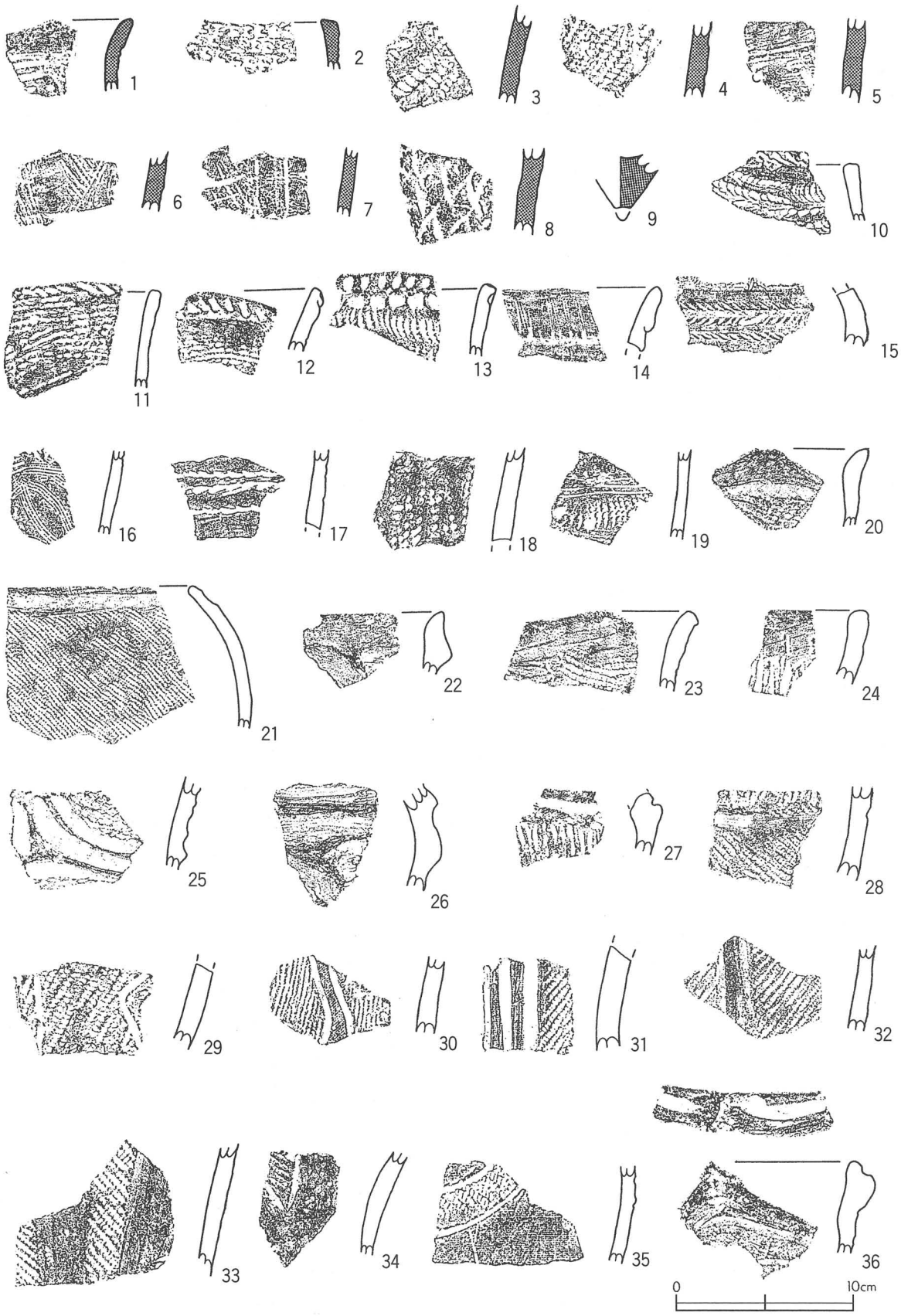
時期　前期後半浮島Ⅲ式期に相当する。

第２節　遺構外出土遺物（第28・29図：ＰＬ13・14）

１．土器

１～９は胎土に繊維を混入している。１は波状縁で水平に途切れる沈線が１条巡る。下半は縄文か、原体不明。２は平縁で口唇部は平坦、半截竹管状工具による刺突列が連続する。３は地文単節 LR で上半に途切れる短沈線文が横位に見られた。４は単節 RL、５・６は間隔の詰まったＬ撚糸文で、５は両側より穿孔される穴が１孔穿たれる。７は不規則な縦位・斜位沈線文、８はアナダラ属系貝類腹縁による波状文が描かれる。１～８は第Ⅱ群に相当する。９は尖底部で外面縦削り、無文である。第Ⅰ群に相当する。

10・11は平縁で平坦な口唇部に斜刻文が連続する。10は下半にハマグリ系貝類腹縁押圧と半截竹管状工具による有節平行線文が多段にわたり施文され、11はアナダラ属系貝類が押圧される。12は口縁部が有段状、口唇部は外削ぎ状を呈する。口縁下は輪積み痕がなできられずに残り、ここに半截竹管状工具による斜位短沈線文が連続する。下半にはアナダラ属系貝類が押圧されていた。13は平縁で平坦な口唇部に棒状工具による刺突が連続し、口唇部が小波状を呈している。口縁下は貝類の押圧による円形刺突が連続し、下半はアナダラ属系貝類が押圧されていた。14は平縁で、口縁下には輪積み痕がなできられずに残り、有段状を呈する。口唇部直下より半截竹管状工具による沈線文が垂下していた。15は浅鉢形と思われる。横位に巡る低い隆起上に細かな斜刻文列が連続し、刻文の方向は各段により異なっている。16は４条１単位の条線文により曲線文が描かれ、上端には刺突の痕跡が見られた。17は半截竹管状工具による有節平行線文が多段にわたる。地文は無文である。18はアナダラ属系貝類による波状文。19は数条の横位沈線文が巡り、この間をアナダラ属系貝類を押圧し充填する。10～19は第Ⅲ群で10は２類Ｂ、11・12・14は２類Ｃ～３類、15・16は１類、17は２類Ａ、13・19は３類に相当する。



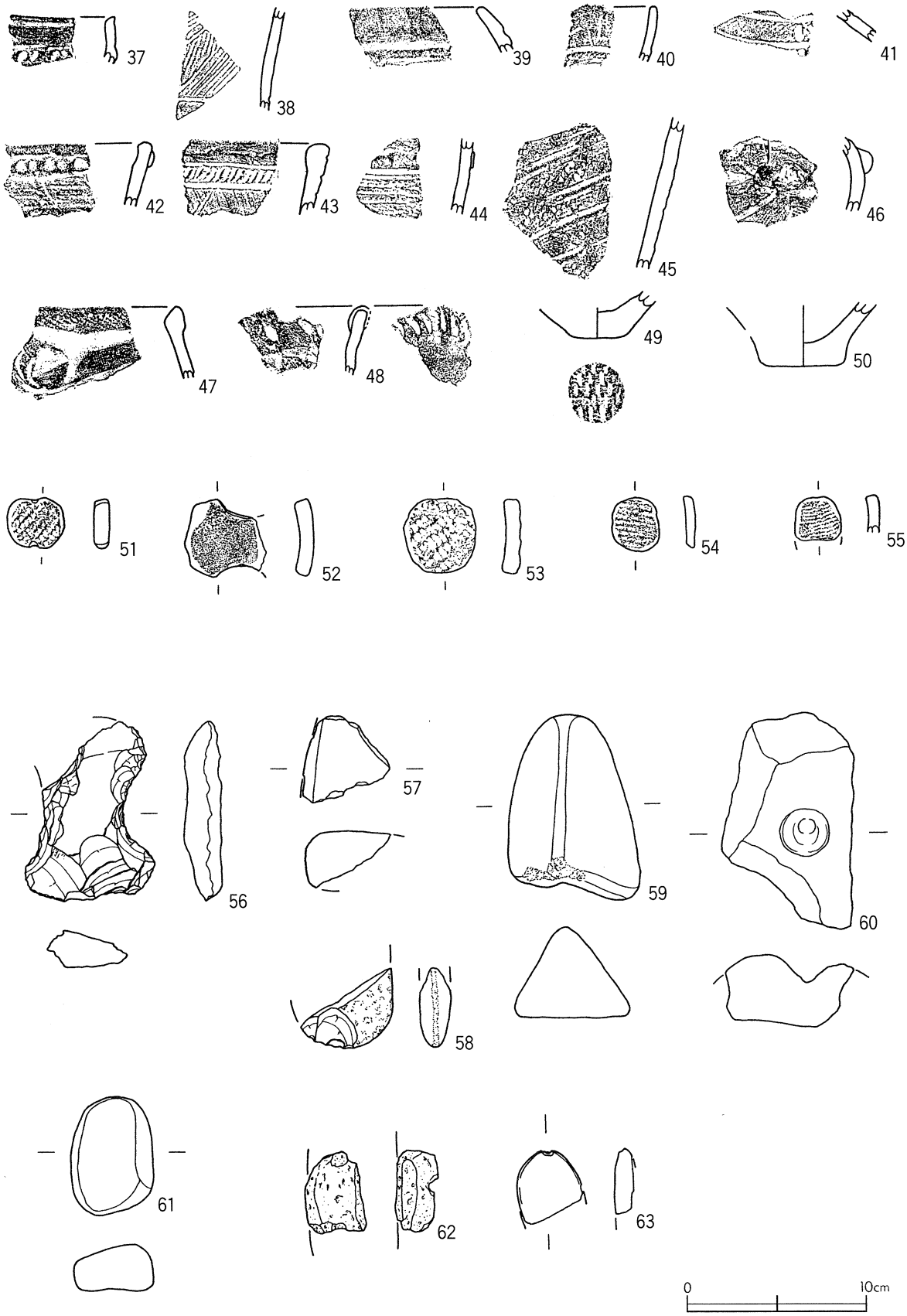
第28図　遺構外出土遺物－1

20は波状縁で水平に浅い沈線文が１条巡り、下半は単節 RL である。21は平縁で大きく内彎する器形を呈する。口縁に沿い浅い沈線文が１条巡り、口縁上の無文帯幅はごくわずかである。下半は単節 RL である。22は平縁で口唇部は先細り状となる。微隆起線文による曲線文が描かれ、縄文は残存部には見られない。23は波状縁で口唇部は外傾している。地文には整形時の斜位削り痕が残り、０段多条 RL が施文されている。24は平縁で地文は整形時の斜位削り痕が残る。口縁下は若干無文とし、沈線文が垂下している。25・26は両側がなでられる微隆起線文により曲線文が描かれ、25は多条の LRL が充填される。26は原体不明で、外面には炭化物が付着していた。27は沈線文が横位に１条巡り、下半は垂下沈線文である。28は浅い横位沈線文により上半に段を有し、ここに直線的な沈線文が見られる。下半は０段多条 RL である。29は地文単節 RL で垂下沈線文と波状沈線文が交互に施文され、無文帯は見られない。30は地文Ｌ撚糸文で平行沈線文による曲線文が描かれ、沈線間は無文となる。31は３条の沈線文が垂下し、沈線文間は磨消される。０段多条 RL である。32も０段多条 RL で幅の狭い垂下沈線文間は磨消される。33は０段多条 RL、幅広く磨消され無文となり一部沈線状に浅く凹んでいる。34は曲線的な沈線文による区画文で、区画内は単節 LR が施文されている。35は平行沈線文による曲線文が描かれ、沈線間は単節 RL が充填される。20～35は第Ｖ群で25～30は１類、31・32は２類、20～24・33～35は３類に相当する。35は次群の範疇としても捉えられよう。

36は波状縁で波頂部に半月状の沈線文を施文し、この単位文を挟んで幅の広い口唇部上に沈線文が巡る。口縁部は波状縁に沿った沈線文が巡り、沈線文下には単節 LR が施文されている。37は波状縁で口唇部がやや内削ぎ状を呈する。外面は波状縁に沿い沈線文が１条巡り、下半は水平に沈線文と刻文が連続する貼付文が巡る。38は下半に沈線文が１条巡りこの下は無文、上半は数条の沈線文により三角形を基調とした区画文が描かれ単節 LR が充填されている。外面には炭化物が付着していた。39は平縁で内彎する鉢形を呈する。口縁に沿い沈線文が２条巡り、この間には単節 LR が充填される。40は鉢形を呈する。口唇部は小波状を呈し、口縁部は沈線文が１条水平に巡る。単節 LR か。41は鉢形土器で平行沈線文間は単節 LR が充填、沈線文間には縦連対弧文が施文される。42は平縁で、口縁に沿い低い楕円形押圧を連続する貼付文が１条付される。下半は横位条線文で、地文の有無は不明である。裏面は幅広で浅い沈線文が１条巡っていた。43は平縁で口唇部はやや丸みを帯び、頂部は平担面を残す。平行沈線文間には斜刻文が連続し、下半は斜位沈線文が描かれる。地文は縦位の幅広の条線文で、外面には炭化物が付着していた。44は押圧された低い貼付文が１条巡り、下半は横位条線文で地文の有無は不明である。45は地文単節 LR で半截竹管状工具による斜位沈線文が描かれる。46は屈曲部で、横位に連なる「８」字状の貼付文を付している。下半は地文単節 LR、曲線的な沈線文が描かれ磨消が見られる。36～46は第Ⅵ群で36～38は１類、39～41は２類、46は３類、42～45は４類に相当する。

47は平縁で、口唇部は内傾し厚みを有する。口縁に沿い幅の広い沈線文で三叉文が描かれ、沈線文上には単節 RL が施文されている。48は左右非対称の波状縁で、波頂部に短沈線文がひかれる扁平な貼付文が付される。口唇部の片側にも同様の短沈線文がひかれていた。下半は波状縁に沿った沈線文で、縄文の有無は不明である。47・48は第Ⅶ群で47は安行３ａ式、48は安行３ｂ式以降に相当しよう。

49・50は無文底部である。49は底径3.2cmで底面には１本越え２本潜り１本送りのザル編み痕が見られた。50は底径4.5cmである。49は第Ⅵ群、50は第Ⅷ群に相当する。



第29図　遺構外出土遺物－2

51～55は土製品で51・52は土錘である。51は全周磨られており横長の楕円形を呈する。52も横長で紐掛け部が大きく打ち欠かれている。打ち欠きの土錘はこの１点であった。53～55は土製円盤で54・55は楕円形である。

（単位：cm、g）

No.	名　称	残存	大きさ	重量	整形	文　様	時期	備　考
51	土錘	完形	2.7×3.2	9.7	全周磨り	単節LR	第Ⅴ群	切り目１対
52	土錘	約3/4	4.2×(4.6)	(17.9)	打ち欠き	無文	不明	打ち欠き１対
53	土製円盤	完形	4.1×4.1	18.7	全周磨り	０段多条RL	第Ⅴ群	
54	土製円盤	完形	2.9×2.6	5.6	全周磨り	単節RL？	第Ⅴ群	
55	土製円盤	一部欠	(2.3)×2.6	(5.1)	全周磨り	単節RL	第Ⅴ群	

２．石器

遺構外より計11点の石器が出土している。内訳は打製石斧－１点、磨製石斧－２点、磨石類－２点台石－１点、砥石－１点、石錘－１点、石核－２点、剥片－１点である。このうち石核・剥片は図示していない。

56は打製石斧である。扁平な礫を素材とし体面中央部には礫面を残している。分銅形を呈し抉入部は一部磨滅していた。風化が著しい。

57・58は磨製石斧である。57は側縁部に稜を有し断面形が方形を呈するいわゆる定角式石斧の基部付近である。残部の厚みから比較的大形と思われる。全体は滑らかに研磨されていた。58は磨製石斧の未製品刃部である。両体面は細かな敲打痕により整形されており、研磨の前段階と思われる。

59は断面三角形を呈する磨石類である。全体の形状は三角錐で面積の広い側の稜部に広範囲の敲打痕が見られた。61は完形で全体が滑らかに研磨されていた。

60は台石の一部で本来の形状は推測できない。集中的な敲打により深さ1.5cm程の凹みを１孔有する。全体は著しく風化していた。

62は砥石で被熱により赤化している。裏面に断面形が「U」状の溝が１条見られた。あまり発泡していない軽石を用いている。

63は石錘で扁平の礫を用いている。裏面は大きく剥落しており、剥離面も含めて全体が風化していた。剥離の打点は側縁部方向からなされており、抉入部作成時のものではない。

未実測の石核はメノウとチャート製、剥片は黒色安山岩製である。

（単位：cm、g）

No.	名　称	残　存	長さ	幅	厚さ	重量	石　材	備　考
56	打製石斧	片側刃部欠	(9.8)	7.2	2.1	(130.0)	安山岩	分銅形　礫面残す　風化
57	磨製石斧	一部	(4.8)	(4.8)	(2.1)	(68.6)	凝灰岩	基部付近　定角式
58	磨製石斧	約1/4	(4.1)	(5.1)	(1.7)	(35.3)	ホルンフェルス	未製品　細かな敲打により整形
59	磨石類	完形	10.3	7.1	5.0	427.1	砂岩	断面三角形　下端稜部に敲打痕
60	台石	一部	(11.8)	(7.4)	(4.6)	(443.4)	絹雲母片岩	集中敲打による凹み１孔　風化
61	磨石類	完形	6.5	4.6	3.6	118.8	安山岩	
62	砥石	一部	(4.6)	(3.3)	(2.4)	(11.6)	流紋岩質軽石	溝１条　発泡小　被熱赤化
63	石錘	約2/3	(4.0)	(3.5)	(1.0)	(19.1)	黒色安山岩	切り目１ヶ

第5章　まとめ

1．遺構

調査区全域にわたり遺構が検出された。住居跡は前期後半浮島Ⅲ式期が1軒、中期後半加曽利ＥⅣ式期が1軒で、時期不明の竪穴状遺構が1基であった。前期後半期の住居跡は茨城県内では利根川流域と県央太平洋側に分布しており[1]、土浦市では今回の調査で初めて検出された。浮島式期の住居跡の特徴として柱穴が多数存在する点・複数の炉跡が見られる点があげられるが、第3号住居跡もこれに該当している。特に若干のテラス面を有する点で石岡市の大谷津Ｂ遺跡1号住居跡との類似が認められた。

土坑は性格不明で時期決定できないものがほとんどであるが、第6・7号土坑は形状・深さ共に類似しており、出土土器からも第1号住居跡との関連が窺える。また浅い土坑が多いなかで第1・10・14・15号土坑は深さが70cm以上あり、墓坑もしくは貯蔵穴の機能を果たしていたと考えられる。

本遺跡は調査面積がわずかであったが、同じ台地上西側に位置する宮前遺跡との関連は大いに注目される。両遺跡の調査区は直線距離にして約100mしか離れておらず、「両者は小谷を狭んで対峙しており同一遺跡の可能性が強い」[2]とかつて示唆されたことがある。宮前遺跡からは阿玉台Ⅳ式から加曽利ＥⅣ式期の住居跡が38軒検出されており、最も多い時期は加曽利ＥⅢ式期の17軒であった。詳細な遺構配置・変遷は既刊されている報告書に譲るとして、宮前遺跡で発見された加曽利ＥⅣ式期の住居跡は1軒あり、調査区北端の台地先端部に位置している。本遺跡第1号住居跡は台地西端に位置しており、宮前遺跡の加曽利ＥⅢ式期の住居跡外側を南側から囲むように、加曽利ＥⅣ式期の住居跡が台地上に占地していたと考えられる。このことから縄文時代中期後半期の両遺跡が、1つの集落を形成していたことは十分に推察される。

2．遺物

本遺跡から中期後半に次いで2番目に多く出土している浮島式土器は、東関東地域を中心とする前期後半期の土器型式のひとつである。当概地域の土器編年の確立に最も精力的に取り組まれた西村正衛氏により、利根川流域を中心にいくつかの貝塚を層位的に検証された結果、浮島Ⅰ～Ⅲ式が設定されている[3]。本遺跡の概期遺構は住居跡1軒、土坑1基とわずかであるが、本書の分類はおおむね氏の分類に沿って行なった。変形爪形文で口縁部に刻文・条線帯を有するものはすべてⅢ式の範疇とし、第9図9・第16図8のように浅く繊細な変形爪形文も含まれる。しかし、第22図2のように条線帯と有節平行線文が組み合わされる例もあり、条線帯の出自が遡ることは十分に考えられる。また諸磯ｂ式は浮島Ⅱ・Ⅲ式に対して約25％出土しており、比較的多い点が注目される[4]。

中期後半は加曽利ＥⅣ式が第1号住居跡よりまとまって出土した。第9図1～6は口縁部文様帯を除きすべて縄文のみの施文であった。器形はバラエティに富み、5は括れの緩やかな点となでによる口縁部無文帯の作出法からやや後出と思われる。2は器形から3と同様の突起を有する土器であろう。

後・晩期は堀之内式から安行式まで希薄ながらも出土している。晩期は安行3ａ式以降の土器が2点出土し（第29図47・48）、特に48は小片だが浅く幅の広い沈線文が前浦式に類似するものであった。

3．終わりに

今回調査を行なった権現前遺跡からは、市内で初の浮島式期の住居跡を検出し、また同じ台地に位置する宮前遺跡と中期後半期において同一の集落であることが予察された。このことは大きな成果といえる。本書が花室川流域の縄文史の解明に少しでも役立つことができれば幸いである。

また本書の作成にあたり、多くの方々のご協力を得、ご指導、ご助言を頂きました。文末ながら厚く感謝の意を表します。

註

（1）縄文時代研究班 「茨城県における縄文時代前期後半の住居跡の形態について」『研究ノート』3号　茨城県教育財団　1994

（2）茂木雅博 『土浦の遺跡』―埋蔵文化財包蔵地―　土浦市教育委員会　1984

（3）西村氏以前の佐藤伝蔵・若林勝邦両氏の報告や浮島式の名称設定を行なった江坂輝弥氏についても触れるべきであろうが、ここでは割愛させていただく。

（4）西村氏の「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」ではその比率は約10%、同じく「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚」では6.7%である（文献　1984）。

参考文献

1982　茨城県教育財団 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告XIII

1984　西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究―貝塚を中心として―』早稲田大学出版部

1984　土浦市教育委員会 『土浦の遺跡』―埋蔵文化財包蔵地―

1989　瓦吹　堅 「浮島、興津式土器様式」『縄文土器大観』Ⅰ　草創期、早期、前期　小学館

1991　財団法人印旛郡市文化財センター 『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書』Ⅱ

1994　縄文時代研究班 「茨城県における縄文時代前期後半の住居跡の形態について」『研究ノート』3号　茨城県教育財団

1995　松田光太郎 「浮島式土器の研究」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学考古学会

報告書抄録

ふりがな	ごんげんまえいせき
書名	権現前遺跡
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　礼子　　黒澤　春彦
編集機関	土浦市遺跡調査会
発行機関	土浦市教育委員会
所在地	茨城県土浦市下高津2-7-36　　TEL 0298(26)1111㈹
問い合せ先	茨城県土浦市上高津1843　　上高津貝塚ふるさと歴史の広場 TEL 0298(26)7111
発行年月日	2000年(平成12年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごんげんまえいせき 権現前遺跡	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 まりやましんでん 摩利山新田 79-1外	08203	A－18	36°14'	140°15'	1997.11.25 ～12.20	500m²	店舗建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現前遺跡	縄文時代 (前・中期)	集落跡	竪穴住居跡２軒 (浮島式期－１軒) (加曽利Ｅ式期－１軒) 竪穴状遺構１基 土坑	縄文土器 (浮島式期) (加曽利Ｅ式期) 石器 土器片錘	市内で発見例の少ない浮島式期の住居跡、土坑が検出された。

写　真　図　版

試掘確認状況
（２トレンチ）

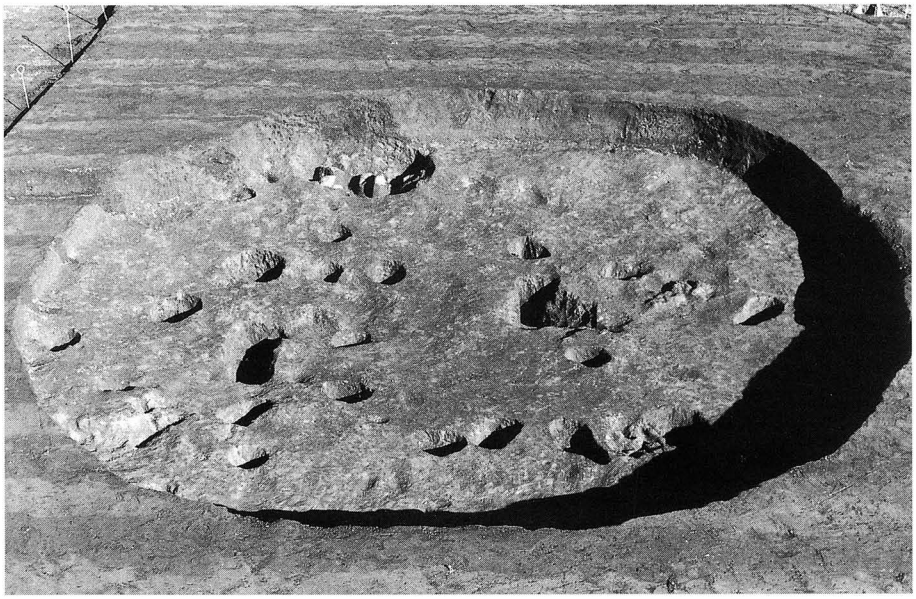
調査終了状況
（北北西から）

調査終了状況
（北から）

第１号住居跡
完掘

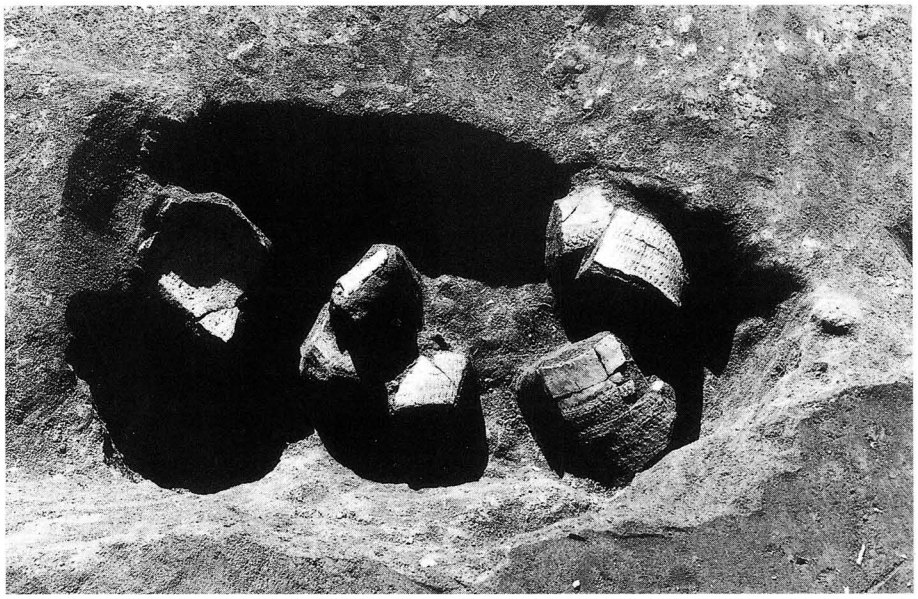
第１号住居跡
遺物出土状況

第２号住居跡
完掘



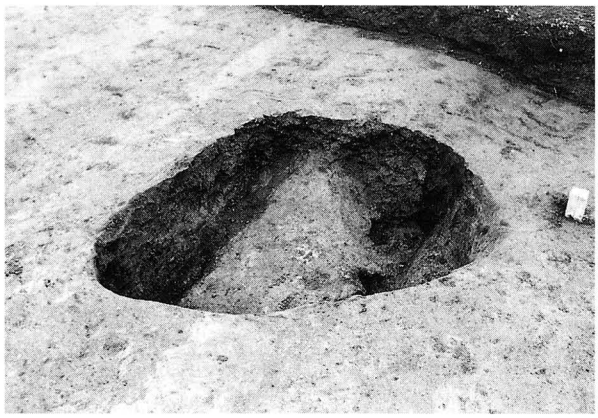
第３号住居跡
完掘

第３号住居跡
遺物出土状況

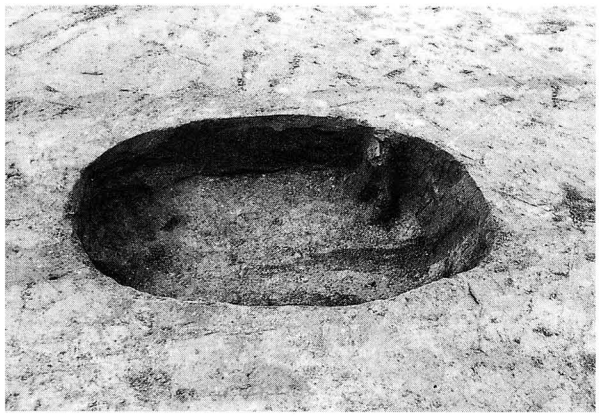


第３号住居跡
ピット内遺物出土状況

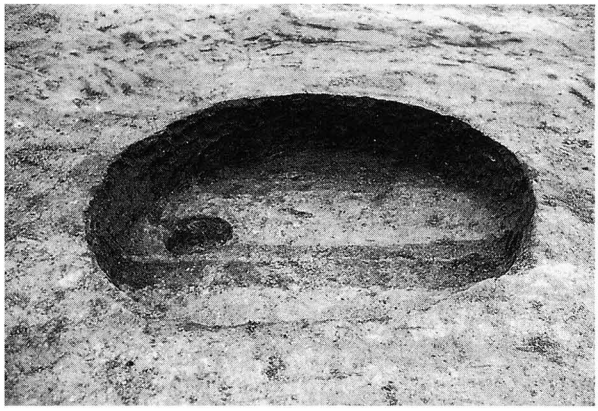
第1号土坑



第2号土坑

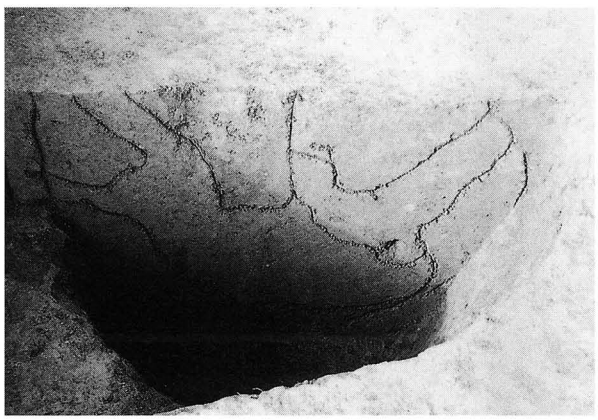


第3号土坑



第4号土坑

第6号土坑



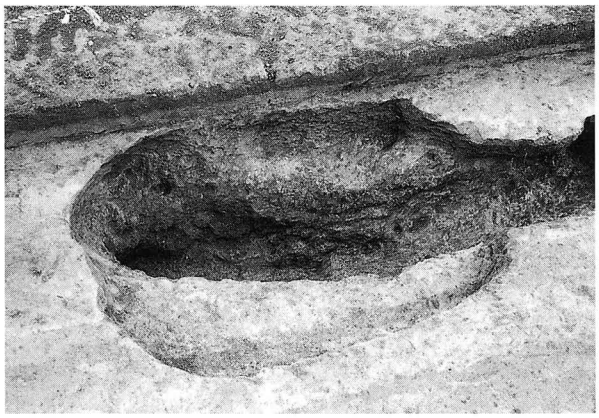
第6号土坑　土層断面

第7号土坑

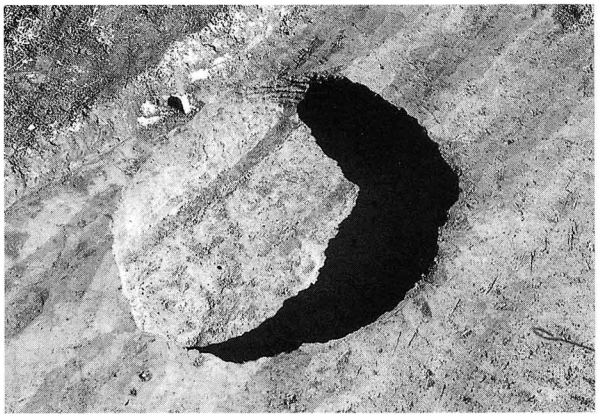
第7号土坑　土層断面

第９号土坑

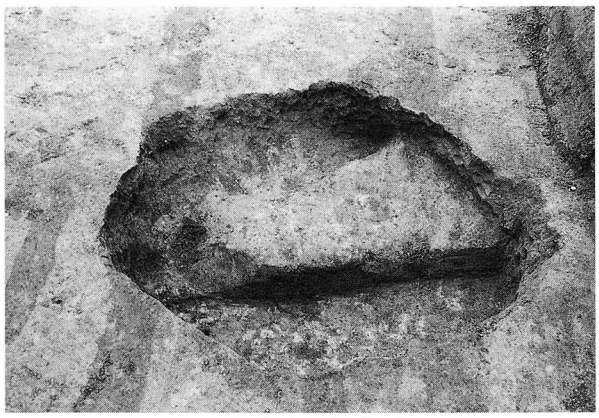
第10号土坑



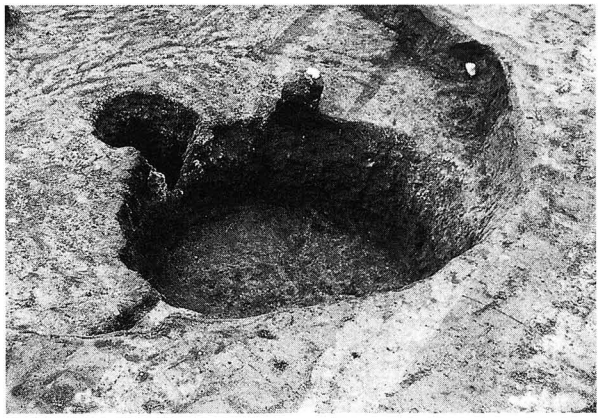
第11号土坑



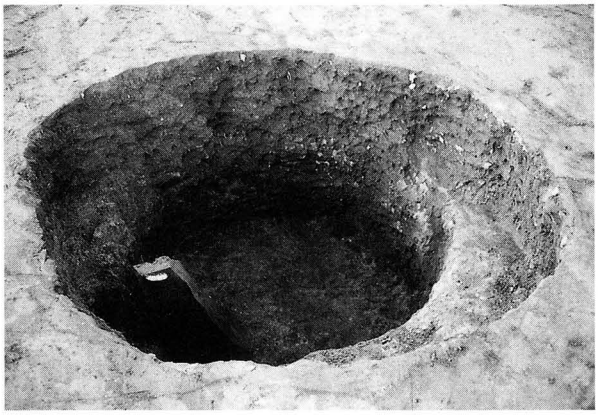
第12号土坑



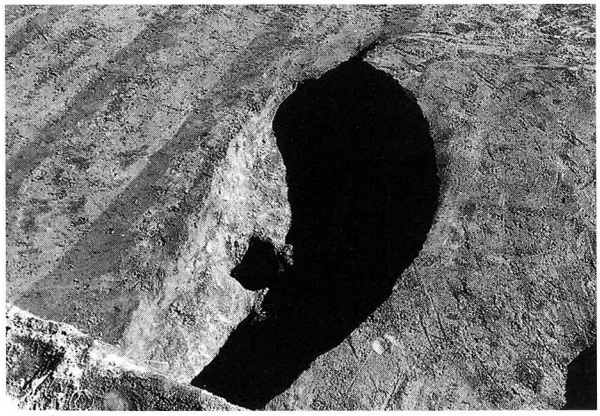
第13号土坑



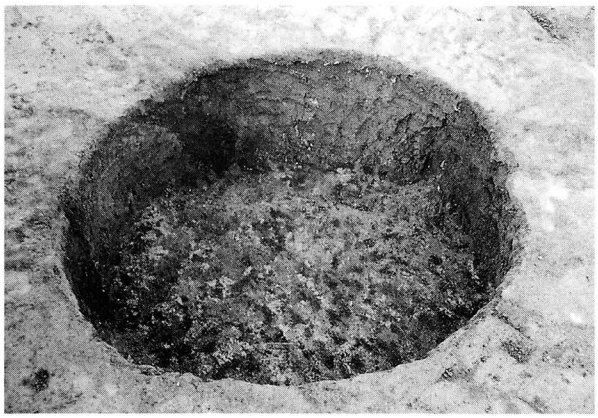
第14号土坑



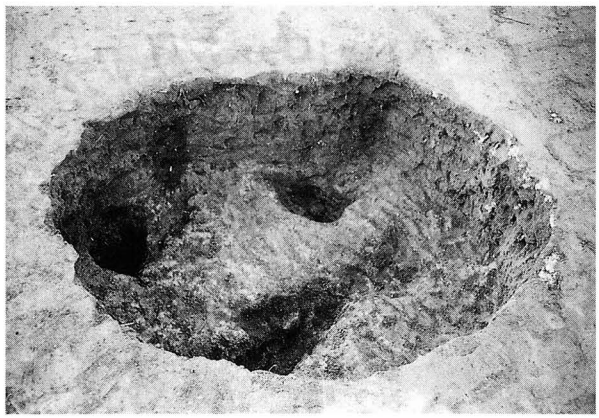
第15号土坑



第16号土坑



第17号土坑



第18号土坑

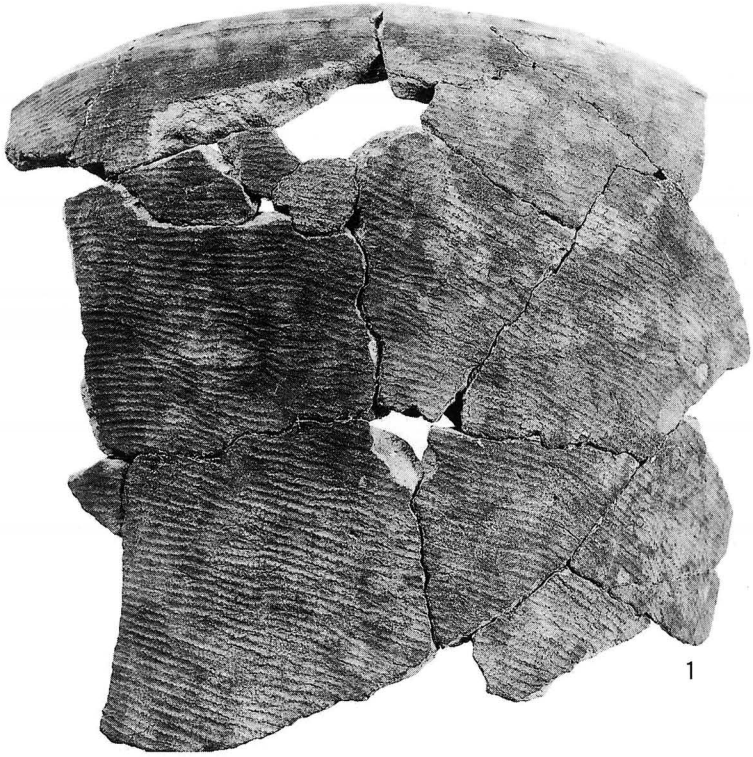
第19号土坑

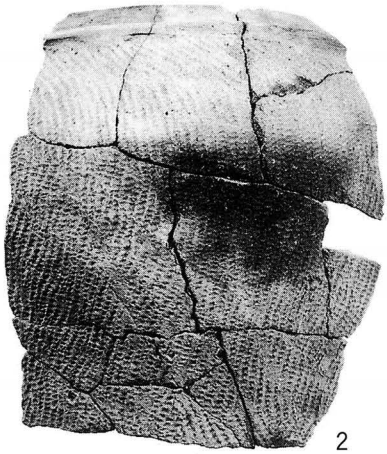
第19号土坑遺物出土状況

テストピット（No.１）土層断面

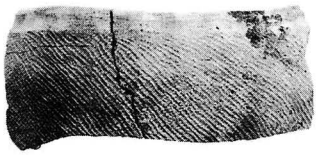
テストピット（No.２）土層断面

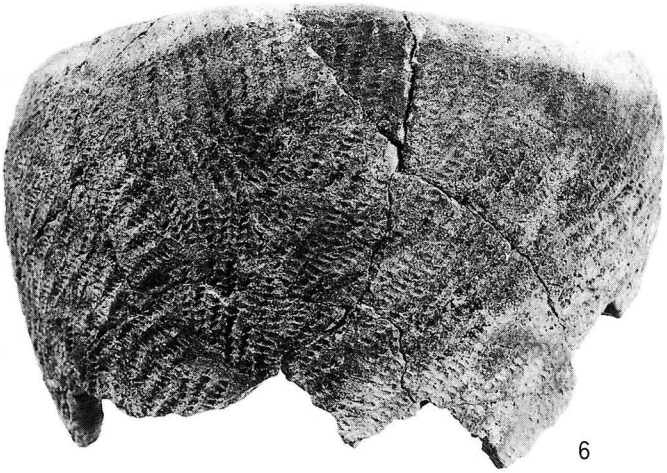
作業風景

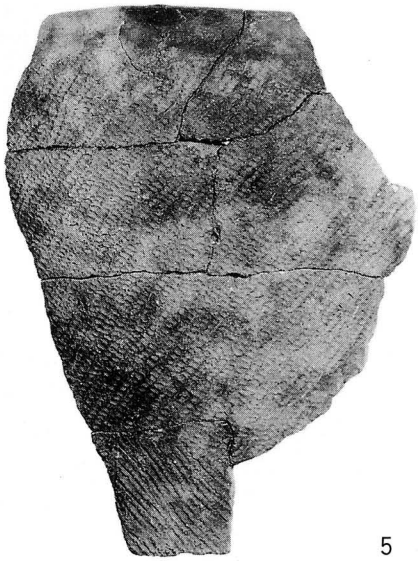

1

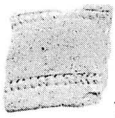

2

3


4

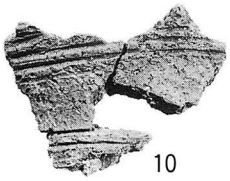

6


5


7

8

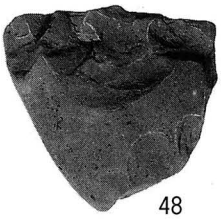
9


10

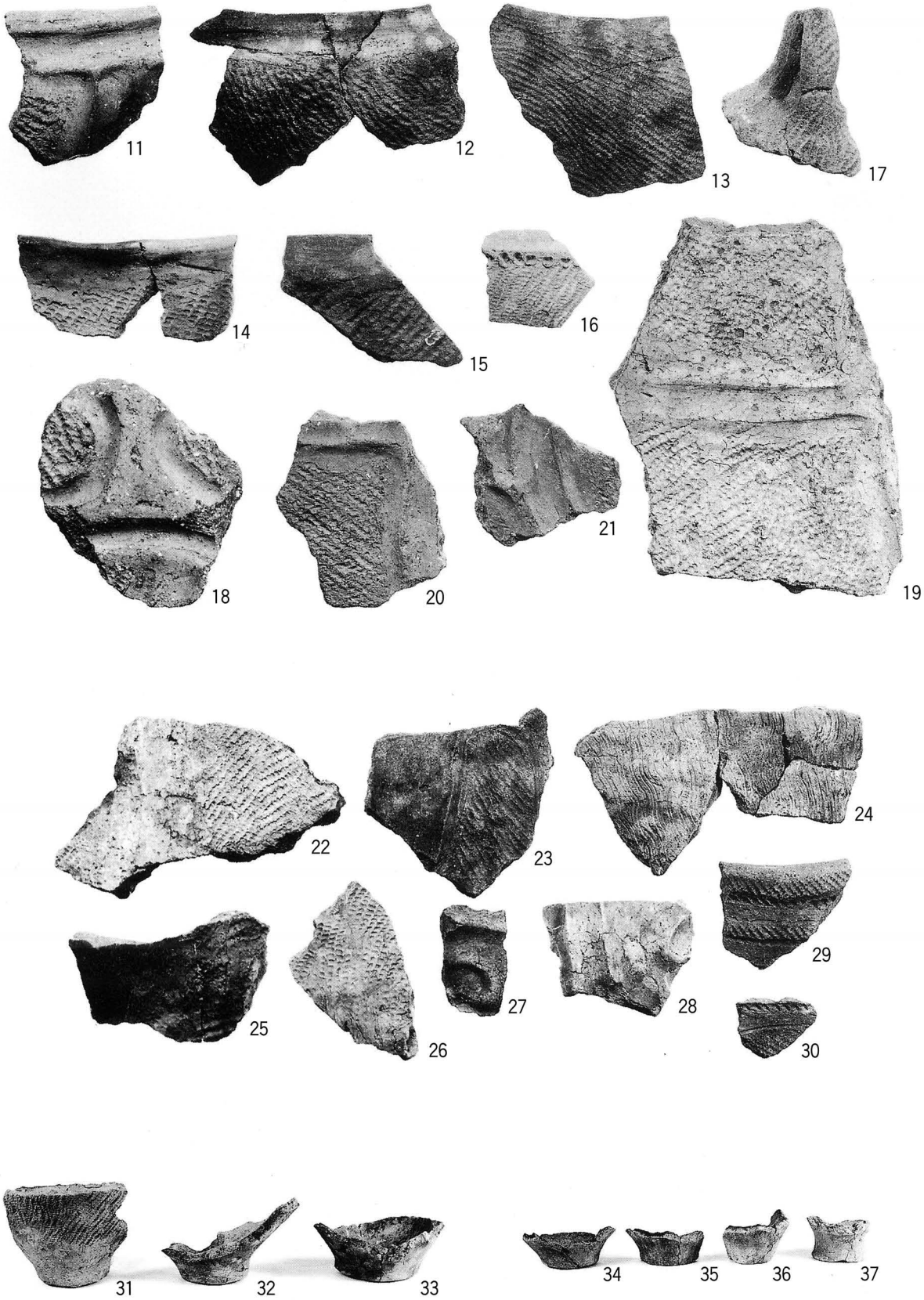
45

46

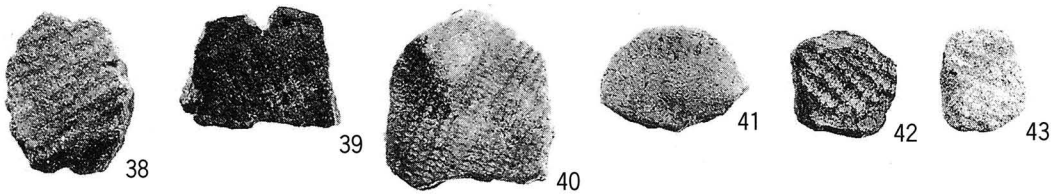
47


48

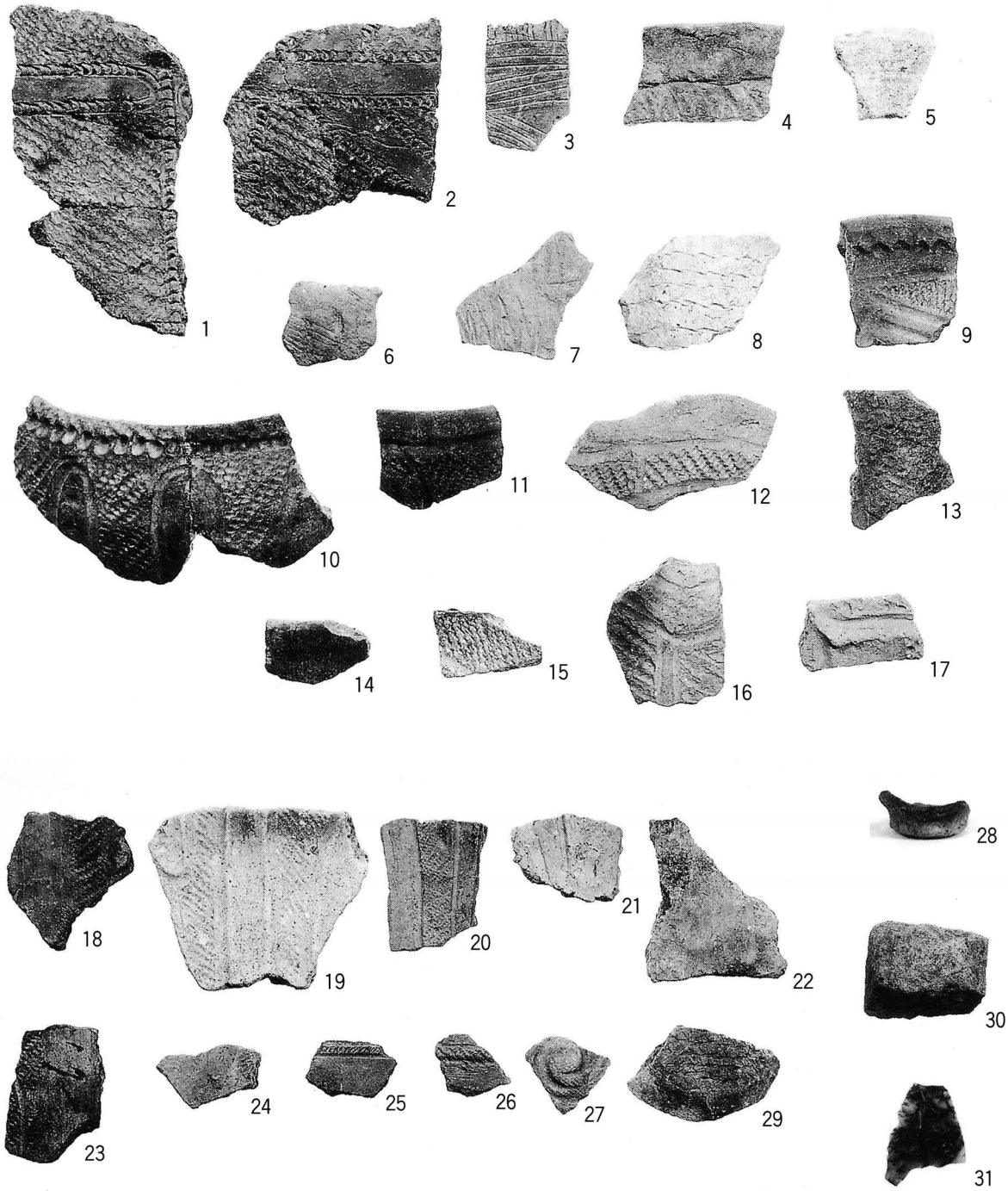
第１号住居跡出土遺物


11
12
13
17
14
15
16
18
20
21
19
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

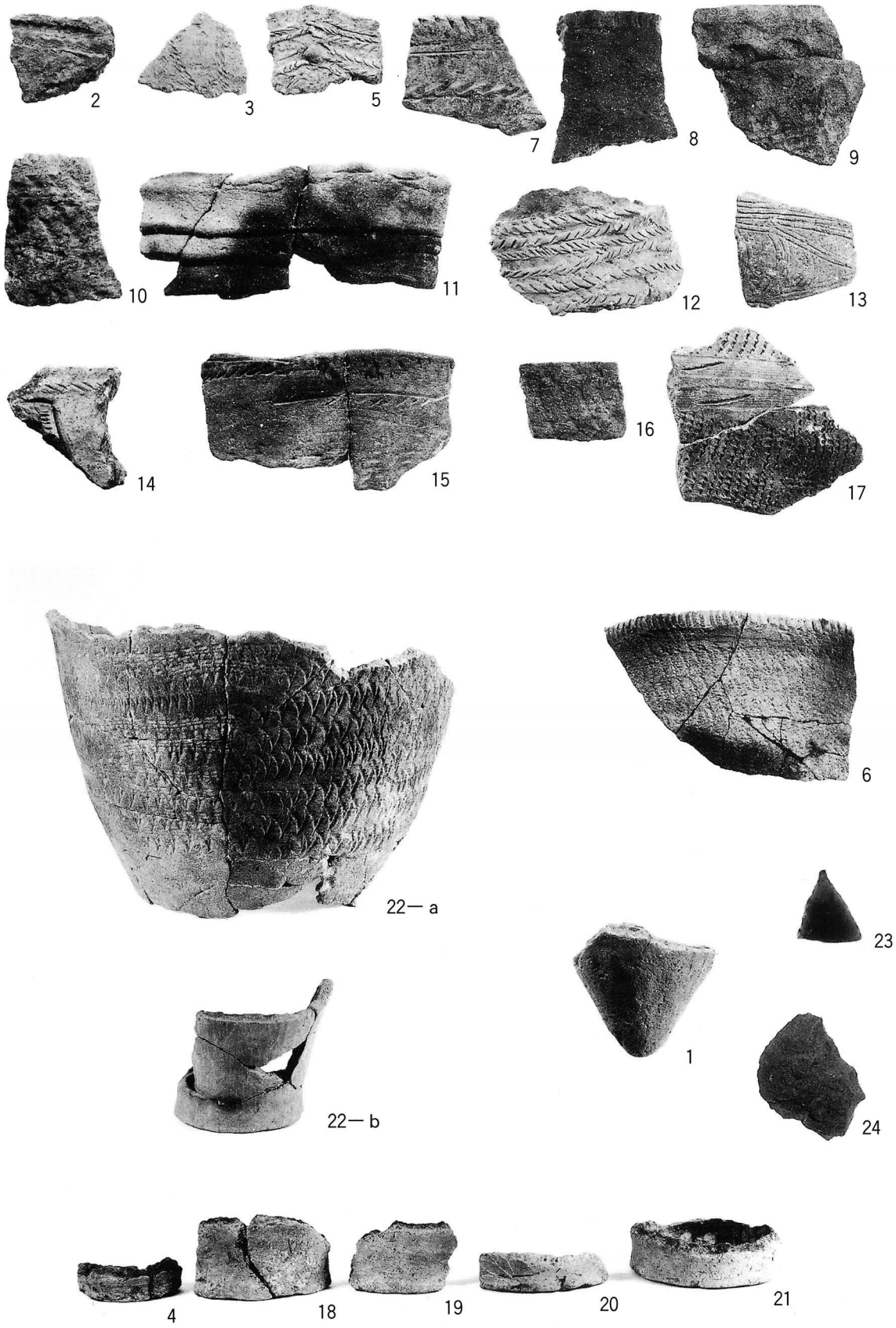
第１号住居跡出土遺物



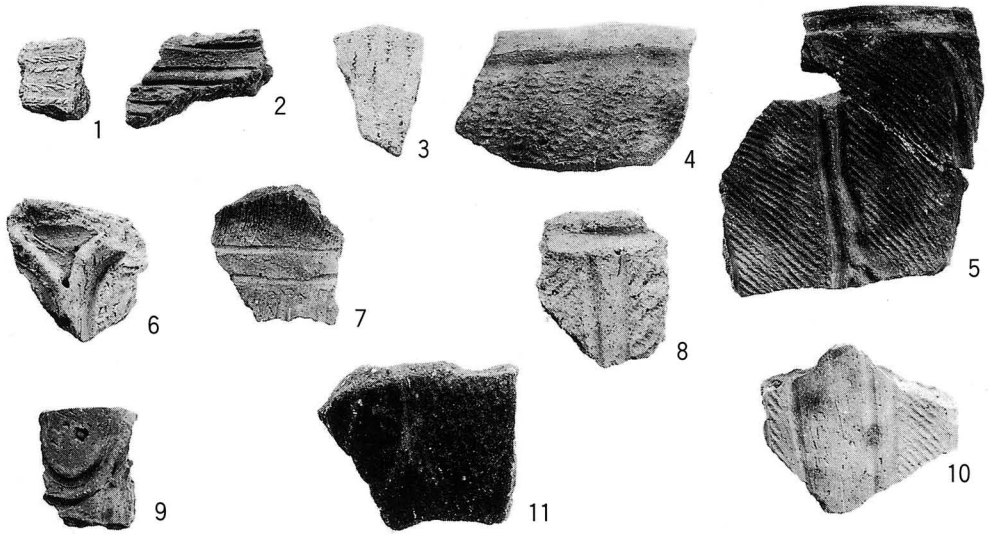
第１号住居跡出土遺物



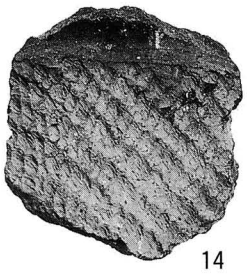
第２号住居跡出土遺物



第３号住居跡出土遺物



第１号土坑



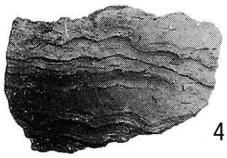
第１号土坑

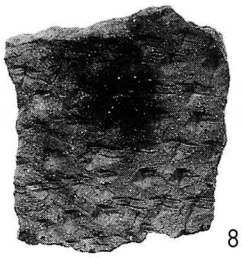
第７号土坑

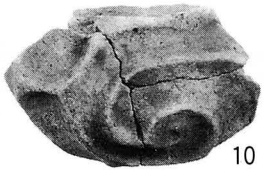
第７号土坑

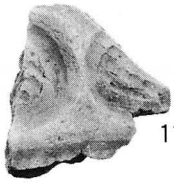
第４号土坑

第６号土坑



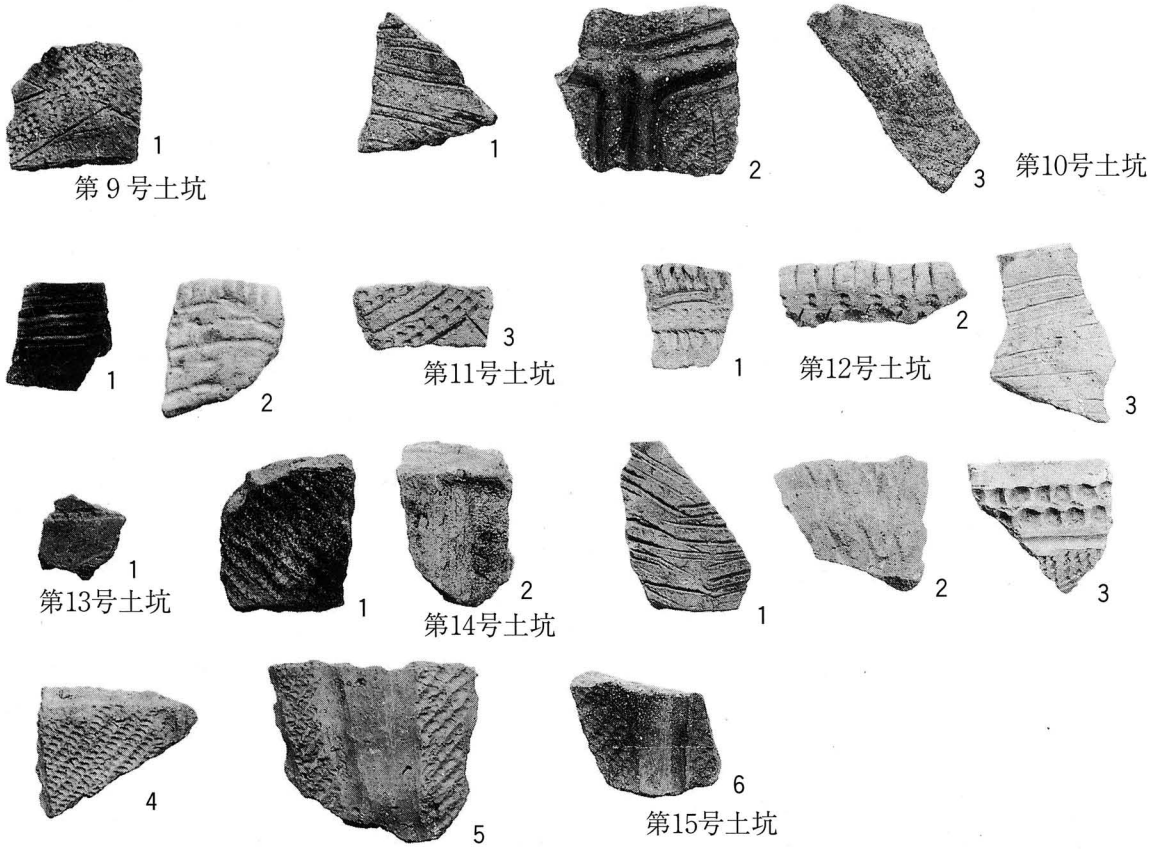




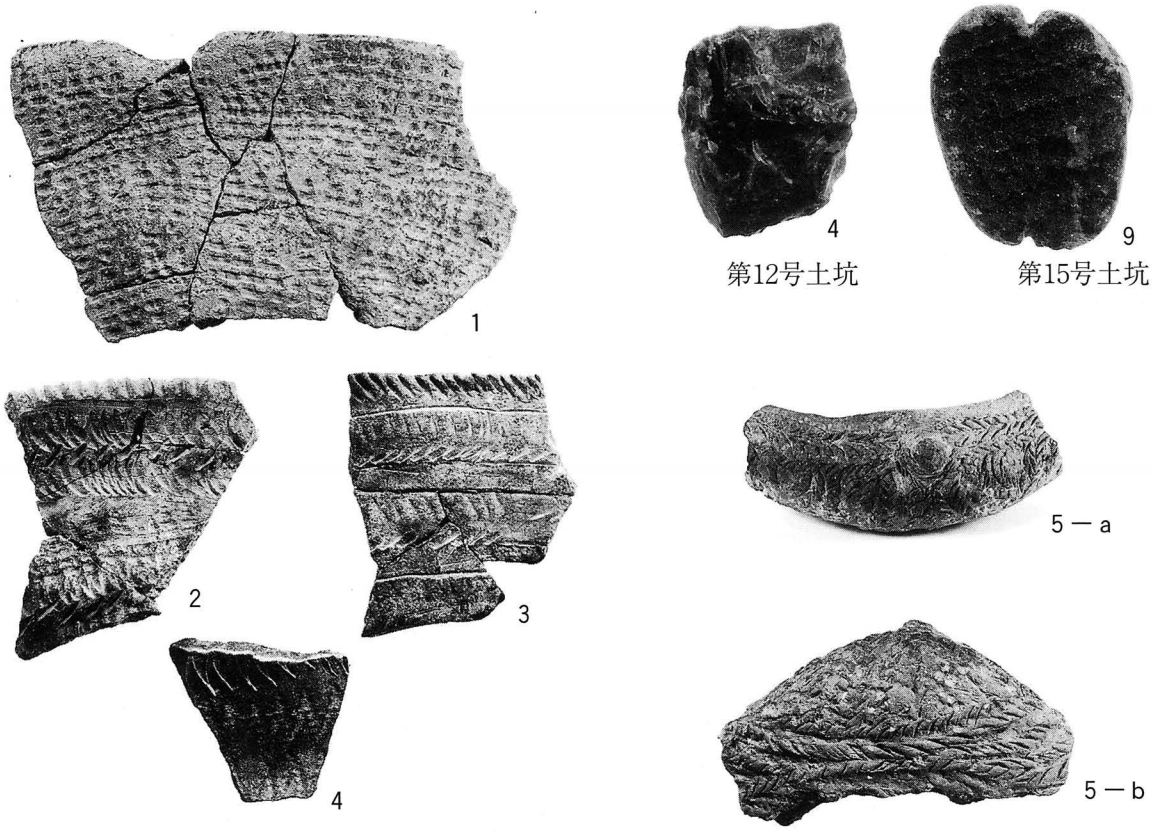


第７号土坑

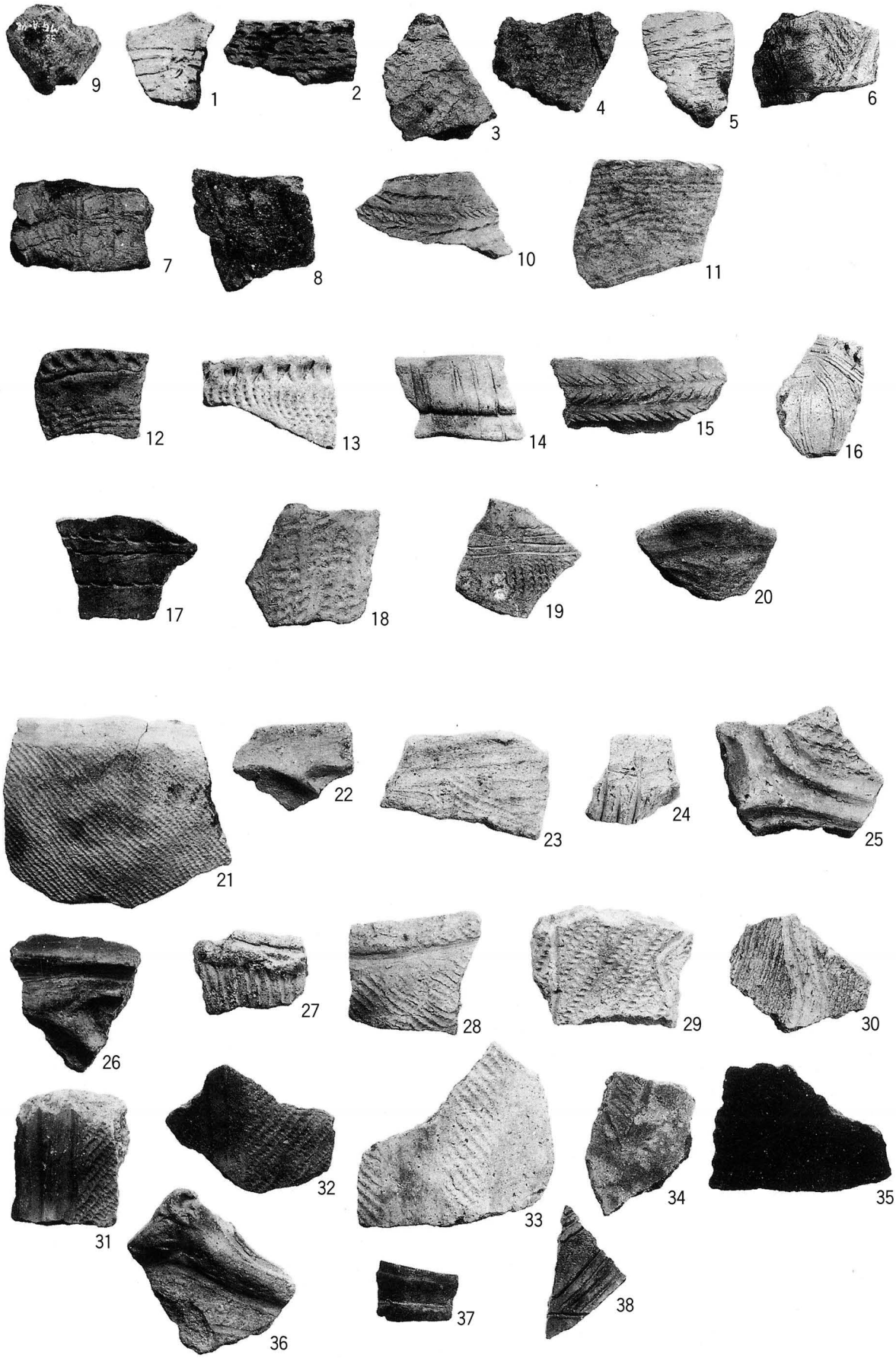
第１・４・６・７号土坑出土遺物



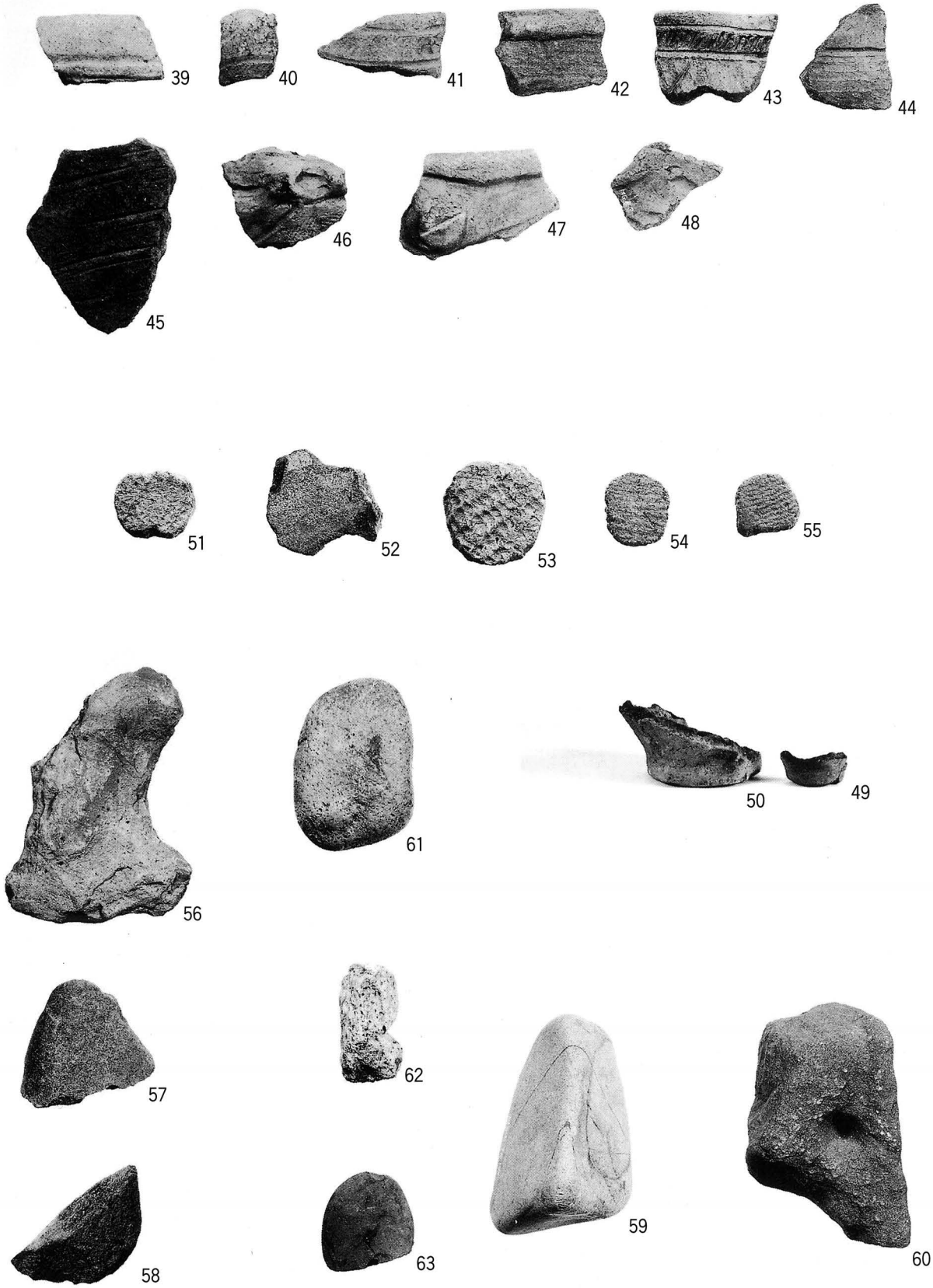
第９～15号土坑出土遺物



第19号土坑出土遺物


9
1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

遺構外出土遺物


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
51
52
53
54
55
56
61
50
49
57
62
59
60
58
63

遺構外出土遺物

権 現 前 遺 跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発 行 日	2000年３月31日
編 集	土浦市遺跡調査会
発 行	土浦市教育委員会
問い合せ先	上高津貝塚ふるさと歴史の広場 300-0811 茨城県土浦市上高津1843
印 刷	㈱いなもと印刷